

仮面ライダーゲート

YOPPY1031

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

知っているか？世界は幾つも存在する。一つじゃないんだ。中には世界を守るガーディアン、仮面ライダーがない世界がある。そんな世界に怪人が現れたらどうするって？仮面ライダーが守るに決まってるだろ？

シヨン（言葉・紡）の「仮面ライダー電王・ブレイズ」とは何度かコラボしてて、シヨンの作品も見ないと理解できない部分が多々あります。下のリンクから移動してください！

<https://syosetu.org/novel/158867/>

27話の感想で「ツインプレイカーブレイカーって何？」という質問がありました。分からない方は、先にこちらを読んでください！

<https://syosetu.org/novel/179663/>

目次

世界の門番	1
変身	4
始まりの物語	14
ライダーの居ない世界	21
仮面ライダーのいる世界	24
仮面ライダーW	28
折れない剣	36
仮面ライダーブレイド	41
日常を侵略する者	51
2018：仮面ライダー電王 ブレイズ	61
怪盗ライダー	69
フリリップの苦勞	73
天才科学者ヒーローの猜疑	76
仮面ライダービルド	83
仮面ライダーアイン	93
不屈の魂	107
熱血刑事はなぜアイドリングなのか	114
仮面ライダードライブ	120
決着！仮面ライダーゲート VS アナザーマリア	131
仮面ライダーゲンム	142
時空をかけるライダー	153
仮面ライダーカブト	157
インフイニット・ストラトス ヴレイズ（ISV）	163
俺、参上！	169

仮面ライダー電王	172
2068：仮面ライダーオリス	184
破壊の侵略者	198
異世界の魔法使いと白竜の使い魔	207
鏡の世界	216
仮面ライダー龍騎	223
キバっていくぜ！	236
仮面ライダーキバ	241
《序章》終わりの始まり	249
1st. Epアマゾンデルタ	251
1st. Epソウル	254
1st. Epヘキサ	257
2nd. Epゲート	261
2nd. Epオリス	267

世界の門番

この世界には仮面ライダーは存在しない。

「フアハハハハハハハア！ひれふせる人間共が！俺にひざまずけ、言うことを聞けないなら死んでしまえ！」

「いやあ！」

存在してはいけない。

「た、助けてくれえ！」

でも一人だけ、存在が世界に許されたライダーがいる。それは

「仮面ライダー！」

「はいはい、お呼びでしょうか！つとお」

「グボアア！」

「いくら俺がとりのがしたとは言え、好き勝手やってくれたなあ
インベイダー侵略者？」

「な、何なんだ貴様は！一体何者だ！」

「ああ俺？俺はへ仮面ライダーゲート、世界の門番だ」

「仮面ライダーだど!?そんな馬鹿な！この世界は仮面ライダーが存在しないハズだ！」

「へえ、ちゃんと下調べしてんじゃん。でも残念、勉強不足だったな。俺はどの世界においても干渉することが出来るライダーなんだよ」

「な、なんだと!?!」

仮面ライダーゲート。その名の通り、世界の扉を管理する門番だ。自らが装着する「ゲートドライバ」に「ライドキー」を刺し、回すことでライドキーの力を引き出して変身する仮面ライダー。本来、自分の居るべき空間でインベイダーを抑えるのだが、万が一のために、世界に干渉する力を持つ事が許されたライダーだ。まあ、ゲートの変身者はその力を使って毎度異世界に行ってるのだが。

「さて、殲滅開始」

ゲートはそう言って、インベイダーに向かって走り出した。

「くっ！お前ら、行け！」

インベイダーは自分の力を使って未熟なインベイダーを生み出し、

ゲートに對抗した。

「いやあ流石にこの数じゃ素手はキツいか。よし、あれ使おう！」

ゲートはそう言っただけからともなく専用武器、ヘガンブレードキーを取りだし、数多のインベイダーたちに対抗した。

「オー！オー！オー！そしてお前にもう一発！大したことねーな侵略者！」

「グヌヌヌ！まだまだ、まだ終わらん！」

インベイダーは更に数を増やし、ゲートに対抗した。しかし、その無策な戦い方のせいで攻撃はゲートに当たらず、むしろどんどん数が減っていった。

「この無能共が！もういい、俺が直接相手をしてやる！」

「へえ、やつとやる気になった？」

お互い相手に向かって走りだし、そして衝突した。ゲートが一方的に押ししており、インベイダーを圧倒している。

「グツ、グハアツ。」

「トドメだ。いくぜ？」

ゲートはベルトに刺さったライダーキーをガンブレードキーに刺し変え、回して必殺技を発動した。

「ゲート！ワールドブレイク！」

紫がかった光をまとった剣を構え、ゲートの目の前に何枚もの扉が出現する。ゲートが剣をつき出して右に回すと全ての扉が開いた。ゲートは思い切り地面を蹴り、一飛びで扉を潜り抜けていく。やがて剣はインベイダーに突き刺さる。

「ハアアアアアアア！」

後ろを向いて力強く剣を右へ振り、インベイダーの世界を壊した。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

次の瞬間、インベイダーは断末魔と共に爆発して四散した。

「さて、今日も世界を守ったし、帰るか！」

ゲートはそう言ってオーロラを呼び出し、自分のあるべき世界へ消えていった。

今さらだが、これは仮面ライダーゲートが幾つもの世界を守る話である。

変身

仮面ライダー。それは、世界を守る為にバイクにまたがって世界を駆け回る仮面のヒーロー。

これが世間一般の認識。

じゃあ、仮面ライダーはなんでマスク、つまり仮面をかぶるか知ってるか？

答えは至って簡単、自分の涙を隠すためだ。

証拠として、仮面ライダー1号と2号には、涙ラインというものがある。

ショッカーは自分を改造した諸悪の根元だが、仮面ライダーという自分を生み出した仲間でもある。その仲間を倒さなければならぬという悲しみから、涙ラインというらしい。

えっ？さっきからずっと話しているお前は誰だって？すまない、自己紹介を忘れてた。

俺の名前は「戸島 鍵^{としま けん}」。元々ただの一般人だったが、今は訳あって仮面ライダーゲートをやっている。さっきの説明はこの物語を知るにあたって仮面ライダーという概念を知っておいて欲しかったからだ。

話は逸れるが、今回は俺の初変身の時の話をしようと思う。

「はあ、平和だなあ〜」

俺は大きくアクビをし、書き途中の絵が描かれたスケッチブックの上に顔を埋め、うつ伏せになる。

「どうした？でけえアクビなんかしてよ」

「オヤジさん。いやさ、今日も平和だなあと思つてさ」

「何言つてんだお前は。平和が一番じゃねえか」

「そうなんだけどさあ、なんかこう、非日常的な刺激が欲しいっていうか」

俺は無理やり上体を起き上がらせ、自分が書いてる書き途中の仮面ライダーの絵を見る。

「非日常ねえ、ってお前、また仮面ライダーの絵を書いているのかよ！」
店の仕事の作業中のオヤジさんにスケッチブックを見られ、半ば呆なかばれたように言われた。

「べつ、別に良いだろ？ 憧れるくらい。仮面ライダーは本当に凄い、自分の感情を押し殺して、正義の為に戦える。仮面ライダーがあつたから、俺も人の役にたちたいって思えた。正義の為に戦う事は出来なけれど、人々を悪意から守る、セキュリティ管理をする仕事には就けた。今の俺があるのは、どう考えても仮面ライダーのお陰なんだよ」
「そうか。そういう鍵、お前時間大丈夫なのか？」
「えっ？」

オヤジさんに言われ、時計を見る。店にある壁にかかった時計はなんとデジタル時計で、ご丁寧^{ご丁寧}に今日が何曜日かまで教えてくれる。時計に表示されている曜日は月曜日、そして今は8時26分、完全に遅刻寸前である。

「うおおおおおっ!?! 今日出勤じゃん！」

「早く支度しろ！」

「イエス！ボス！」

オヤジさんに怒られたあと、俺は二階に駆け上がり、急いで寝間着から仕事服に着替えて店を出た。

「パンちようだい！行ってきます！」

「おう、行ってこい」

俺は走って駅まで行った。なんとか電車が発車する前に乗ることが出来て、俺は一安心した。電車に乗りさえすればこつちのものなので、後はゆつくりできる。

「何とか間に合ったか。」

しばらくすると電車が発車し、車体が小刻みに揺れ始めた。

発車から数分後、俺は全身で違和感を感じた。それと共に、奇妙な車掌アナウンスが流れてきた。流れるはずの無いアナウンスが。

「次は、風都駅、風都駅。ご降車の際は、足元にお気をつけてお降り下さい」

「よーし、楽しいお仕事へ行く。待て、今風都駅って言ったか？」

風都、それは架空上の都市であって、本来なら実在しない都市の名前だ。それが今車内で流れたのだ。仮面ライダーファンとしては嬉しいが、一般人として聞けば不気味すぎる。

(なんだ今のアナウンス!?俺はまだ夢でも見てるのか!?)

やがて電車から降りる人はいなくなり、電車の扉が閉じた。しばらくするとまた車掌アナウンスが流れてきた。今度は何時ものアナウンスだった。

「次は〜」

「おはようございます」

「おはよう、遅刻ギリギリだな?」

「すみません。今日普通に出勤だつてこと忘れてました」

「まったく、遅刻しそうになったの今年何回目だよ!早く仕事に取りかかれ!」

「分かりました」

課長に説教された後で、自分の席について仕事に取りかかる。すると隣の席の同僚が話しかけてきた。

「おはよう戸島君」

「おはよう夏川」

「相変わらず怒られてたね?」

「うっせ、いいから手を動かさせ手を」

「はいはい」

夏川 なつかわ あずさ 梓、20歳。俺と同じ年で、俺の同僚。最初の頃は女性に対して免疫のない俺は彼女におどおどしていたが、長い間接するうちに免疫もつき、普通に喋れるようになった。社内では、俺が一番喋る相手であり、一番喋る女性だ。

因みに俺が彼女に気があるっていうのは秘密で。

「つしやあく昼休憩だ!」

「戸島君、お弁当一緒に食べよう」

「ああ、つてそうだ、俺今日弁当持ってきて無いんだつた。」

「そうなんだ。ねえ、今日作りすぎちやつてお弁当二つあるからさ、良かったら私の食べる？」

「マジか！超助かる！ありがたく頂くよ」

俺はそう言つて席を立ち、オフィスを出て休憩所へと向かった。

「んー、夏川の弁当美味しいな」

「本当？二つ作つといて良かった」

「何か言つたか？」

「別に何でもないよ」

夏川が今何か言つた気がしたが、本人が何でもないと云っているの
でまあ気にしないでおこう。そんなことを考えていると、突然夏川が
話を振ってきた。

「そう言えば戸島君、この噂知ってる？」

「噂？」

「うん。たまに、本当にたまにだけどね、何処からともなくオーロラが
現れて、オーロラの壁の向こうに異世界が見えるんだつて」

「ふーん？(つてことは今朝のアレつてこの噂か？いや、寝ぼけてただ
けか。)」

「どう思う？」

「ど、どう思うつて、急に言われてもなあ。別に俺はそれを根っから信
じてる訳じゃないし、実際に見たこと無いしな。」

「ロマンが無い！」

「ロマン!？」

俺がそんなオーバーリアクションをとる頃には夏川の弁当を食べ
きつていて、既に手が止まっていた。

「さて、お弁当も食べきつたようだし、お昼休憩もそろそろ終わるし、
オフィスに戻ろう。午後も頑張ろうね！」

「そうだな」

俺たちは休憩所を出て、オフィスの自分の席について仕事を再開し
た。

「戸島！これ今日中に終わらせろ！」

「はいはい！」

「戸島君、ちよつとこつち手伝つて頂戴」

「ただいま！」

「戸島！そつちの書類まとめておいてくれ！」

「了解です！」

「んー終わったあ！お疲れ戸島君！つて、大丈夫？」

「ああ夏川、お疲れ。大丈夫だよこれくらい」

俺は何とか重い腰を持ち上げて、自分の席から離れた。

「そつか、ならいいんだけど。ねえ、途中まで道同じだから一緒に帰ろうよー！」

「いいよ、分かった。」

俺たちはそう言つて、オフィスを後にした。

「あんのクソ課長め！自分が面倒くさいと思つた仕事を全部俺に押し付けやがつて！」

「まあまあ、落ち着きなよ。これから飲みに行かない？ヤケ酒付き合つてあげるからさ」

「じゃあこのまま居酒屋行こう。とことん飲んでやる！」

今の時間は午後5時11分、山のようにある仕事を何とか定時で終わらせ、帰宅しているところだ。日が沈みかけ、あたりも丁度暗くなり始めた時間で、時間帯的に酒を飲むにはまだ早い。しかし、俺たち社会人にそんなものは関係無い。仕事が終わつて、飲みたいから飲む。それだけだ。しかし、どうにもそんな訳にはいかなそうで、急に周りがざわつき始める。

「おいなんだあの壁？」

「壁のある部分だけ景色が変わってない？」

「おい、奥に何か居る！」

「こつちに来るぞ！に、逃げろお！」

その言葉の直後に一斉に悲鳴が聞こえてきて、市民が壁から逃げ出す。同時にその壁も破られ、中から異形の怪物が現れた。

「ふん、仮面ライダーは居ないか。ここにするとしよう。おいお前ら行くぞ！侵略開始だ！」

怪物のその言葉と共に、後ろに居たザコキャラのような怪物が一斉に走り出した。やつらは人間からエネルギーを吸い上げたり、建物を破壊したりしながら、その行動範囲を広げている。そう、まさしく侵略そのものだった。突如現れた侵略者たちは、まるで子供が与えられた玩具を壊すように、当たり前のように破壊活動が続けていく。絶望に染まる人間たちの顔を嘲笑いながら。

「クツハハハハハハハハハハハハハハハハ！良いぞ、もっと怯えろ！そして怯えた末に死ね！」

リーダー格の化け物がそう言った直後、どこからともなく声が聞こえてきた。

「そうはさせねえよ」

その言葉と共にいきなりリーダー格を殴って現れたのは

(あれは、仮面ライダーディケイド！)

異世界を渡り歩くことのできるライダー、仮面ライダーディケイドだった。

「ディケイド！貴様ああああ！」

「ふんっ」

ディケイドはお決まりのように右手首を振り、怪物に向かって走り出す。

「ねえ戸島君！私たちも早く逃げよう！早くしないと私たちも目をつけられちゃうよ！」

ディケイドが来たことに安心が現れたのか、夏川が俺に必死に呼び掛ける。しかし、俺はディケイドが現れたという衝撃で夏川の声が聞こえずにいた。

「おいそこのカップル！さっさと逃げろ！死にたいのか！」

「ほら！あの人もああ言ってるし早く行こう！」

「あつ、ああ！」

デイクライドの逃げろという言葉で俺はようやく正気に戻り、夏川と一緒に走り出した。しかしその後ろで、さつきまで押していたデイクライドが押され始め、ピンチになった。

「ちっ、流石に未知との戦闘は辛いな。」

「フハハハハ！どうした!?そんなものか仮面ライダー！」

「デイクライド！」

デイクライドを押す未知の化け物、ソイツらの方を見る。この戦いに俺は接点が無いが、どうしても他人事とは思えなかった。そんなことを考えているとデイクライドが後ろに大きく吹き飛ばされ、トドメを刺されようとしていた。

「これで終わりだ、仮面ライダー!!!」

「やめろお!!!」

デイクライドのピンチを見ていられず、俺の体は考えるより先に動き、右拳が化け物の顔を殴っていた。

「貴様、人間風情が、何をしたあああああああ!!!」

俺が顔を殴った事に怒り狂い、俺は破壊されたビルの壁まで吹き飛ばされた。

「戸島君！いやあああああ!!!」

夏川の悲鳴が聞こえる。悲鳴を聞いた瞬間、俺は死を悟った。

（ああ。俺、このまま死ぬのか。俺って本当にバカだな、仮面ライダーに変身できる訳でもないのに、あんな無茶してさ。あと、どうせ死ぬなら最後くらいは夏川に思いを伝えたかったなあ。今考えると、俺って本当にとんだ馬鹿野郎だよな。）

これが走馬灯というものだろうか。色々な思考が頭の中で駆け巡る。

（仮面ライダーに、なりたかったなあ。）

「なれるよ、君は立派な仮面ライダーだ」

（えっ。）

重い目を開くと、俺は宇宙のような空間に立っていた。そして、俺の目の前にある男が立っていた。

「初めまして、僕の名前はフィリップ。仮面ライダーWだ」

「仮面ライダーW」

「突然ですまない、君にあることを頼みたくてここへ呼んだ」

「あること？」

「ああ。単刀直入にいう、仮面ライダーに変身してくれないか？」

「仮面ライダーに!?それはどういう？」

「仮面ライダーゲート、それがきみの変身するライダーだ。ゲートは、世界の門番という役割を担うライダーだ。実を言うと、存在する世界は一つだけじゃない、いくつも存在するんだ。その世界には仮面ライダーが存在する。勿論、仮面ライダーが存在しない世界もある。ゲートは、そのライダーが存在しない世界に侵略者^{インベイダー}が入り込んだ時、その世界に入ってインベイダーを殲滅するライダーなんだ」

「二つ質問いいか?インベイダーって、もしかしてデイクイドと戦っていたあの化け物のことか？」

「察しが良いな、その通りだ。ゲートは、インベイダーが世界に入り込んだ時にゲート自信も入ることが出来るが、入るにはあるものが必要になる」

「あるもの?」

「これさ」

そう言うとフィリップは、ズボンのポケットから鍵の様なものを取り出し、俺に手渡す。

「これは?」

「ライドキーというアイテムだ。世界に入るには、必ずそれが必要になる。ゲートに変身する時もそうだ。それがなければ始まらない。そしてもう一つ」

「まだ何かあるのか?」

「ライダーにベルトはつきものだろ?」

フィリップがそう言うと、俺の下腹部に光輝くベルトのようなものが巻かれた。

「さて、最終確認だ。君には、仮面ライダーになる勇気があるかい?」

「これを使えば、仮面ライダーになれるのか?」

フィリップは、俺の問いかけに対して静かに頷いた。

「なら俺は、変身する！自分の正義の為に！」

「変身すれば最後、元の日常には戻れないぞ？」

「俺は一度決めたことは曲げたりなんかしない！」

「そうか。なら行つてくると良い、仮面ライダーゲート。世界が君を待っている」

フィリップがそう言うのと俺の視界は真っ白になっていき、俺の意識は現実へと帰った。

「まくん、とくん、戸島君!!死んじや駄目!!!」

「うるさいなあ、勝手に人を死人扱いするな」

「戸島君！生きてて良かった！」

夏川は俺に抱きつき、俺の胸に顔を埋める。

前を見ると、デイケイドとインベイダーがまた戦いを繰り広げている。俺の行動が無駄にはならなかったようで、デイケイドとインベイダーが互角に戦っている。

「ごめんな、心配かけて」

「ううん、大丈夫。ところでさ、さつきから君の横に置いてあるそれは何？」

夏川にそう言われて横を見ると、確かにそこには何かがあった。

「俺が仮面ライダーに変身する為のアイテムだよ」

「仮面ライダー？」

俺は夏川を優しく退かして立ち上がり、デイケイドのいる戦場に歩き出す。

「戸島君！駄目だよ！今度こそ絶対に死んじやうつて！」

夏川の声が聞こえる。デイケイドもこちらに気づいたようで、逃げるように言ってくる。

「おいお前！生きてるならその彼氏連れて逃げろ！」

「大丈夫だ、その必要はない！俺も今、仮面ライダーになった！」

そうやって俺は下腹部に左手に握ったアイテムを添える。

「ゲートドライバー！」

自動的に巻かれると共に、起動音声が流れる。いつの間にか入って

いたライドキーをズボンのポケットから取りだし、「ゲートドライバー」に刺す。

「ライドチェンジ！」

！

テンションの高い声流れる。その直後に待機音声が流れ出す。

「あのベルト、ゲートドライバーって言ったか!?まさか！」

ディケイドが驚きを隠せずにいるようだが、もうそんなことは気にしてられない。

「変身！」

俺は鍵を回し、仮面ライダーゲートへと変身する。

「World gate keeper! Kamen Rider Gate! f o o o o o !」

ハイテンションな音楽が流れると共に、俺は鎧をまよって変身する。

「俺は、仮面ライダーゲート。世界の門番だ！」

始まりの物語

さて、話の続きだ。前に話した内容では遂に俺が変身して、仮面ライダーゲートとなった訳だ。

戸島 鍵^{としま けん}だ。

早速だけど、話の続きをしていこうと思う。

こうして話している俺だが、実はゲートになって日はまだ浅い。今話している内容からあまり時間は経っていないんだよ。手元にあるライドキーも、まだゲートライドキーとWライドキー、そしてディケイドライドキーしかない。いや、ライダーの居ない世界の方が多いから当たり前か。まあとにかく、今回は前回の続きを話す。耳かっぱじつてよく聞いておけよ！

「俺は仮面ライダーゲート、世界の門番だ！」

俺がゲートに変身し、驚きを隠せずにただ呆然と立ち尽くす夏川、やりやがったと言わんばかりにマスク越しでも分かる驚愕の反応を見せるディケイド、そして、存在しないはずの仮面ライダーの誕生に怒りを隠せずに居るインベイダー。それぞれの反応を向けられ、仮面ライダーになつたんだという実感が沸いてくる。

「全くライダーは、何処まで我々の邪魔をすれば気がすむのだあ！お前ら、やってしまえ！」

怒りの沸点をとうに越えていたインベイダーは、自らの胸ぐらを掴んでいたディケイドを力強く払いのけ、次々と雑魚のインベイダーを召喚する。俺は応戦するために、その群れへ飛び込んでいった。

「仮面ライダーになりたい」、その望みが叶った俺は、どこまでも強くなれる気がした。事実、俺は今までに無いくらい希望に満ち溢れ、そしてインベイダーと戦い、何の問題もなく、寧ろ俺の方が圧倒的に押す勢いで戦闘を進めていた。降りかかる火の粉を払い除けるように、何の問題もなく。

「アイツ、本当に初変身で、初戦闘か？とてもそうは見えないな。俺が言えた事でも無いが」

「オラッ、オラッ、オラッ！よし、どんどん行こう！」

「グヌヌヌヌヌ。このマヌケ共があ！俺が行く！」

雑魚インベイダー（以降中途半端と言う意味で「ハーフ」と呼称）が使えない事からか、元々達していた沸点の更に上を行き、怒りの限界を越えたようだ。

「ふんっ！ふうんっ！うるうああ!!」

「うわっ!?ちよっ、危ないだろ！」

俺はギリギリ全ての攻撃を紙一重でかわし、何とか一撃必殺を間逃れる。元々このインベイダーは体格が良く、よく見るマツチヨのような体格をしていた。そして頭にサイのようなでかい一本角があり、ヤツの足跡を見る限り相当な重量があるようだ。もうここまで来るともう完全にサイだな、うんサイ。以後は「ホーンインベイダー」と呼ぶことにしよう。このホーンインベイダー、見た目からも分かる通り、攻撃力もかなりヤバそうだ、喰らったらひとたまりもないだろう。ひたすら避けてホーンインベイダーのスタミナが切れるまで待とう、という寸法だったが、どうもそうもいかなそう。元々デスクワーク専門だった俺は、特別体力が高い訳でもなく、寧ろそのせいで低い。今までどうやって戦ってたのか不思議だと思うくらいだ。俺が先にスタミナ切れになって息切れ、更にそこへ全身の筋肉痛と来たもんだ。これは痛い。そこにチャンスと言わんばかりに全力でパンチをお見舞いしてくるものだから、これはまだ戦えるって方がおかしい。

「戸島君!!」

「おっと、お前はこっちへ来い、お前には人質になって貰うぞ」

「いやあ、離して！」

今までハーフの相手をしていたデイケイドが流石にヤバいと思っただのか、ハーフを一掃してホーンインベイダーの方を向く。

「おい、お前何を！」

「いいのか？この女がどうなっても？」

「くっ、この卑怯者め」

「戸島君！戸島君!!」

「夏川、守ってやれなくて、ゴメン、な」

「ふむ、やはり今の力だけじゃ力不足の様だね、相手が悪すぎる」

「あつ、フィリップ」

「やあ、さつきぶり」

俺は戦闘中に気絶でもしたのか、また宇宙の様な場所に来ている。そして目の前に再びフィリップが現れた。

「またこんな所に呼び出して、まだ何かあるのか？」

「ああ、これを渡そうと思ってね。Wライドキーだ。僕、いや、僕達仮面ライダーWの力がそれには入ってる」

「Wの力が」

「サイクロン、ジョーカー、ヒート、メタル、ルナ、トリガー。この六つの力がそれには入ってる。それを使って、上手く彼女を助け出すんだ。本当に大切な人なら、必ず助け出して見せる」

「フィリップ。わかった、絶対助け出す。しかし何でいまなんだ？ さつき渡してくれば良かったのに」

「ヒーローは何度も倒れて、何度も立ち上がるものだ。それに、立ち上がった後にパワーアップした方が、カッコいいだろ？」

「っ！確かに！じゃあ行ってくる！」

「ああ。さて、僕も僕の仕事をしないと。僕の仕事、それはへ導き」

「まだだあつ!!!」

「何だと」

「まだ、終わってない」

「戸島君、もういいよ、もういいから無茶はやめて」

「お前、その体はもう限界をとつくに迎えている、これ以上は本当に死ぬぞー！」

「これはっ！俺のワガママなんだ！夏川を助けないという、俺のっ！だから、もう少しそれに付き合ってくれよ」

俺はそう言い、右腰のホルダーに入っていた「Wライドキー」を取り出した。

「お前は絶対に倒す！彼女も無事に助け出す！それが今の、俺の正義だあつ！グレードアップ！」

そう叫んで俺はベルトの二つ目の鍵穴にWライドキーを差し込む。
「ライドクロス！」

待機音声が流れだし、二本目の鍵穴に刺さったそれを回した。

「World gate keeper! Kamen Rider
Gate! Type W!」

タイプWと言い切った後にサイクロンジョーカーの変身音が流れ、
「仮面ライダーゲート タイプW」へと変身する。

「なっ、なんだその姿は。」

「反撃開始だ」

Wライドキーを刺した事によってパワーが少し回復した俺は、「トリガーマグナム」を右手から召喚し、ルナのエネルギーで追尾弾を発射してホーンインベイダーへと的確に当てた。俺の攻撃で怯んでヤツの腕から夏川が離れた。この隙を逃さず、素早く自分の体の右半分をルナの力に切り替え、腕を伸ばして夏川を自分の居るところへと回収した。

「ぐうっ、中々、人質が!?この卑怯者め！」

「どつちが卑怯者だよ、散々人様の世界荒らしておいて、あげくの果てには人質まで取りやがって。」

「うるさい！人間など、我々にとって生きる道具にすぎん！」

「そうか、なら、その道具がお前を倒してやる！」

俺は右半分のをヒートに切り替え、攻撃を超高火力に切り替えた。

「害獣駆除は徹底的にしないとかな？」

俺はホーンインベイダーに何発も射ち、ジリジリと歩み寄る。ある程度距離が取れた所で、左半分をメタルに切り替え、超接近戦に切り替えた。

「はあっ！ふっ！やあっ!!」

「グッ、グアアッ！調子に、乗るな！」

ホーンインベイダーも負けじと反撃するが、その拳は俺に届かず、

空振りに終わった。しかしその後ろに何匹ものハーフが居て俺に襲いかかってくる。

(これは流石に対応しきれないっ。)

俺がそんなことを考えながら防御の体制をとると、突然横からデイケイドが割り込んでハーフ共を跳ね返す。

「コイツらは俺がやっておく。お前は目の前の戦いに集中しろ！」

「ああー！」

デイケイドと背中合わせ。いつもの俺だったらテンション爆上がりのタイミングだが、今はそれを喜んでいる暇はない。

俺たちは互いの相手のいる方へ走り出し、攻撃を仕掛ける。

「とりやあつー！」

「ふんっ！」

「ぐおあつー！」

ホーンインベイダーが後ろに大きく倒れた。そろそろ決着がつきそうだ。俺は力を元のサイクロンジョーカーに切り替え、ゲートライドキーを回した。

「ライドアタック！ゲート！ワールドフィニッシュ！」

地面を思い切り蹴って、大きく宙に舞う。そのままキックの体制をとり、そのままホーンインベイダーに向かって一直線で降下していく。

「はあああああああああああああああつっつっ！！！」

爪先がホーンインベイダーに当たった瞬間、俺は右に一回転し、世界を「強制解錠」し、そのままホーンインベイダーを貫いた。

「ぐあああああああああああああああつ！！！」

やがてホーンインベイダーは断末魔と共に爆散し、その世界を終わらせた。

「はあつ、はあつ、んっ。」

俺は生唾を飲み込み、膝から地面に崩れ落ちる。今までにない疲れだった。吐き気をもよおす時なんかもある。

「おつかれさん、初戦闘にしては、まあやるじゃん」

一瞬「何様だよコイツ」と思ったが、門矢士の顔を見て、「そう言え

ばそう言うキヤラだったな」と納得してしまった。

「ありがとう。」

「そうだ、お前に良いものやる。手を出せ」

俺は言われるがままに手を出す。一体何が出てくるんだ、と想像している。とライドキーが出てきた。

「ソイツを使えば、俺のいる世界に入る事が出来る。行き詰まったとき、俺のところへ来い。お前はライダーとしてはまだまだ未熟だから、俺が先輩として色々教えてやる。じゃあな」

そう言う。と門屋土は素早くオーロラを呼び出して、また自分の居場所へと戻っていった。

「戸島君っ！」

「うおつと!?!」

すると今度は夏川が俺に向かって飛び込んできた。ホーンインペイダーに何をされた訳でもなく、目立った外傷もない。良かった、無事に助けられて。

「戸島君、戸島君。」

「おいおい夏川離れろって、流石に暑苦しい」

「だって戸島君、死んじゃうかと思っただもん。」

「でもこうして生きてる。それで良いじゃん」

「そうだね。ねえ、さつき世界の門番って言ってたよね。戸島君、この世界から出ていくの?」

「そうだな、ライダーになった以上、それは避けられない運命なんだ」「そんな」

「大丈夫だって、近い内にまた会えるからさ!俺が住んでる店のマスターに、俺が仮面ライダーになったって伝えといてくれ、それじゃ!」

俺は立ち上がり、慣れていないはずのオーロラを呼び出す動作をいとも簡単には行い、呼び出したオーロラの中に入って、自分のいた世界を出ていった。

「はあ。戸島君、帰ってくるっていったのに、全然帰って来ませんね」

「」

「まあ、アイツは世界を駆け回る仮面ライダーになっただら？そんなすぐに帰って来れるものでもねえだろ」

「そうだぞ、こっちもこっちで忙しいんだからさ、少しは気長に待ってくれよ」

「戸島君！」

「おう、ただいま」

これが俺の始まりの物語、仮面ライダーゲートとしての初仕事の話だ。そこから何週間か経って、ゲートとしても、ライダーとしても成長したのが、今こうして話している俺だ。最初の頃は、この先どうなるのかと思っていたが、まあなんだかんだでなんとかなった。これからも俺はどんどん強くなる。戸島鍵として、そして仮面ライダーゲートとして！

ライダーの居ない世界

戸島 鍵だ。今はゲートとしての仕事をしている最中だ。ひたすら世界駆け回ってインベイダーの殲滅、ただこれの繰り返し。気が遠くなるような作業だが、これが仮面ライダーとしての俺の仕事だ。それにフィリップが居る。どうやら俺を導く仕事を与えられたらしく、基本的に俺のサポートや、向かうべき世界までの案内などをしてくれる。また、暇な時などは雑談相手になったりもする。フィリップは色々知っているので、話を聞いていると面白いことが聞けたりする。因みに、戦闘で俺がどうしても勝てない相手が居たりすると「仮面ライダーサイクロン」として助太刀してくれたりもする。

「フィリップ！次どこ!?!」

「次はこの世界だ！この世界は移動時間がかなりかかる上に、もうインベイダーによる侵略も始まっている！へアビリティライドキーを使って時間短縮するんだ！」

「分かった！」

俺は素早く左腰からアビリティライドキーを取りだし、自分の乗っているバイクの鍵穴に刺しこんで右に回す。

「ライドアビリティ！ワープ！」

走行中のバイクの前に大きな扉が現れ、その扉がゆっくりと開く。俺はフルロットルで駆け抜け、バイクごとその扉の中へ飛び込む。

「おっし到着！ってうわっ、これは酷いな。」

「どこかにライダー格のインベイダーが居るはずだ、急いで探し出してソイツをたたいてくれ！」

「分かった！」

俺は再びバイクのアクセルを回し、近くを走り回る。辺りにはもうハーフがはびこっていて、しかもハーフに限らずインベイダーは全員同色の黒と灰色構成なので分かりづらかったが、遂に見つけた。絶対アイツだ。

「おーいそのー、蜘蛛っぽい奴ー、お前何してる！」

「あら？まだ人間が残って。仮面ライダー!?この世界には存在しないはず、一体どうして!?」

「お前らは他の奴らと全く同じ事しか言えないのかよ!少しは勉強しろよ!」
「。俺は仮面ライダーゲート、世界の門番だ。いくつも存在する世界の中には仮面ライダーが居ない世界がある、そんな世界にお前らみたいな奴がそこに入り込んだ時に速やかに殲滅するのが俺の仕事なんだよ」

「ググググググ。私の侵略、ここで終わらせてたまるものですか!子供たち、行きなさい!」

このインベイダー、スパイダーインベイダーと呼ぶことにしよう。スパイダーインベイダーは地面に大量の卵を産みつけ、そこから大量のハーフィンベイダーを呼び出した。ハーフィンベイダーが俺に接近してくる。しかしやはり子供という事か、ハーフィンベイダーの動きはヨロヨロで、まともに動くことが出来ていない。

「うーん、なんか、こういうの、弱い者、いじめ、みたいで、嫌、なんだよな!」

ガンブレードキーでハーフィンベイダー達を一切りで切り伏せ、ハーフィンベイダーを一掃した。

「いやあああ!私の、私の可愛い子供達が!」

「じゃあ出さなきゃいいだろ!俺だって弱い者いじめみたいで嫌だったんだぞ!」

「うるさい!この忌まわしき仮面ライダーめ!」

スパイダーインベイダーは自分の尻からいくつもの糸を出し、俺を身動き取れないようにしようとするが、

「正論言われたからって逆ギレしてんじゃねえよ!」

俺はガンブレードキーをガンモードに切り替え、その糸を全て撃ち落とす。スパイダーインベイダーは更に糸を出して来るが、エネルギーをまとった状態のブレードモードのガンブレードキーに跳ね返されるどころか、幾つかの糸が自分に返ってきて自分に絡まった。

「なっ!?!流石私の糸、全然ほどけないわ!」

「言ってる場合かよ!悪いけど終わらせてもらおうぞ」

俺はベルトのゲートライドキーを引き抜き、ガンブレードキーに刺し変えて必殺技を発動させた。

「Ride Attack! Gate! World Break!」

目の前に何枚もの扉が現れ、エネルギーをまとったガンブレードキーを鍵にしてつき出す。ガンブレードキーを右に回すと全ての扉が開いた。俺はこの中を地面を一蹴りして駆け抜け、スパイダーインベイダーに突き刺す。突き刺したガンブレードキーを背にし、足で地面を回しながら削り、力の限り思い切り右へ振った。

「はああああああああああああつ!!!」

「ああああああああああああつ!!!」

スパイダーインベイダーは悲鳴と共に切り裂かれ、やがて爆発の炎に飲まれて消えた。

「つて事があつてさ、本当にいろんな意味で大変だった。まさか自分が弱い者いじめする日が来るとは思わなかったよ。」

「そ、そうなんだ。お疲れ様戸島君!」

「なんか、仮面ライダーつても大変そうだな。ほれ、コーヒーだ。今回は特別におごつてやる」

「おつ、やрийい!」

「お前さんもほれ」

「あつ、ありがとうございます!」

フィリップは仮面ライダーになれば二度と元の日常には戻れないとは言っていたが、それで悲しい思いをすることはなかった。ゲートの能力のおかげで、いつでも自分のいた世界に戻れるからだ。確かに仮面ライダーになって元の日常には帰れなくなったが、新しい日常を迎えることは出来た。仮面ライダーとしての活動で辛いことがある。夏川とオヤジさんに相談して、ありがたい言葉を貰える。そしてそれを糧にまた明日も頑張ろうと思える。フィリップも居る。俺を支えてくれる人たちのためにも、これからライダーの居ない世界を守り続けよう。仮面ライダーゲートとして。

仮面ライダーのいる世界

よう、戸島 鍵だ。

今回はついに「ライダーの居る世界」に行く事になった。

最近、インベイダーが急に活動範囲を広げ始め、対応が追いつかなくなってきた。フィリップ、『仮面ライダーサイクロン』や、門矢士、『仮面ライダーディケイド』もたまに手伝ってくれるが、やはりそれ程までにインベイダーが増えてきている。

今回は、そんな異変によって起こった、インベイダーが仮面ライダーの世界を侵略する話だ。

『R i d e A t t a c k ! G a t e ! W o r l d F i n i s h
!』

「はああああああああああああああああつ!!!」

「ぐあああああああああああああああつ!!!」

それは、俺がいつものようにインベイダーによる侵略を阻止している時に起こった。【仮面ライダーの世界の侵略】だ。

「よーし終わり！お疲れさん俺！フィリップもお疲れ！」

俺は^{ねむらい}劳いの言葉をかけるべく、変身したフィリップ、仮面ライダーサイクロンに話しかけた。

「ああ、ありがとう。そっちもお疲れ様。鍵がゲートとしてしっかり成長してくれるから、僕も導きがいがある」

「そりやどうも。しかし変だな、インベイダーは確かに殲滅した筈なのに、何か胸騒ぎがする」

「そうなのか？っ！鍵、君のその胸騒ぎ、どうやら当たりのようだ。また侵略が始まってる！」

「そんな・何処の世界だ！」

「仮面ライダーの居る世界。しかも僕の居た世界、Wの世界だ」

「なんだって!?あの世界を守るライダーは!?!」

「僕のかつての相棒、仮面ライダージョーカーの左翔太郎と、仮面ライダーアクセルの照井竜ただけだ！しかもあの二人はインベイダーとの

戦い方を知らない！」

「ヤバいだろそれ！早く助けに行かねーと！」

「Wライドキーで『マシンゲーター』のエンジンをかければ直ぐに僕達の世界に行ける、速やかに移動しよう！」

「ああー！」

俺はWライドキーをエンジンキーとしてマシンゲーターの鍵穴に刺し、右に回してエンジンをかけた。目の前にWの世界の扉が現れ、俺はその中にすぐさま飛び込んだ。

「クソツ、なんなんだコイツら！ガイアメモリも使ってねえのにバカみてえにどンドン増えるし、ドーパントともちげえみたいだな、照井！」

「どうやらそのようだな！一体コイツらはなんなんだ！前に『ロイミュード』とかいう奴と戦ったことがあったが、その時はそれ専門のライダーの助力で何とかだったが、どうやらそいつらともまた違うようだ！」

俺たちが現着した頃には既に戦闘は始まっており、仮面ライダージョーカーと仮面ライダーアクセルがインベイダーの侵略に対応していた。

「まずい、二人とも押されてないか!？」

「ああ!?!まだ一般人が残ってたのか!?!おいそこのお前！死にたくないや早く逃げろ！」

「安心してくれ、俺は増援だ！」

そう言つて俺は腰にゲートドライバを巻き付け、ズボンのポケットからゲートライドキーを取り出した。

【Gate Driver!】

「そのベルト、お前まさか！」

「俺たちと同じ！」

両者似たような反応だ。今まで様々なライダーを見てきたが、まさかまだ他にもライダーが居るとは思わなかった、というところだろう。俺はそんな二人の反応を見ながら、ゲートライドキーをゲートド

ライダーの一つ目の鍵穴に刺した。

【Ride Change!】

ドライバーの掛け声と共に、直後に待機音声が流れ出す。

「変身!」

俺はライドキーを回し、仮面ライダーゲートへと変身する。

【World gate keeper! Kamen Rider Gate! f o o o o o!】

「アイツ、変身しやがった!」

「行くぜ!」

俺はその場から走り出し、インベイダーとの戦闘に入った。

「僕も行くぞ!変身!」

【サイクロン!】

サイクロンメモリの変身音声が流れ、虚空^{こくう}からロストドライバーを腰に巻いた仮面ライダーサイクロンが現れた。

「サイクロンメモリ!お前もしかしてフィリップか!」

「感動の再会劇は後だ、今はアイツら、インベイダーを何とかするぞ。行こう翔太郎!」

「おつ、おお!」

これでこの世界を守る仮面ライダーはサイクロン、ジョーカー、アクセル、ゲートの四人となった。俺は二人に知りうる情報を全て教えた。

「アイツらは一括りにインベイダーと言うんだ!そして俺たちが今戦ってるインベイダーは中途半端なインベイダー、その意味を込めて俺は『ハーフィンベイダー』と呼んでいる!ハーフィンベイダーは絶対にそれを増やしているリーダー格のインベイダーが居るんだ!どっかに隠れているはずだから、ここの奴らをさっさと片付けて探し出そう!」

「分かった!」

「了解だ!」

俺たち四人は互いに背中合わせになり、四方に死角がないようにした。俺の説明が終わったところで俺たち四人はそれぞれ走り出し、イ

ンベイダーの殲滅を再開した。

「はあっ！ふっ！やあっ！」

「オラッ！オラッ！オラアッ！」

「でいっ！ふっ！はあっ！」

「せいっ！せいっ！やあっ！」

それぞれ順調に殲滅していき、ついに全滅の一手手前まで追い詰め、俺達は同時に必殺技を発動した。

【サイクロン！マキシマムドライブ！】

【ジョーカー！マキシマムドライブ！】

【アクセル！マキシマムドライブ！】

【Gate！World Finish！】

俺達は同時に飛び立ち、空中でライダーキックの体勢をとってそれぞれの方向に向かって一直線に降下した。

「！！はあああああああああああああ！！！！！！」

俺たちが着地した数秒後に爆発が起こり、やがてハーフィンベイダー達はその爆発の炎に飲まれて消えた。

「ふう、皆お疲れ！それじゃあさつきとリーダーを探そう！」

「っ！鍵、リーダー格の気配が消えた。恐らく逃げられた。」

「マジかあ。まあいいや、次に備えて休もう」

俺がマシンゲーターに跨り、元の世界に帰ろうとすると、急に変身を解いた左翔太郎に話しかけられた。

「ちよつと待ってくれ、色々と聞きたいことがある。いいか？」

「これは、また俺の説明をしないといけないパターンかな。」

仮面ライダーW

「まず一つ目、お前は何者だ？」

「俺は仮面ライダーゲート、戸島 鍵だ。ゲートの名の通り、世界の門番をしている。とは言つたけど、名ばかりだな。最近インベイダーの活動が急に活発になって、対応しきれなかった。おかげで仮面ライダーの居る世界を侵略しだすインベイダーまで現れた。俺の力不足のせいだ、本当にすまない」

「彼は一ヶ月前に仮面ライダーになったばかりの新人なんだ、許してやってくれ、二人とも。必要であれば僕からも謝る」

「なるほどな」

「そんな事情があつたのか。問い詰めるような聞き方をして悪かつた、顔を上げてくれ」

一人は堅物で一人は短気、二人とも怖いが、根は優しい人だった。俺の話を真剣に聞いてくれる。フィリップも俺をフォローしてくれる。

「じゃあ二つ目、なんでフィリップと一緒に居るんだ？」

「それは僕から説明させてもらう。僕は一度確かに消えたが、世界があるライダーを誕生させるために僕を復活させたんだ。あるライダー、それが仮面ライダーゲートだと言うことは分かるかい？」

「まあなんとなくはな」

「よし、話を続けよう。ゲートは、インベイダーが世界に入り込んだ時、速やかに殲滅するライダーだ。そのゲートが殲滅するにあつての導き役、それがいまここに存在する僕という訳さ。必要に応じて仮面ライダーに変身することもあるけどね」

「なるほどな、大体状況が理解出来た。なあ、あのインベイダーとかいう奴ら、また来るのか？」

「来ると見ていいと思う。アイツらは一度侵略すると決めた世界は自分が死んでも続けるからな」

「なるほどな。よし。じゃあ鍵、お前はインベイダーの殲滅が本職なんだろ？手伝ってくれ」

「元からそのつもりだ。さつきは帰ろうとしたけど、またこの世界に現れたらもう一度来るつもりだった」

「そうか。じゃあよろしく頼むぜ？」

「ああ！」

俺達はお互いを完全に信頼し、ハイタッチした。

「なあ鍵、お前は仮面ライダーゲートになる前は何をやってたんだ？」
「普通に社会人やってたよ。セキュリティ管理の仕事でさ、基本デスクワーク専門だったから、初戦闘の時はキツくてさ。すぐに息切れするわ、全身筋肉痛になるわ、ここぞと言わんばかりにインベイダーに吹っ飛ばされるわでもう全身ボロボロで。」

「ははっ、まあ最初の内はそんなもんだろ」

「まあな。でも、そのおかげで今の俺がある。これは揺るがない事実だ」

「そうだな。色々教えてくれてありがとうな」

「皆、インベイダーの気配だ！ここから結構近い！」

「フィリップ、分かった！よし、鍵、照井、フィリップ、行くぞ！」

「ああ！」

俺達は鳴海探偵事務所をでて現場へと向かった。

「もう侵略が始まってー！」

「ひでえな、風都が泣いていやがる。こんなことするなんて許せねえ」

「同感だ。この破壊活動、警察としても、そして仮面ライダーとしても見逃す訳にはいかないな！」

「行こう皆、僕達の風都を泣かせる奴を、僕は許したくはない！」

「変身だ！」

「変身！変身！」

俺の掛け声と共に皆同時に変身し、それぞれサイクロン、ジョーカー、アクセル、ゲートとなった。俺達はその場から走り出し、イン

ベイダーの殲滅にあたった。しかしいくら倒してもキリがなく、一向に減る気配がない。むしろ増えている。

「だあーくっそ！全然減らねえ！むしろ増えてねえか!？」

「やはりお前もそう思うか！俺もそう思ってたところだ！ぐあっ!？」

「照井!?!」

「流石は仮面ライダー、中々粘りますね」

「お前は。」

「鍵！翔太郎！奴だ！奴がこのインベイダー達のリーダーだ！」

「なんで、なんで。」

「どうした翔太郎!？」

翔太郎の様子がおかしい。一体どうしたんだ？

「お前、霧彦か？いや、霧彦じゃねえ、インベイダーだな。お前が、その姿をしてんじやねえっ!!!」

「翔太郎！どうしたんだ!？」

あきららかにおかしい。いくら短気だとは言え、普通敵を見ただけでキレたりしない。原因を確かめるためにリーダーのインベイダーを見る。目で捉えたそいつは、モノクロカラーのナスカドーパントそのものだった。

「なるほど、そういうことか!？」

ナスカドーパント、園崎霧彦がナスカメモリを使って変身するドーパントだ。形は違えど、彼もまた風都を愛する男だった。その彼と同じ姿で破壊活動続けるインベイダーが許せなかったのだろう。あのインベイダー、そうだな、ナスカインベイダーと呼ぶことにしよう。ナスカインベイダーは自分の方に向かってくる仮面ライダージョーカーに気づき、その攻撃に対する防御体勢をとる。

「なんで、なんでテメエが霧彦と同じ姿をしている！霧彦と同じ姿で風都を侵略してんじやねえ!？」

相当キレている。俺が知る限り、二人は敵同士だったが、マスコツトキャラクターのフウト君について語り合える程仲がよく、そして同じくらいに風都を愛していた。その友情を嘲笑うかのように同じ姿で破壊活動が続ければ誰だって怒るだろう。

「この姿は私の進化によるものです。なるほど、その反応を見るに、昔私と同じ姿になれる人間が居たのですね。クククツ、これはまた侵略が楽しくなる要素が増えましたね！」

そういつてナスカインベイダーは自らの胸ぐらを掴む仮面ライダージョーカーを思い切り蹴飛ばし、手に紫電のエネルギーを溜めて手を空に突き上げたあと、拡散して一気に多くのものを破壊した。「クハハッ…これは楽しい！どうですか？あなたたちの大切な町が壊れていく様は？」

「てんめえっ!!!」

翔太郎は吹き飛ばされた衝撃で変身が解けてしまった。翔太郎の激情は相変わらずで、寧ろどんどんベクトルが増している気がする。「落ち着くんだ翔太郎！感情任せになっちゃ駄目だ！こう言うときこそ冷静になつて物事を考えるんだ！」

フィリップも自ら変身を解き、倒れている翔太郎の元へ向かう。右足の膝を地面につき、フィリップは翔太郎の近くでしゃがんだ。俺も慌てて変身を解き、翔太郎の元へ向かった。

「これが冷静で。」

「僕たちは今まで、こういう時にどうやって事態を解決してきた？」

「フィリップ。」

「僕たちは、二人で一人の探偵だ。何でも一人で抱え込まず、僕に言うてくれ。」

「そうだな、すまねえフィリップ。長いこと一人でやって来たからまた一人で解決しようとするところだった。そうだな、今はお前たちが居るんだったな。よし、フィリップ、鍵！あのナスカモドキをさつさと片付けよう！」

「ああー！」

「了解！」

俺たちが意気込んでいると、後ろから変身を解いた照井竜がやって来た。どうやらハーフィンベイダーを全て倒したようだ。

「左、俺のことを忘れて貰っては困るぞ。アイツを倒すんだろ？」

「照井、ああそうだ！」

「翔太郎、僕にロストドライバーを借してくれないか？」

翔太郎の右に立っていたフィリップがそう言い、ロストドライバーを自分に借すように言う。

「別に良いけど、何をするんだ？」

「こうするのさ」

フィリップはそう言ってもう一つの、自分のロストドライバーを取りだし、翔太郎のロストドライバーと合体させた。二つのロストドライバーはやがて光をまとって姿を変え、かつての自分達のベルト、「Wドライバー」になった。

「これは、Wドライバー」

「急造のWドライバーだ。そのため二人分はないが、変身は出来る。変身を解けば元のロストドライバーに分裂する。また一緒に戦おう」
「ったくよ。フィリップ、やっぱりお前最高だよ！」

そう言って翔太郎は腰に急造のWドライバーを巻き、Wの二人はそれぞれメモリを起動する。

「サイクロン！」

「ジョーカー！」

フィリップは起動したサイクロンメモリを翔太郎に投げ渡し、翔太郎はサイクロンとジョーカーを順番にドライバーに刺す。直後に待機音声が流れだし、変身ポーズをとる。

「じゃあ俺達もやろう、竜！」

「ああ！」

「アクセル！」

「Ride Cross!W！」

照井竜も再びアクセルメモリを起動し、ドライバーに刺す。俺もWライドキーを二つ目の鍵穴に刺す。ドライバーがライドキーを認識し、待機音声が流れだす。そして四人同時に

「変身!!」

「サイクロン!ジョーカー！」

「アクセル！」

「World gate keeper!KamenRider

Gate! Type W!

それぞれの変身音声が流れ仮面ライダーへと変身する。フィリップに関しては予想通りと言うか、変身と同時に体が抜け殻となり、こちらに倒れてくるのでしつかりキャッチして、仰向けになるようにして地面に置いた。

「体をありがとう、鍵」

「いいよ別に! さあ行こうぜ皆!」

「ああ! さあ、お前の罪を数えろ!」

「振り切るぜ!」

今、ここに本来の仮面ライダー、「仮面ライダーW」が復活した。

「全く、楽しくありませんねえ。調子に乗ってんじゃねえぞクソライダー共! お前ら行け!」

怒り狂って、遂に本性を表したナスカインベイダー。自分の背後からハーフィンベイダー達を大量に召喚し、俺達を迎撃させる。

「フィリップ、敵の数は?」

「ざつと30というところだろう。多いけど、僕たちの敵じゃない」

「そうだな。照井、鍵、そっち任せたぜ」

「分かった」

「任された!」

俺達は走り出し、それぞれハーフィンベイダー十体ずつ相手にすることにした。

「こういうのは早い方がいい!」

俺はそう思い、何もない場所からガンブレードキー・ブレードモードを取り出し、左腰のアビリティライドキーを鍵穴に刺して右に回した。

「Ride Abirity! Power form!」

アビリティライドキーの力でガンブレードキーの威力を底上げし、短時間で終わらせるスタイルで戦う。

「せいっ! はあっ! やあっ! おし楽勝! そっちはどうだ竜!」

「ごつちもちょうど終わった、大したことないな」

「そうだな。だとき、ナスカモドキさん? 翔太郎たちの方も今終わっ

たようだし」

そう言つてWの方を見ると、フィリップがサイクロンの力で風を起こして敵を撃退していた。

「腕は落ちてないみたいだな？」

「そつちこそ」

「くうつ、私が行く！」

ずっと高台で仁王立ちしていたナスカインベイダーが遂に動き出し、俺達に襲いかかる。

「はあつ！」

「うおっ!? 流石リーダーのインベイダー、攻撃の一発一発が重いな！」

ギリギリのところまで防御したが、大きなダメージを喰らってしまった。普通に痛いよチクショウ。しかし、ナスカインベイダーの背後から

「相手が複数人の時、背後に気を付けろ」

「アクセルがエンジンブレードで切り込む。更に

「そつからの連続攻撃にも気を付けろよ」

Wが前から蹴りかかる。そして最後に

「最初に攻撃してたやつが居なくなったらソイツに一番気を付けないと駄目だぞ！」

アビリティライドキーで姿を消していた俺は目の前に姿を現し、ナスカインベイダーの顔を思い切り殴り飛ばす。

ナスカインベイダーは大きく後ろに吹き飛び、それが効いたようである。そこから立ち上がれずにいる。

「フィリップ、そろそろ決めるぞ」

「分かった」

Wはドライバーからジョーカーメモリを引き抜き、右腰のホルダーに刺しこんでホルダーのボタンを押す。

アクセルもドライバーのグリップに手をかけ、それをひねる。

俺はゲートライドキーとWライドキー二つを回す。

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

「アクセル！マキシマムドライブ！」

「Gate! Maximum World Finish!」

俺達は宙に舞い、ライダーキックの体勢をとる。狙いは勿論一点のみ、ナスカインベイダーだ。

ナスカインベイダーに向かって一直線に急降下していく。

「二」はあああああああああああああああつ!!!」

「仮面ライダーあああああああああああつ!!!」

俺達は地面に着地し、動きの止まったナスカインベイダーにもう一蹴り入れて世界を終わらせた。

変身を解いたあと、Wドライバーはフィリップの言う通り二つの口ストドライバーに戻っていた。

「もう行くのか?」

「ああ、俺は元々この世界の住人じゃないし、そんなに長くは居られない」

「そうか。フィリップ、またここに戻ってくるのか?」

「ああ、全てが終わったならここに帰ってくるつもりだよ」

「なら全力で守らないとな、この町を。いつか帰ってくるお前の為にも」

「僕のいない間、町を頼んだよ。照井竜、翔太郎のこと頼めるかい?」

「不本意だが、頼まれといてやる」

「ありがとう。じゃあもうここは大丈夫そうだな」

フィリップは安心したような表情を見せたまま、虚空へと消えていった。

「んじゃあ、またな二人とも!」

俺はマシンゲーターに跨がり、ゲートライドキーでエンジンをかけた。

二人に別れの言葉を告げたあと、俺はグリップを捻って自分の居るべき世界へと戻った。

「そのベルト、まさか新しいライダーシステムか!? 丁度いい! おい、こつちを手伝ってくれ!」

どうやらギヤレンは俺のゲートドライバを新しいライダーシステムだと勘違いしているようだ。あながち間違いではないが、ブレイド達の使うライダーシステムとは根本的に違う。

「フィリップ、やっぱり俺が入り込む余地あったわ」

「僕も行くか?」

「頼む、暴走してる奴が二人いる。フィリップはそのもう片方を頼む」
「分かった」

【サイクロン!】

【Ride Change!】

俺達の意見が合致したところで、フィリップはサイクロンメモリを起動してドライバに刺し込み、俺はゲートライドキーをドライバに刺し込み、それぞれ同時に変身した。

「変身!」

【サイクロン!】

【World gate keeper! Kamen Rider Gate! atefooooo!】

それぞれの変身音声が流れ、俺達は仮面ライダーサイクロンと仮面ライダーゲートに変身完了した。変身したフィリップは水色がかつた白い空間から出てきて、サイクロンとしてのその姿を現した。

「行くぞフィリップ!」

「ああ!」

俺達は走り出し、それぞれ仮面ライダーブレイド、仮面ライダーカリスの元へ向かった。

「仮面ライダーがもう一人!? 一体どうなってるんだ今日は!」

「大丈夫、コイツは味方です! 一緒にこの状況を何とかしましょう!」
「分かった!」

俺はギヤレンと組んでブレイドを、フィリップはレンゲルと組んでカリスを抑えることにした。二人のライダーの力は思ってたよりずっと強く、とても手こずった。

「うわっ、かったっ！何これ!?」

「くっ、全然効かない、恐ろしいな。」

俺は二人の立場を知っていたが、あえて知ってる人に聞くことではなるべく怪しまれないようにした。

「赤い人、この二人はなぜ暴走を!?」

「この二人は『ジョーカー』って奴なんだ！ジョーカー同士が出会ってしまうとジョーカーとしての本能が働いて暴走してしまう！」

「だと思ったよ。分かりました！フィリップ、戦闘は避けてベルトを無理矢理引き剥がして二人が戦えないようにしよう！」

「分かった！」

「おい、無茶はよせ！危険すぎる！」

「でも橘さん、無茶でもやらないとこの二人争った果てに死にますよ!?!」

「選んでくれ仮面ライダー！安全第一でこの二人をずっと抑えとくか、危険をおかして二人を助けるか！二つに一つだけだ！」

レンゲルの一言でギャレンの心が揺らぐ。俺はレンゲルに心の中でナイスと言いつつも、二つに一つと言うことでギャレンを追い詰めた。

「分かった！でも危険と判断したら即辞めるぞ!?!」

「任せろ！フィリップ、やろう！この人はなるべく危険は避けたいらしいから、手早く済ませよう！」

「了解だ！」

俺はガンブレードキーを虚空から取り出し、左手に逆さにして持ち、鍵穴にアビリティライドキーを刺した。

【Ride Ability!Speed Form!】

フィリップもドライバーからサイクロンメモリを引き抜き、右腰のホルダーに差し替えた。

「おい、何する気だ!?!」

「俺はこうしないと自分を強化出来ないんだ見逃してくれ！大丈夫、足のスピードを上げてベルトをキャッチして引き剥がすだけ！フィリップ行くぞ！」

「ああ！」

俺達は必殺技を発動し、それぞれその場から全速力で走り出す。

【サイクロン！マキシマムドライブ！】

【Gate! World Break!】

ギャレンとレンゲルに二人を後ろから取り押さえてもらい、身動き出来ないようにする。俺は目の前に現れた何枚もの扉をくぐり抜け、フィリップも自身に風をまとって走る。やがて二人とも右手にベルトをキャッチし、見事引き剥がすことに成功した。二人とも変身が解けて、ほぼ同時に気を失って地面に倒れた。

「.....」

「.....」

「二人とも気を失ってるな、手伝ってくれてありがとう」

「本当に助かりました」

そう言う二人とも変身を解き、ギャレンの変身者が手を出してきた。

「俺は橘朔也、仮面ライダーギャレンだ。よろしく」

それに続くようにして、レンゲルの変身者が手を出してきた。

「上城睦月、仮面ライダーレンゲルです。よろしくお願いします」

俺達も二人にならって、簡単な自己紹介をした。

「戸島鍵、仮面ライダーゲートだ！よろしく！」

「フィリップ、仮面ライダーサイクロンだ。よろしく」

俺達はそれぞれ二人と握手をして、取り上げたベルトを二人に返した。

「しかし最新のライダーシステムは凄いな、あつという間に二人を抑えたし」

「そうですね、僕達だけじゃ抑える前にやられるところでした、本当にありがとうございます」

「実は二人が言ってることなんだけどき、俺たちが使ってるのってライダーシステムじゃないんだよ」

「そうなのか？」

「あながち間違いでも無いけどな。俺達はこの世界とはまた違う世界

から来たライダーで、俺はこのライドキーの力で、フィリップはこのガイアメモリの力で変身して戦うんだ」

「なるほどな。そのガイアメモリって奴は見たことがあるが、ライドキーってものは初めて見たな」

「なるほど」。フィリップ、なんでガイアメモリのこと知ってるの？」

俺は橘朔也がガイアメモリのことを知ってることに驚きを隠せず、フィリップに真相を聞いた。

「前に大きな戦いがあった、多分その時だろう」

「なるほどな」

「あの、お二人さえ良ければ、もっとお二人の事を教えてくれませんか？」

「元からこの世界に用があつて来たんだ、色々聞いてくれ」

俺達はそれぞれの事を話し、共通の目的を見つけ、それを達成するためにしばらく共同戦線を張ることになった。

仮面ライダーブレイド

「なあ、そのインベイダーって奴はモノクロカラーだったりするかな？」
「ああ」

「インベイダーは姿を自由に換えられるんですか？」

「僕が自分の居た世界で戦ったインベイダーは、進化の過程で姿が変わると言っていた」

「なるほど進化の『過程』か。過程という言葉が引つかかるな」

「俺もそう思う。多分、過程ということはその進化に必要な『物』があったってことだ」

「物か、心当たりがある。お前達がインベイダーと呼んでいた敵、前に空から降ってきてな、その時に剣崎と戦ってブレイドの力を吸収していた」

「やっぱりか。鍵、インベイダーの進化にはやはり何らかの要因があると見て良さそうだな」

「だな」

「その時に偶然、敵が現れたからか、カリスに変身した相川さんがやって来て、そして暴走して、その隙に逃げられました」

「なるほどな。フィリップ、逆探知出来そうか？」

「ああ、というか今出来た。これは、今回もまた強そうだなやつだね」

「場所は？」

「ここからバイクで五分、割りと近い。行き先は僕が案内するから、急いで移動してくれ！」

フィリップは何もないところに白い空間を開き、その中に入って脳内に直接指示する。

フィリップを除いた俺達三人は、それぞれのバイクに跨がって急いで現場に向かった。

「クソ、もち侵略が始まってる！フィリップ、奴の場所は!？」

「上空、真上だ！何とか回避してくれ！」

「マジかよ」

俺達は空から落ちてくる謎の飛来物体を回避するためにその場から離れた。やがてその飛来物体は土煙をたてて地面に墜落し、その中から出てきた。

「攻撃、失敗。これにより相手の行動パターンを学習。そして攻撃の精度を強化。次は外さない！」

「おい、コイツ今行動パターンを学習つつたぞ！」

「早めに倒さないとまずいですね。」

「フィリップ、変身しよう！コイツはヤバイ！」

「分かってる！」

俺はフィリップを呼び出し、それぞれ変身した。

今回のインベイダー、ビートルアンデッドの姿をしている、ビートルインベイダーと呼ぼう。ビートルインベイダーは再び飛び立ち、上空からの滑空攻撃を仕掛ける。

「二回目来るぞ、回避するんだ！」

今度は皆余裕を持って回避出来たが、俺だけは回避せず、ガンブレードキーで構えをとってビートルインベイダーがガンブレードキーに衝突した瞬間を見切つてカウンターアタックを繰り出した。

「どうだコノヤロウ！」

「攻撃、再び失敗。腹部の装甲に損傷を確認。また、変身による行動パターンと身体能力の変化を確認。変身者は四人。これにより単独での迎撃は不可能と判断。インベイダー百体の軍勢を召喚。多勢に無勢でいこう」

百体、ビートルインベイダーは確かにそう言った。聞き間違いなんかじゃない。今まで俺は多くのハーフィンベイダーと戦闘を繰り広げ、そして勝利してきたが、数が数だけに結構骨が折れそうだ。

「おいゲート、指示をくれ！俺達はお前に従う！」

「アイツは百体って言った！それに対して俺達は四人、つまり一人二十五体だ！頼めるか!？」

「任せてくださいー！」

俺達は一つにまとまっていたその場から走りだし、それぞれの戦場に向かった。百体、一人二十五体にしてもかなり多い。しかし丁度良

い機会だ、俺はWの世界で手に入れた新たな力を試すことにした。

「お前らちよつと付き合え！」

そう言つて俺はガンブレードキーに「ウエポンライドキー」を刺し、それを回した。

「Ride Weapon! Accelle!」

するとウエポンライドキーがアクセルの専用武器、「エンジンブレード」に変形し、地面に突き刺さった。俺は地面に突き刺さったそれを左手に持つて引き抜き、二刀流の構えをとった。

「いいねこれ！ 竜、セリフ借りるぞ。振り切るぜ！」

俺はアクセルの決めセリフを言つて、ハーフィンベイダーに攻撃を開始した。エンジンブレードは普通に地面にめり込む程の重さで、更にアスファルト等を切れる切れ味を持つ。その為、当たるとめっちゃくちゃ痛い上にかなりのダメージを喰らう。

「せいつーやあつーはあつーさすがエンジンブレード、めっちゃ強い！」

中途半端に生み出されたハーフィンベイダー程度なら一撃で倒せる。因みにガンブレードキーもそれと同じかそれ以下程度のスペックで、自分で言うのもなんだがかなり強い。

「ていつーせいつーとりやあつーよし、あと半分！」

剣の力が二倍近くあるからと言うこともあるかもしれないが、かなりのペースで殲滅している。残りの半分も疲弊している。やるなら今だ。俺はエンジンブレード変形させ、ホルダーを開く。

「フィリップ、サイクロン貸してくれ！」

「ああ、使え！」

フィリップは俺にサイクロンメモリを投げ渡し、エンジンブレードのホルダー部分でキャッチする。サイクロンメモリはホルダーに刺さり、待機音声が流れ出す。エンジンブレードを元に戻し、ガンブレードキー・ブレードモードにもアビリティライドキーを刺す。

「Ride Abirity! KamenRider Joker
！」

二つから待機音声が流れ、必殺技を発動させる。

「サイクロン！マキシマムドライブ！」

「Joker！MaximumWorldBreak！」

必殺技が発動し、俺はそれに合わせてハーフィンベイダーを切る、切る、切る。サイクロン、ジョーカー、アクセル、ゲート。この四人のライダーの力が合わさって威力は絶大なものとなった。全てのハーフィンベイダーを切ったところでエンジンブレードは消えて元のウエポンライドキーへ姿を戻し、その中からサイクロンメモリが出てきて俺の手の上に着地する。

「最高！」

俺がそう言い捨てると後ろで爆発が起こり、ハーフィンベイダー二十五体は全滅した。俺は使ったサイクロンメモリを元の持ち主に投げて返した。フィリップはそれをキャッチし、そのまま右腰のホルダーにサイクロンメモリを刺した。

「いっよ！」

「サイクロン！マキシマムドライブ！」

フィリップは風の中で上空に舞い、体勢を整えて敵の軍勢の中へ急降下して飛び込んだ。

「はあああああああああああああああああああつ!!！」

地球の重力に合わせ、風の力で強化されたキックの威力はとてつもないもので、着地した周囲に緑色の風、サイクロンを起こした。ハーフィンベイダー達はサイクロンの威力で爆発して全滅した。

「こっちも終わった」

「よし！二人ともそっちは？」

「俺はあとコイツだけだ！問題ない！」

「俺もです！もう終わります！」

二人は自身のもつラウザーにカードをスキャンして必殺技を発動し、残りのハーフィンベイダーを片付けた。

「終わったぞ！」

「こっちもです！」

「ナイス！後はお前だけでインベイダー！」

「仮面ライダーの殲滅、失敗。自身が行くしか無いと判断。よって攻

撃を開始する」

こちらに向かってくるビートルインベイダーを迎撃するためにその場から走りだした。しかし俺達は見誤っていた。コイツの力と、コイツがブレイドから吸収した力を。

「クソ、なんだコイツ！めちやくちやかてえ！まるでへジョーカーを殴ってるみたいだ！」

「ジョーカーを殴ってる、お前まさか！」

「良いのか？俺が奴から吸収した力はへジョーカー。もし俺を倒せば奴らは再び暴走し、そして争いを繰り返すだろうな。そして今の俺は、不死生命体アンデッドとほぼ同義の存在だ」

「待て、今ジョーカーを吸収したと言ったか!？」

「そんな、まさか」

「そうだ。ここで俺を倒さずに見逃せばブレイドとカリスの暴走が無くなることを俺が保証しよう」

「クソッ！」

「なんで、こんなのって」

ギャレンは近くにあつた建物の壁を殴って悔しさを露あらわにしたまま嘆く。対してレンゲルは自身が持っていた杖状のラウザーを地面に落とし、その場に膝をついた。

「おいどうしたんだ二人とも！しっかりしろ！」

「すまないゲート、俺には、いや俺達には、アイツを倒すことが出来ない。」

「アイツを倒したらまた剣崎さんがまたジョーカーに俺にはそんなこと出来ません！」

「マジかよ。フィリップこれってさ、俺達絶賛大ピンチってヤツじゃね？」

「違うないね。でもこの状況をひっくり返す方法が、無いわけでもない」

「マジか！教えてくれ！」

「ああ。ただし、成功確率が凄く低い上に、僕らだけじゃ無理だ」

「分かったから早く言えって！」

俺はフィリップの背中を叩いて急かした。

「せっかちななあ、君そう言うところ翔太郎に似てるよ。作戦はこうさ」

フィリップは俺の耳元で、ビートルインベイダーに聞こえないように作戦を話す。

「流石フィリップ、やっぱりお前天才だよ！」

「どうも」

俺はフィリップの元を離れ、急いで二人の元へ走る。

「二人ともこっちに来てくれ！話がある、フィリップがいい作戦を思いついたんだ！」

二人はしぶしぶだが、俺の話を聞くために俺の方に近づいてきた。「わざわざ本当に倒す必要なんてない、お前らが今までやって来たやり方で良いんだよ！」

「なるほど、作戦は理解した。しかしそんなに上手くいくのか？」

「俺もそこが疑問です。第一、今ここに剣崎さんは」

「俺のと呼んだか？」

俺が二人に作戦を説明していると、「二人の男」が背後から現れる。

「剣崎」

「剣崎さん！それに相川さんも！もう大丈夫なんですか!？」

「ああ、それに、相川と一緒に居ても全く暴走しない」

「良かった。アイツが言ってたことは本当だったのか」

「な、希望はあるだろ？」

「そうだな」

「橘さん、作戦は聞きました。俺がアイツを〈封印〉すればいいんですよね？」

「そうだ。でも出来るか？」

「ベルトがあれば！」

「あつ、そうかすまん。お前のベルトだ」

「相川さんも。これ返します」

「ありがとう」

二人がベルトを腰に巻く。ついに二人揃っての変身だ。

「変身！」

「Turn Up」

「Change」

二人は目の前に現れた大きなカードをくぐり、そのカードをまとうようにして、それぞれ仮面ライダーブレイドと仮面ライダーカリスに変身した。

「こうして並んで立つのなんて久しぶりじゃないか？」

「そうだな、行こう！」

「ああ！」

「俺達も行くぞ！」

「了解！」

俺達は二人に続いてその場から走り出す。この世界に、ついに六人の仮面ライダーが揃った。

「えっ、ビートルアンデッド!?なんで、だつて俺は変身して……」

「ブレイド、アイツは君からジョーカーの力を吸収してビートルアンデッドに擬態した偽物、インベイダーで、「僕達の」敵だ！アイツは自分でアンデッドと同義の存在と言っていた。アンデッド封印が専門の、君達の力を借りたい、良いかな？」

「分かった！」

俺達はビートルインベイダーを囲んで、ビートルインベイダーが逃げられないようにした。

「理解不能。さっき言っただろう、俺はアンデッドと同義の存在で、倒すことは不可能。もし仮に倒せたとしても、力がブレイドに戻り、また二人が争いあうだけだ、と」

「なるほど、なら行動不能にすれば良いって訳だ」

「何？」

「俺達が今までどうやってアンデッドと戦ってきたのか知らないのか？ならそれで良い」

「やはり理解不能、どういう意味だ？」

「鍵、奴のあのバックルを見るんだ」

「あれは」

「ああ、全てのアンデッドに共通して装着されているベルトだ。奴のアンデッドと同義という言葉が本当ならば、あのバックルが開いたときに彼らの力で封印出来る。ついでにジョーカーの力も封印されて一石二鳥だ。そしてジョーカーの力は剣崎一真、仮面ライダーブレイドから吸収している。つまりスペードの力を持つ剣崎一真なら奴を封印出来る。しかし、彼は今ここに居ない」

（そして俺は今ここに居る。奴が気絶してバックルが開いたところを俺が封印すれば一緒にジョーカーも封印される。やってやる）

ブレイドは走り出し、ビートルインベイダーに斬りかかる。
「やあつ！せいっ！たあつ！」

ビートルインベイダーを三連続で斬りつけ、ラウザーのデッキを展開し、二枚のカードを取り出し、ラウザーにスキャンする。

「Thunder, Sraash, ListeningSraash」

「はああああああつ！」

ブレイドが、コンボ技の「ライトニングスラッシュ」を繰り出し、それに続いてギャレンがラウザーのデッキを展開し、二枚のカードを取り出してそれをラウザーにスキャンする。

「Fire, Drop, BerningSmash」

「火傷には気を付けろよ？」

ギャレンがラウザーの銃口から火の大弾を打ち出し、情熱の炎をぶつける。

「上城！」

「はい！」

レンゲルもラウザーのデッキを展開し、カードを取り出してラウザーにスキャンする。

「Brizerd, Bite, BrizerdClash」

絶対零度の如き冷気を発しながら、杖を前に構えてビートルインベ

ライダーをそれで殴る。

「相川さん！」

「任せろ！」

「Tlnead, Chop, SpinningWaib」

分裂させたカリスアローを構え、それにエネルギーをまとって連続技を繰り出す。

「次！」

「武器が無いな、流利的に武器で行きたいのだけれど」

「使うか？」

俺はそう言ってウエポンライドキーでエンジンブレードを呼び出し、それをフィリップに渡す。

「いいね」

「サイクロン！マキシマムドライブ！」

エンジンブレードに強力な緑色の風をまとい、それでビートルインライダーを斬りつける。

「後は頼むよ、鍵」

「分かった！」

俺は元の姿に戻ったウエポンライドキーをフィリップから受け取り、ドライブバーのゲートライドキーをガンブレードキーに刺し変えた。刀身にありつた力の力を全力の一撃を斬り込む。

「いやあああああああつ!!!」

この一撃でついにビートルインライダーが倒れ、ベルトのバックルが開く。

「行動、不能。身体に大きな損傷あり。修復作業、開始。失敗。自らの大きな疲弊により自己修復が不可能と判断」

「今だブレイド！奴のバックルが開いた！」

「ああ！」

ブレイドは鎖が交差した絵が書かれたラウズカードをビートルインライダーの開いたバックルに投げつけた。ラウズカードは見事にバックルに刺さり、ビートルインライダーを封印した。ジョーカーが封印された。封印による爆発とともに爆風が発生した。その爆風に

乗せられて、ライドキーが飛んできた。

「これは、ブレイドの力。」

「色々ありがとう、もし良かったらまたこの世界に来てくれ」

「ああ、こちらこそありがとうな、インベイダーの封印を手伝ってくれて」

「いいよ別に。おかげでジョーカーの本能で暴走することも無くなった。な？」

「ああ。本当にありがとう、助かった」

「もし何かあったら俺達を呼んでください！力になります！」

「じゃあその時は遠慮なく頼らせてもらおうよ。行こうか、鍵」

「ああ。じゃあな皆！」

俺はライドキーで扉を開き、元の世界へと帰った。

日常を侵略する者

「ええ!? 仮面ライダー同士で戦ってたの!? なんで!」

「その戦ってた二人、ジョーカーって言ってさ、本能的な問題で出会ってしまおうと決着をつけようとして暴走しちゃうんだよ」

「ほう? んで、お前はそのジョーカーとやらの二人の暴走を止められたのか?」

「ああ! ほらこれ、『ブレイドライドキー』だ!」

「そのライドキーがどんなものだからよく分からんが、まあそれが暴走を止められた証拠って事だな?」

「そーゆーこと!」

仮面ライダーになった今でも、俺は元の世界に帰って夏川やオヤジさんの日常会話を楽しんだりしている。最初は夏川が聞きたいと言うのでいやいやだったが、俺も話しているうちにだんだんと楽しくなり、二人にお土産話をするためにどう活躍しようか、と考えるまである。

「彼は本当に凄いです。この一ヶ月で仮面ライダーとして凄く成長しました。おかげで僕も導きがいがあります」

「出やがったなフィリップ」

「どうも」

「おう。フィリップ、お前さんもコーヒー飲むか? 今機嫌がいいから奢ってやるぞ」

「では頂きます」

「おし、ちつと待ってろ。お前らの分も作ってきてやる」

オヤジさんはそう言うのと奥のキッチンの中へ消えていき、カウンターから姿を消した。

「いやあ、オヤジさんっていい人だね。名前なんて言うの?」

「実は俺も知らないんだよな。その時は真夏で就活中に出会ってさ、金もなく住む家も無く、途方に暮れていたんだよ。俺の両親は物心付く前に死んでさ、親戚の人に育ててもらったんだよ。独り立ちするって言っついてすぐに家に戻るってのもなんか申し訳なくて、宿屋

生活が続いてたんだ。しばらくして金が尽きて、ついにホームレスの仲間入り、と思った時にオヤジさんと出会ったんだ」

ここからは、俺のオヤジさんとの出会いの過去話だ。

「クツン、今のところ面接全落ち、せつかく叔母さんがくれた金も無くなった。遂にホームレスの仲間入りか？嫌だ！俺は、絶対に。」

しばらく何も食べていなかった俺は意識を失い、道端で倒れた。

「まったく、若いくせにこのザマか、みつともねえなおい。」

何時間眠っていたのだろうか、俺はフカフカな何かの上で目が覚め、自分の二本の腕で無理矢理に上体を起こした。

「ここは。」

「おう、目が覚めたか？」

俺が横に振り向くと、そこには俺を助けたのであろう、40代後半位の男性が立っていた。

「栄養失調、脱水、熱中症、まあそんなところだな。俺が買い出しに行こうとしたら、いきなりお前さんが目の前で倒れるもんだからビックリしちゃった。そのまま目の前で死なれちゃっても胸糞わりいから、思わず自分の店まで連れて来ちゃった。とりあえず、お前さんが寝ている間にスポーツドリンクを飲ませておいた」

「ありがとうございます。」

「はあ。お前さん帰る家は？」

「ありません。育て親に、独り立ちするって言った手前、家に戻りづらくて。」

「そうか。必ず就職しろ」

「え？」

「就職して、十分な金を稼いで、ちゃんと家賃を払え。それが守れるなら、この店の屋根裏だが、部屋と飯を提供してやる」

「なんでそこまでしてくれるんですか？」

「本当は自分の子供がいるはずだったんだけどよ、そいつは胎内にい

る時から病気を持って、その病気のせいで死んでしまった。妻もそのショックとストレスで死んでしまった。そしてご覧の通りだ。俺ももうこんな歳だし、このまま歳をとってなんの意味もなさなまま死ぬんだろうな、なんて思ってた矢先お前さんが目の前で倒れやがってよ。もし俺にまだ意味があるならってよ。それに、もし自分に子供がいたらこんな感じなのかって思ってたな」

「絶対に就職します！ここまでしてくれるあなたの期待に応える為にも！絶対！」

「そんなエピソードがあつたんだ。なんかいい出会いだね！」

「なるほど、だから君はここに住んでいたのか。納得がいった」

「仮面ライダーになつて家賃払えなくなつたけど、それでもあの人、自分の仕事をまっとうすれば文句は言わねえ」って言うんだぜ？優しすぎだよあの人」

俺が過去話にふけて、すっかり話し込んでいた時、突然オヤジさんの怒鳴り声が聞こえてきた。

「なんだお前は!?人様の店に勝手に裏口から入ってくるとはいい度胸じゃねえか!なっ!?この化け物め!おいお前ら!この店から逃げろ!」

逃げろ、オヤジさんは確かにそう言った。そして化け物、恐らくはインベイダーの事だろう。つまり

インベイダーがまた攻めてきたのだ、この世界に。

「フィリップ、夏川を頼む」

「鍵!しかし君だけでは——」

「俺はオヤジさんを助ける!!もし何かあつたらすぐさまサイクロンに変身してハーフィンベイダーを退けてくれ」

「分かった。行くよ、夏川梓」

「ええ!?ちよつと!」

俺は急いでキッチンの方に行き、裏口を目指した。そこにはもうオ

ヤジさんの姿はなく、荒らされた現場だけが残されていた。開け放たれた裏口の扉に近づき、その床に転がっていた、武器として使用されたと思われるフライパンの取っ手を握って拾う。

「変身も出来ないくせに、守られる側が何守る側を守ろうとしてんだよ！絶対にも助けるからな、オヤジさん！」

オヤジさんを連れ去ったのがリーダー格のインベイダーだということは分かっていた。声はよく聞こえなかったが、オヤジさんがインベイダーと会話をしているのは聞こえた。インベイダーは元々知能が低く、命令されたようにしか動けない。そのため、知能の高いリーダー格にしか言語を扱うことは出来ない、つまりリーダー格だ。俺は外に出て、すぐさまマシンゲーターを召喚し、それに跨って発進した。発進してしばらくして、脳内に直接フィリップの声が聞こえてきた。

「鍵、聞こえるかい？」

「ああ、聞こえる。どうした？」

「リーダー格の座標を捉えた、案内する。奴は移動の際に必ず高い場所まで行き、そして地上に着地する。つまり脚力の高い動物が進化の媒体としている。さらに、一度のジャンプで長距離を移動し、自らの持つ羽で高度や移動速度を調整している」

「つまりバツタか。さしずめ『ホッパーインベイダー』って所か。近いかな？」

「ああ、そのままの速度を維持して、真っ直ぐに移動すれば追いつく」
「分かった」

俺はそれを聞いた瞬間さらに速度を上げて一直線に移動した。

「H a h a h a h a ! 風が気持ちいいぜえ！そしてエネルギー源も捕まえた！さらに人間は大切な奴が消えるとそいつを助けようとするからな！その性質を利用して一石二鳥！流星はO R E S A M A だぜ！」

上空で何者かが大声で話している。間違いなくアイツだ。俺は上空で大声で話しているそいつを睨みつけながら、右腕を横に伸ばしてガンブレードキー・ガンモードを取り出す。オヤジさん救出のために

あらかじめアビリティライドキーをガンブレードキーに刺しておき、ホッパインベイダーを撃ち落とす。

「Ride Ability!」

「オヤジさんを、返せえ!!!」

ガンブレードキーのトリガーを五回引いて、撃ち出された弾が、二発ホッパインベイダーに当たる。

「な、なんだ!? あんな危ない奴が来るなんて聞いてないぞ!」

「言っていないからな!!!」

ホッパインベイダーは弾が当たった衝撃でオヤジさんを腕から放す。

「俺様のエネルギーが!」

「よし!」

俺はガンブレードキーに刺さったアビリティライドキーを右に回した。

「Net!」

ネットが常時発動した状態のガンブレードキーのトリガーを何回も引き、空中に何発もネットを撃ち出した。オヤジさんの落下速度は減速していき、やがて一番地面に近いネットの上に着地した。

「オヤジさん! 良かった、息はある。フィリップ、すぐに店に戻ってくれ、今からオヤジさんをそっちに送る」

「分かった。全力でショートカットして店に戻る。夏川梓、ついてきてくれ」

フィリップの声が聞こえなくなり、それぞれの行動を開始する。俺はガンブレードキーを突き出して、脳内で移動先を指定し、扉を開いた。向こうにはもうフィリップ達があり、こちらを見ていた。俺はオヤジさんの腕を自分の肩にまわし、扉の中まで運んだ。

「オヤジさんを頼んだぞ」

「ああ、任せたまえ」

そうやって俺は扉の外に出た。やがて扉は閉まり、その姿を消した。

「Oh Shit! てめえ何してくれんだ! せつかくのエネルギー源

が――――」

「黙れよ」

俺はその一言でホッパインベイダーを黙らせ、更に言葉を並べて言った。

「お前のせいでオヤジさんの命が危険にさらされた。そしてそれは俺のせいでもある、俺がもつと早くオヤジさんの危機に気がついていたら、だから責任を持ってお前を倒す！変身!!」

ゲートドライバを腰に巻き付け、ゲートライドキーをドライバに刺してすぐさま回す。ガンブレードキー・ブレードモードを手に持ったまま変身し、変身音声か流れているのにも関わらず、途中で走り出してホッパインベイダーを切りつける。

「What!?!仮面ライダーが居ない世界なのになぜGateが!?!」

「知らないのか?この世界はゲートが誕生した世界だ、つまりこの世界は俺の管轄と言ってもいい!」

「Oh my god!完全にやらかしたぜ!とりあえず逃げる!」

「逃がすか!」

アビリティライドキーの効果を变えて、元々刺さっていたそれを再び刺し直し、そして右に回した。

「Ride Ability! Magic Hand!」

効果が発動し、ガンブレードキー・ガンモードの銃口が光り輝く。トリガーを引くと銃口からマジックハンドが飛び出し、その大きな手でホッパインベイダーを鷲掴みして俺の立っている目の前に放り投げる。

「イテテテ」

「おい」

「ひいっ!?!」

「俺の新しい力だ。お前はその力のための贄にえとなれ」

俺はそう言っつて右腰からブレイドライドキーを取り出し、ドライバの二つ目の鍵穴に刺した。

「Ride Cross!」

ブレイドの変身前の待機音声が流れ出し、ブレイドライドキーを回

す。

「グレードアップ！」

その言葉と共に俺の目の前に青く光る透明なカードが現れる。

「World gate keeper! Kamen Rider Gate! Type Braid!」

やがてその青いカードはブレイドの変身音と共にまとわりつき、鎧へと形を変え、「仮面ライダーゲート タイプブレイド」へと変身した。

「仮面ライダーゲート タイプブレイド。グレードアップ完了だ」

「ライダー同士が合わさったライダーなんて、勝てる気しねえ!!」

ガンブレードキーを右手から左手に持ち替え、右手にブレイラウザーを召喚してそれを握った。ラウザーのデッキを片手で器用に展開し、左手でカードを引いて、そのカードを刀身のスキヤナー部分でスキヤンした。

「Thunder」

サンダーを発動し、ラウザーに雷の属性を付与した。さらにガンブレードキーをクロスさせることで、ガンブレードキーにも雷の属性が付与されるようにした。

「行くぞー！」

「や、やばっ——」

ホッパーインベイダーの嘆きの言葉を待たずにそいつを切りつけ、二本の剣で連続攻撃をくり出す。

「せいっ!はあっ!」

「ぐっ、ぐあっ?!中々やるなあ? bad、俺様もタダではやられねえ!!」

「うおっ!」

ホッパーインベイダーも負けじと反撃し、自慢の脚力を活かしたキック攻撃をくり出す。でも奴は気づいていない。キックの決定的な弱点に。俺は元々高かった反射神経と動体視力を駆使し、ホッパーインベイダーのキックしてくる足を驚掴みする。

「What!?!ふんっ!ふんっ!」

「無駄だ。キックは確かに威力が高いが、その威力を高める為にタイムラグが必要になる。キックだけで片をつけるなら、この程度余裕で押し切れるぞって言いきれほどの威力が必要になる。これが俺の経験上の話だ」

「ふんっ！ふんっ！」

「そのままもう片方の足でキックしようとするのとコケて大きな隙を作るぞ」

俺はそれだけ言ってホッパインベイダーの右足首を掴んだまま、腕に力を込めて思い切り突き飛ばした。

「あだっ!？」

「トドメだ」

雷の属性が付いたままのラウザーのデッキを展開し、再びカードを一枚引き、それをスキャンする。

「Slash」

スラッシュをスキャンした事でコンボが発生する。

「Lightning Slash」

両手に持った二本の剣を構え、ホッパインベイダーを連続で切りつける。十回程切りつけたところで俺は動きを止め――

「消えろインベイダー。お前らの居場所なんて、この世界のどこにも無い!!」

――二本同時の最後の一撃を喰らわせた。

「Kamen Rider!!!」

やがてホッパインベイダーは最後の言葉と共に爆発の炎に飲み込まれ、自らが持つその世界を終わらせた。

「……は?」

「オヤジさん!良かった、目が覚めて!」

「俺の店か?なんでお前が」

「目の前で死なれちゃっても胸糞わりいんで。それじゃ駄目ですか?」

「っ!ははっ、あの時と立場が逆じゃねえかおい!」

オヤジさんは未だに震える自分の腹を抱えながら、自分の太ももを叩いて大爆笑していた。

「はあく笑った笑った。鍵、ありがとうな」

「礼を言うならまず名前を教えてよ」

「ああ？名前言つてなかつたつけか？そう言えばそうだったような。俺の名前は『七瀬^{ななせ} 祥太^{しょうた}』だ、名乗るのが遅くなっちまって悪かったな？」

「まったくだよ。改めてよろしくお願いします、祥太さん」

「よせやい、今まで通りオヤジさんで頼むよ」

俺達は、二人の絆を確かめ合うことが出来た。

あれから数日が経ち、俺とフィリップはオヤジさんに買い出しを頼まれて外に出ていた。

「重いーっ！なんでこんなに注文が多いんだよ！」

「オヤジさんは今ぎっくり腰で腰を痛めているんだ、仕方の無いことさ。それに、変身してる時はもつと重いものを持っているだろう？ガンブレードキーとか」

「あれはゲートだから出来るんじゃない！あーもう駄目、ギブ」

俺は両手に持っていた荷物を地面に落とし、気だるげな姿勢をとった。

「あつ、こらー！荷物を落とすな！ビニール袋が破けてしまっただろ！」

フィリップの母親にも似た説教を聞き流し、俺は空を見上げた。すると突然虹色に輝く空間の穴が現れた。

「なんだ」

「こら鍵！聞いている。あれは」

やがて空間の穴の中から線路と、その上を走る『列車』が出てきた。列車は猛スピードで走り続け、目の前に同じ空間の穴を作ってその中へ消えた。

「あれはデンライナーにしては色も形状も違ってたよな。あんなに大きなものが大きな音を立てて上空を通過したのに周りは気づいてないのか。フィリップ、今の見えたか？」

「ああ、見えたよ」

「あれは一体なんなんだ？」

「あれはディファイリントライナー、世界と世界を駆ける列車さ。そしてそれを操縦するのは仮面ライダー電王ブレイズ、三代目の電王だ。ある時間で二つのルートに進む分岐点が発生し、もう片方のルートに進んだ結果誕生したライダーだ」

「なるほどね。なあファイリップ、近いうちに会える気がしないか？」

「そうだね、きっとそうに違いない」

「電王ブレイズ、待ってるぞ。お前と会えるその時を！」

俺はディファイリントライナーが消えた場所に拳を空高く突き上げ、しばらくその一点を見つめて帰路に着いた。

2018：仮面ライダー電王 ブレイズ

戸島 鍵だ。現在「仮面ライダー電王ブレイズ」こと「時野シユンガ」とともに、絶賛アナザーインベイダーを探している真つ最中である。「くつそ、ドラゴンインベイダーめ、やっぱり逃げ足はええ、元社会人だぞこちとら！もうちよつと氣をつかえつての！」

「おいおい大丈夫かよオツサン。」

「オツサン!?お前今オツサンって言ったか！バカ言え、俺はまだ二十歳だぞ！」

「知らねーよ！」

「グダグダだねフィリップ君」

「ああ、僕は彼らが本当にアナザーインベイダーを倒せるのかが不安になってきたよ。」

俺達がこんな具合で話をしているとき、奴は現れた。恐らくシユンガの言っていた「アナザーアスナ」とか言う奴だろう。

「アラアラ？同じ仮面ライダー同士仲が良さそうなことで、微笑ましいわね♪」

「アナザーアスナ！」

「なるほど、アイツがアナザーアスナって奴か。」

「僕の探知能力でも引つかからないなんて、興味深いな」

フィリップは興味深いとは言うが、本当に興味深い時の笑顔ではなく、真剣な顔をしていた。

「あなたのセキュリティ凄いわね？あなたにバレずにここまで来るためにセキュリティに引つかからずに移動するの大変だったわ♪」

「今度は何が目的だ！」

シユンガが言葉を発し、アナザーアスナを問い詰める。

「今回も今までと同じよ？この子に力を与えて進化させて、欲望を叶えて上げたの」

「あつそ、でお前が手に持つてるカードみたいなやつ何？」

「ポケ○ンカ○ドよ！」

「幼稚か！」

流石にここは思ったことが一致したらしく、言ったことがシユンガとハモった

「最近何気なく始めてみたの！やってみたら案外面白くてね、勝負して勝って近所の子供10人を泣かせてやったわ！」

「何度でも言うぞ、幼稚か！とりあえずその近所の子供たちに謝つとけ！」

「酷い！二回も幼稚って言われた！しかも一回目に関しては二人同時に！傷ついた！」

「知るか！」

しばらく二人のコントが続く。俺の後ろの二人がこんなことを言い出した。

「グダグダだねフィリップ君」

「ああ、僕は彼らが本当に決着をつけられるのか不安になってきたよ」

（デジャヴ）

しばらく二人のコントが続き、やがてアナザーアスナが咳払いをすることですそれは終わった。

「まあ良いわ、言わせておけば！どうせアンタたちにポケ○ンカ○ドの良さなんて分からないのよ！」

若干涙声のアナザーアスナは宙に浮いて自分の背後に紫がかった真つ暗な空間を開いた。

「今回進化させてあげたこの子、欲望が今までで一番強くてね？進化したいという欲求と侵略したいという欲求が強すぎたの。おかげで私がちよつと後押ししてあげただけで暴走しちゃったの。その強すぎる力のせいで自我は消えてしまったみたい。でも進化したいという欲望は叶ったわよ？良かったわね「アナザーインベイダー」？ウフフフ♪」

アナザーアスナは背後に開いた空間の中に消えていき、アナザーアスナが消えたと同時にその空間も消えた。目の前を見ると、新たに進化をとげたドラゴンインベイダー、もといアナザーインベイダーがいた。容姿はセイリユウインベスとユニコーンヤミーの要素が混ざっ

たような姿をしており、元々あったクローズのアーマーに似たものは取れ、背中の片側がボロボロの羽根だけが残っていた。

「くそ、逃げられたか。」

「今は気にしても仕方ない、変身しよう。もうアイツが来るぞ。」

「流石は大人、切り替え早いな?。」

「だろ?。」

俺たちは冗談を交えながら、それぞれのドライバーを腰に巻いた。俺はゲートドライバーにゲートライドキーを、刺し込み、シユンガはライダーパスのスイッチを押してベルトの収納スペースにそれを挿入する。

「Ride Change!。」

「間もなく〜一番線に〜ストライクフォームが到着します。黄色い線までお下がりが下さ〜い。」

そして二人同時に

「変身!。」

「World gate keeper! Kamen Rider

Gate! f o o o o !。」

「ストライク〜装着完了〜」

「よく喋るベルトだな?。」

「そっちのベルトのテンションには敵わないよ。」

「そうだな! フィリップ、コイツは多分インベイダーとしての能力が残ってる。ハーフィンベイダーが出てくるかもしれないから、そのお嬢ちゃんは頼んだぞ!。」

「エリサ、絶対フィリップのそばから離れるなよ!。」

「僕らは後ろに下がっていいよ。こっちへ」

「ええ」

フィリップはエリサという少女をつれ、後ろの方へ下がっていった。フィリップの場合、万が一何かあってもサイクロンに変身出来るので恐らく問題無いだろう。

「行くぞ!。」

「ああ!。」

俺達はその場から走りだし、アナザインベイダーに攻撃をした。「おらっ！つていつてえく、普通に殴ってたらこつちがダメージ受けるやつだ！」

「おいおいオッサン、いくらなんでもそれは流石に。」

シユンガは何を思ったのか、アナザインベイダーを殴って、直後手首を思い切り振った。

「ごめん鍵、普通に痛いわ。何だよこの所々に生えてるトゲ！」

どうやら俺達は小さなトゲ生えている部分を殴っていたらしく、よく見るとそのトゲはそこらじゅうに生えている。

「拳が駄目なら武器を使おう」

「分かった！」

俺達は互いの武器を取りだし、剣の状態で攻撃する。しかし

「だあーくっッッ！かてえ！反動でダメージ受けるってどういう固さしてんだよ。」

「びくともしねえなこいつ！」

俺達がアナザインベイダーのハイスペックさに対して嘆き、顔を下に向けてると、俺の目線の先にアナザインベイダーのトゲと思われる物が落ちていた。証拠にアナザインベイダーの方を見ると、トゲがあつたはずの部分からトゲが消えており、そしてまたトゲが生えてきた。そして今までのアナザインベイダーの行動をふりかえる。

（奴は俺達を攻撃する時何をしていた？何を見ていた？結論から言うと答えはこうだ、俺達に攻撃する前に、何かを判別するように立ち尽くしていた。そして俺達を攻撃するとき度々攻撃が外れる事があつた。それは俺達を見てない、いや、見えていないからだ！奴は攻撃するときオーラか何かで俺達を判別し、そして感覚を頼りに攻撃している、つまり。）

「なんだよ、随分簡単な攻略法じゃん」

「何？なんか思いついたのか？」

「ああ。アイツのトゲ、実はよく見ると俺達が攻撃した部分だけトゲが取れて生え変わってる。そしてそのトゲを生やすのにもエネルギーが必要になるはずだ。そしてあの異常なまでの硬さもそうだ。

俺はアイツの硬さはエネルギーを消費することで維持していると踏んでいる。まずはあのトゲ、銃で撃ち落としてエネルギー切れを狙おう！」

「分かった！流石は大人、観察力凄いな？」

「だろ？」

俺はガンブレードキー・ガンモードを取りだし、アナザーインベイダーに狙いを定めて構える。シユンガも専用武器、ブレイクソードとデンガツシャーを取りだし、それぞれ銃の形態にして二丁拳銃で構える。

「二丁拳銃か、良いなそれ！俺も真似するわ」

ガンブレードキーの鍵穴にウエポンライドキーを刺し、それを右に回す。

「Ride Weapon!W!」

ガンブレードキーが言葉を発し、その直後にウエポンライドキーが光輝いて「トリガーマグナム」へと姿を変える。

「へえ、武器を召喚出来るのか？」

「ああ。フィリップ、使っていないならサイクロンメモリを貸してくれ！」

「分かった」

フィリップはメモリのボタンを押してサイクロンメモリを起動してから俺の方に投げ渡す。俺はそのサイクロンメモリをトリガーマグナムのホルダー部分で見事にキヤッチし、風の力を付与した。

「メモリもちゃんと使えるのか。なんかズルいな」

「いいだろ？」

俺達はそんな会話をしながら目線をアナザーインベイダーに移し、両手に持った銃のトリガーを何回も引いた。やがてトゲは全て取れ、試しにガンブレードキー・ソードモードで斬りつけてみたら見事に効いていた。

「予想的中」

「そうだな。こっからどうすんだ？」

「そりやもちろん、「俺達の力を合わせて戦う」んだよ」

「なるほど」

それぞれライドキーとギアパスを取りだし、フォームチェンジの準備を行う。俺はドライバーの二つ目の鍵穴に「電王ブレイズライドキー」を刺し、シユンガはドライバーに収納されたライダーパスを取りだし、更に取り出したその中にある収納スペースにギアパスを入れ、再びドライバーに挿入する。

「Ride Cross!」

「間もなく特別急行、ゲートが参りまゝす！危ないですので黄色い線の内側までお下がり下さゝい！間もなくゲートが参りまゝす！ご注意下さゝい！」

やがてそれぞれの待機音声が流れ出す。そして

「グレードアップ！」

「チェンジ！」

「World gate keeper! Kamen Rider

Gate! Type DEN-O Braize!」

「ゲートゝ装着完了ゝ！」

「仮面ライダーゲート、タイプ電王ブレイズ」

「仮面ライダー電王ブレイズ、ゲートフォーム」

アナザースインベイダーは、二人の仮面ライダーが似たオーラになったためか、あわててふためいているような動作をする。恐らく、どっちがゲートでどっちが電王ブレイズか判別出来ていないのだろう。

「行くぞ！」

俺達はその場から走りだし、アナザースインベイダーへ攻撃を開始した。流石に至近距離にすれば判別できるといふことか、アナザースインベイダーも俺達に攻撃を仕掛けてくる。しかし判別するのが遅すぎた。俺達はアナザースインベイダーが攻撃をしてくる前にアナザースインベイダーを斬りつけ、反撃の隙を与えないようにした。アナザースインベイダーは身動きがとれず、ガードの構えをしたままだった。ついにアナザースインベイダーのガードが崩れ、後ろに倒れて大きな隙を作った。

「今だ、決めるぞ！」

「ああ！」

俺達は剣を構え、必殺技を発動する。

「Ride Attack！」

「フルチャージ ワールド」

「Gate! DEN—O Braize! Charge World Finish！」

「必殺、俺の必殺技！スペシャルバージョン！」

俺は宙に舞ってその場でライダーキックの体勢をとる。シユンガも自らが飛ばしたデンガツシャーの赤い刀身に飛び乗り、ある程度の高さまで来て刀身からジャンプしてそこからライダーキックの体勢をとる。俺達は背中合わせの状態になり、アナザーインベイダーに狙いを定めて、そいつに向かって急降下する。

「はああああああああああああああああ!!!」

キックはアナザーインベイダーに命中し、しばらくしてアナザーインベイダーは爆発の炎に飲まれて消えた。爆発によって発生した爆風で、俺の方に何かが飛んできた。俺はそれをキャッチし、キャッチしたそれを見る。

「よしライドキーゲット！クローズか？」

「クローズ、って事はカイトか？アイツいつの間にか力を吸収されてたんだ。」

その頃

「ハックシ!!」

「大丈夫？風邪？」

「ではないと思う。どうせシユンガ辺りが俺のウワサでもしてんだろ」

そのシユンガに異世界でウワサされてるカイトだった。

「何か色々ありがとうな！」

「こちらこそ。インベイダーの殲滅に協力してくれてありがとう」

「良いんだよ、困った時はお互い様だろ？」

「そうだな」

「鍵、そろそろ行こう。新たなインベイダーの反応を感知した」

「マジか！じゃあ二人とも、またどこかで！」

俺はそう言っただけにもない場所に扉を出してそれを開き、フィリッ
プと共にその中に入っていった。

「仮面ライダーゲート、いつかまた」

「どうやらクロースライドキーを手に入れたようですね？なら、そろ
そろ行動を開始致しましょう」

予告状 仮面ライダーゲート様

本日24時30分より、「クロースライドキー」を頂戴するため、あ
なた様のもとへ向かいます。

仮面ライダーアイン

怪盗ライダー

「予告状、仮面ライダーゲート様。本日24時30分より、「クローズライドキー」を頂戴するため、あなた様のもとへ向かいます。仮面ライダーアイン。ふむ、ライドキーの存在を知る者と来たか、しかも文の最後には仮面ライダーアインと書かれている。名前が異なるが、僕の知ってる怪盗ライダーだと「仮面ライダーデイエンド」というライダーがいる。正体を知られない為にわざわざこのような事をしたと考えられなくも無いが。」

「デイエンドがこんなまわりつくどいことをするか?」

「やはりその結論に至るか。」

戸島 鍵としま けんだ。早速だが俺達は今、オヤジさんの経営する喫茶店に届いた、新聞の文字を切り抜いて白い紙に貼って作られた、予告状なる物に頭を悩まされている。俺がいつものようにインベイダーの侵略を止め、そして全ての仕事を終わらせて店に戻った頃には、それはもう届いていた。

「おう鍵、お前宛てに手紙が届いてるぞ」

オヤジさんのその一言と共に火蓋は開かれ、門番と怪盗の戦いが始まったのだ。

「うーん、どうしたもんかなあこれ。」

「取り敢えず今夜は睡眠せずに何が起きてもいいように備えておこう」

「そうだな」

「ねえアイン、本当にやるの?」

電気もなく、解体後のようなコンクリートの壁と床で覆おおわれた廃墟はいきよの中で、少年はおどおどと、いないはずの誰かに話しかける。

「当たり前です、Mr. アラタ。何を今さら聞くのです?」

「だ、だってさ!今まで盗ってきた“ライドキー”って、本当はあの仮面ライダーに変身する人の物になるはずだったやつじゃん!」

「そうですね、だからなんだと言うのです?」

「え?」

「私は、私の信じる正義の為に行っている、ただそれだけです」

少年の腰に巻き付いたベルトは、力強くそう言った。しかし、ベルトの言う正義に納得出来ない少年は

「このどこが正義なんだよ」

と口にごぼさずにはいらなかった。

「そろそろだね、24時29分だ」

「そうだな。ああもうなんか急に緊張してきた!こうなったら開き直ってやる!どつからでも来い、仮面ライダーアイン!」

そしてついにその時が来た。予告状に書いてあった時間となった。

「奴がどのよちにしてやって来るか分からない。警戒は怠らないようにしよう」

「分かってる」

すると突然、俺達が緊張ではりつめているときに玄関のチャイムが鳴った。

「なんだよ急に、こんな時間になんだ?」

インターフォン越しの映像を見ると、そこには帽子を深く被り、大きな段ボール箱を持った男が立っていた。

「宅配便のようだね、どうする?」

「一応出る。フィリップは何があってもいいようにクローズライドキーを見といてくれ」

「分かった」

俺は玄関に向かい、そしてその扉を開ける。

「宅配便です、ハンコをお願いします」

(俺なんか注文したっけ?まあいつか)

「ちよつと待ってて、ハンコを取ってきます」

「はあ、心臓に悪いよこれマジで」

「よくやったMr.アラタ、後は私がやる。時間が惜しい、代われ」

上着の下に隠れたベルトは、「アラタ」という少年の脳内に直接話し

かける。ベルトはアラタの体の主導権を代わり、一時的にベルトが操る事となった。

(さて、クローズライドキーはどこだ！)

深く被った帽子のツバの下で目を見開き、能力を発動させ、それと同時に瞳が赤く光る。彼の目には今自分が見ている物ではなく、配達先の相手の家の全体像が写っている。整った部屋の中のどこかにあるであろうクローズライドキーを探し出すべく、彼は部屋全体をくまなく見ていた。そしてついに。

(見つけた。)

彼は口角を吊り上げ、獲物を捕らえたと言わんばかりの笑顔でにやる。さらに能力を発動し、クローズライドキーを盗りにかかる。

(クローズライドキー、私の元へ来い。)

(特に何も起こる様子は見受けられないな、仮面ライダーアイン、どう出る?)

フィリップはクローズライドキーの近くの壁に寄りかかって立ち、クローズライドキーを見張る。すると突然クローズライドキーが赤く発光し、光の粒子を出してその形を崩していく。

(クローズライドキーが。)

フィリップは慌ててクローズライドキーを手に取り、盗らせまいと必死に両手で覆い隠す。しかし、それにはもう遅すぎた。フィリップがその手を再び開いた頃にはクローズライドキーは消えており、そこにはもう何もなかった。

「そんな。」

フィリップはあまりの衝撃に、その言葉を口にせずにはいられなかった。!

「盗った。」

「いやあすみません、ハンコがなかなか見つからなくて、本当に申し訳ない」

「いえ、大丈夫ですよ」

「しかし大変ですね、こんな時間に宅配なんて？」

「自分は夜勤なので、仕方がないですよ」

「頑張ってください！」

「はい、失礼します」

「ファイリップ、どうだった？ファイリップ？」

明らかに様子がおかしい。その事に気づいた俺は、うつむくファイリップの顔を覗く。眉を吊り上げ、顔をしかめたファイリップのその顔は、怒りと悔しさが入り交じったような表情になっていた。この時点で察してしまっていた俺は、ファイリップにたずねる。

「おいファイリップどうした？何があった？」

そう聞くとファイリップは、ようやく口を開く。

「すまない鍵、仮面ライダーアインに“盗られた”」

盗られた。消えたでもなく、無くなったでもなく、盗られた。ファイリップは確かにそう言った。これがどんな意味を持つか、俺はまだ分かっていなかったのかもしれない。もしクロースライドキーを盗った仮面ライダーアインが悪人(盗みをしてる時点でもう悪人だが)なら、もしかしたら再びドラゴンインベイダーという強敵の復活などに、使用されてしまうかもしれない。ライドキーを盗まれた後の俺は、それが容易に想像出来てしまった。

(仮面ライダーアイン。俺達にとって、相当な驚異になりそうだな)

「Ride Change！」

「変身」

「World Treasure! Hunter! Kamen Rider Eynel! fuhahaha!」

「仮面ライダーアイン、ここに推参」

たね」

そう、鍵は今まで一度たりとも負けたことはなかった。たとえ相手がどんなに強敵であっても。それが今回、アインとかいう訳のわからない、正体不明の敵にライドキーを奪われた、つまり負けたのだ。今まで負け知らずだった鍵には相当来るものがあつたのだろう。

(それでも、やっぱり君は頑張りすぎだ)

(鍵は頑張っている、いや、頑張りすぎている。そのために敗北を知らなかった鍵は、今回ライドキーを奪われ敗北し、そして発狂した。この事から考えると、サポートとは言え、これからは僕自身も強くなっていかなければならない。身体能力などもそうだが、これからのパワーアップにはやはりライドキーが必須となつてくるだろう。しかし、僕が使うアイテムはガイアメモリ。これらのことも考慮しなければならぬ。ならば……)

「検索を始めよう」

僕は両腕を広げて目を閉じる。目の前に真っ白な空間が現れ、「星の本棚」へと入る。

「癖でなんとなくやってしまったが、まさか本当に入れるとは。導き役の特典みたいなものか」

なぜ「星の本棚」に入れたかは分からないが、とりあえず考えるのをやめ、検索する事にした。

「確かキーワードは三つだったね。一つ目はガイアメモリ、二つ目はライドキー、三つ目は何にしようか。とりあえず候補をなるべく搾っておこう」

僕は頭の中でガイアメモリというキーワードと、ライドキーというキーワードを検索し、本棚にしまわれた検索候補を一気に搾る。しかし、やはりと言うべきか、大分纏まったがまだ多い。あと一つ、まだ何かが足りない。

「僕が考えた強化アイテムは、ガイアメモリとライドキーを、共鳴させることで初めて機能する特殊なアイテムだ。そうか！三つ目のキーワードは、共鳴」

やがて検索結果は一つに搾られ、答えが導きだされた。検索結果となった本の内容を、瞬間的に全て頭の中に記憶し、僕は意識を現実へと返した。

「なるほど、これで実現可能となった。さて、作業開始だ」

現実へとかえった僕は真つ先に、ただの作業台と化した机に向かい、強化アイテムの作成を開始する。

「チクシヨウく、アインのヤロウく、Z z z」

(君は夢の中でも仮面ライダーアインと戦っているのか)

夢の中でも忙しい相棒を背に、僕は自分の作業にとりかかった。

「できた」

.....

天才科学者ヒーローの猜疑

「なあフィリップ、お前の邪魔になると思って今まで黙ってたけど、お前が作ってるそれってなんだ？」

「ビツクリした。鍵か、驚かさなくてくれ。」

「驚かしたつもりは無いけど、なんかゴメンな。で、一体何なんだよそれは？」

「これはライディングブレス。腕に装着し、ライドキーを使用することでガイアメモリと共鳴させ、本来の力を発揮する。因みに今完成した。ただ、確かに完成はしたが、これを機能させるにはどうやら戦闘データが必要みたいなんだ」

「なるほど。」

床に頭を強打し幻覚を見ていた俺は、どうやら暴走していたようで、それを止めるためにフィリップに気絶させられていた。目覚めると俺はソファの上で仰向けになって寝ており、そこから上体を起こして顔を横に向けると、ただの作業台と化した俺の机に座ったフィリップが、何やら装置みたいなのを作っていた。工作などに使う板を置き、その上に更に幾つかの、大小様々な金属パーツを置いている。更に様々な工具を置き、右手にプラスチックドライバーを持ち、左手に組み立て途中の何かを持っていた。物作りに集中している相棒の邪魔をすほど俺はバカではないので、俺は何を作っているのか聞きたかったが、フィリップが読んでいた本を手にとりて時間をつぶす事にした。あのフィリップが読む本だから、結構堅苦しい本なのかと思ったが、読んでみると結構面白かった。読むのに集中していると結構な時間が経っており、それとなく読み始めたこの本がこんなに面白いものだった、ということに驚いていた。ついでに、とってはあれだが、なんとなくフィリップの方に顔を向けてみると、この本の持ち主であるフィリップもまた、作業を終わらせて椅子に座ったまま背伸びをしていた。俺がそれを確認し、何を作っていたのかを聞きに行った、と言うのが今の状況である。どうやらフィリップの作ったライドキングブレスなるものは、ガイアメモリとライドキーを共鳴させることで自

信を強化するそうで、よく見るとライドキーを刺すための鍵穴がある。しかし、これを使用するには戦闘データが必要らしく、完成したのに完成してない未完成品、なのだそうだ。

「戦闘データってことはさ、戦ってデータを集めれば良いんだろ？今までと同じ、インベイダーと戦って倒していけば良いわけだ、楽勝じゃん。手伝うよフィリップ、俺で良ければどんどん頼ってくれ」

「鍵、ありがとう。でもあまり頑張りすぎないでくれよ？」

「俺は頑張ってるんじゃない、やりたいからやってるんだよ。なりたかった仮面ライダーを全力でな」

「そうかい。なら、今回もその仮面ライダーを全力でやってもらおうかな。今回の世界は、仮面ライダービルドの世界だ」

「うそおーん。めっちゃ最近に誕生したライダーじゃん」

「ああ。しかも今回世界に入りこんだインベイダーは、かなり厄介な力を吸収している。エボルトの力だ」

「フィリップ、俺さ、もう既に胃痛がするんだけど」

「そうかい。それでもやるんだろう、仮面ライダー？」

「当たり前だ、行くぞフィリップ！」

「ああー！」

俺達は家を飛び出し、何も無い場所に扉を開いた。フィリップは青白い空間の中へ、俺はマシンゲーターに跨がって開いた扉の中へ飛び込んだ。

「次はビルドの世界ですか。行きますよ、Mr. アラタ」

「出来れば僕を巻き込まないでほしいけど、やっぱり行くんだね」

俺達の側に、あの怪盗ライダーが居たことにも気づかず。

「クッソ！倒したはずなのに！なんでまたエボルトがいるんだよ！」

「お前にも分からねえ事が俺に分かるかよ！知るか！」

「どうした？へこの世界の仮面ライダーはこの程度なのか？」

ああ、もう始まっている。例の如くインベイダーとガーディアンとの攻防戦が繰り広げられている。このビルドの世界は、桐生戦兔が無事に

新世界を築き上げた世界らしく、スカイウォールもパンドラタワーも存在しない。人々の笑顔が絶えない、まさしくラブアンドピースを象徴した世界。だった。インベイダーが現れるまでは。

「この世界の仮面ライダー!? どういうことだ!」

「仮面ライダーは俺達だぞ!」

「どういう意味かは、貴様のその足りない頭で考えてみるんだな。もつとも、貴様の相棒はもう察したみたいだけだな。クツクツクツ!」

「おい戦兔、アイツの言ってることは本当なのか!」

「分からない、と言えば嘘になる。俺達の今までの戦いで、パラレルワールドが存在することは分かっていた。もしそのパラレルワールドに俺達ではない、別の仮面ライダーが居たとしたら。」

「俺はその別の仮面ライダーを貴様らに言っているのだ。フンツ!」

「ぐっ!? ゴハアツ!」

「万丈!」

正直、もう見えてられない。膝で思い切り腹を蹴られ、腹を抱えながら地に膝をついた仮面ライダークローズの姿が痛々しすぎる。

「クツクツクツ。弱いなあ、仮面ライダー。俺の知る仮面ライダーはもつと強かったぞ。」

「それは俺達の事かインベイダー!? 行くぞフィリップ! 変身!」

「World gate keeper! Kamen Rider

Gate! f o o o o o!」

「変身!」

「サイクロン!」

フィリップが青白い空間から出てきて、俺達はそれぞれゲートとサイクロンに変身し、俺は変身するなりいきなり攻撃を仕掛ける。フィリップはビルドとクロースの元へ駆けつける。

「はあっ!」

「ぐっ!? 出たな、仮面ライダーゲート!!」

「君達、二人とも大丈夫かい?」

「俺は良いが万丈がダメージを受けている!」

「俺は大丈夫だ戦兔。それよりアンタらはなんなんだ？いきなり後ろに扉が出てきて、その中から突然現れて、変身して！一体何者だよ!? アイツらはなんなんだ!？」

「事情は後で説明する。ただ一つ言えること、それは僕達が君達の敵ではなく、味方だということ。アイツの撃退に協力してくれないか？」

「戦兔、俺はコイツの言うことに嘘は無いと思う。信じて良いんじゃないやねえか？」

「信じて良いんだな？」

「フリリップはビルドの問いかけに対し、静かに頷く。二人のライダーが立ち上がる。」

「分かった。その代わりに、アンタが着けてるその腕のやつとベルトのUSBメモリみたいなのやつ、俺の研究所で調べ、分解させてくれ！」

「元に戻せるなら良いよ」

「任せろ！おし、行くぞ万丈！」

「おう！」

三人のライダーは元居た場所から走りだし、エボルトの姿をしたインベイダー、もといエボルトインベイダーに攻撃した。

「フム、気に喰わんな仮面ライダー共。流石にこの数相手ではキツいか、ここは退くとしよう。貴様ら、俺の為に命を捨てろ！」

エボルトインベイダーは、背後に紫がかった暗い空間をいくつも開き、その中からハーフィンベイダーを何体も呼び出した。

「ではな、仮面ライダー共。チャオ！」

「待て、逃げるのか！」

「戦略的撤退と言ってくれよ、クククク」

そう言つてエボルトインベイダーは空間の中に入り込み、闇に呑まれていった。

「おいおい、結構な数居るぞこれ！こんなに数が多いなんて、ブレイドの世界以来じゃないのか？どうするフリリップ？」

「手分けして倒すしかなさそうだね。あと鍵、Wライドキーを貸してくれないかい？戦闘データも取りたい」

「分かった」

俺はWライドキーを投げ渡す。ファイリップは投げ渡したそれをキャッチし、自信の右腕に装着したライディングブレスに刺し、そして回した。

「W！」

「流石にまだこの段階か。でも、現段階でのポテンシャルがこれなら上等だな」

ファイリップはライディングブレスを通してWライドキーの力を発動し、右手にサイクロン、左手にジョーカーの力をまとつて打撃を繰り出す。

「せいっ！はあっ！」

ファイリップはハーフィンベイダーを次々と倒していき、余裕の表情を見せる。

「僕自信が元々Wだったからかな？Wライドキーに対する適合率はかなり高いな」

「そんなことを言ってる暇ひまがあるなら頼むから敵を減らす努力をしてくれ！」

「分かった」

ファイリップは再びWライドキーを回し、必殺技を発動した。

「W!MaximumFinish！」

ファイリップはジャンプする構えを取り、ライダーキックの準備をする。右足に両手を置き、まとつていたサイクロンとジョーカーの力を流し込んで一つにすると、ファイリップは大きく大ジャンプし、空中でライダーキックの体勢を取る。そのままハーフィンベイダーの軍勢に向かつて急降下した。

「はああああああああああああああああああっ!!!」

複数体のハーフィンベイダーにライダーキックが直撃し、ファイリップが着地するとその背後で大爆発が起きた。

「ふむ、まだまだ改善の余地がありそうだね」

「チクショウ、カッコいいじゃねえかファイリップ！二人とも、俺達も負けてられないぞ！」

「分かっている！決めるぞ万丈！」

「おう！」

俺はゲートドライバのゲートライドキーを回し、ビルドとクローズはビルドドライバのハンドルを回す。待機音声が止み、俺達の必殺技が発動する。

「[Ready Go!]

「[Ride Attack!]

「[Voltack Finish!]

「[Dragonick Finish!]

「[Gate!World Finish!]

俺は地面から飛び立ち、目の前に何枚もの扉が現れ、その中をくぐっていくように。ビルドは足元の地面が台となり、キック台となるグラフが目の前に現れ、それに飛び乗って。クローズは自身の背後に現れた青い龍の吐き出す青い炎にのり、それをまもって。それぞれが相手にしていたハーフィンベイダーに向かってライドキックを繰り出す。ライドキックは見事命中し、ハーフィンベイダー達は全滅した。

「おっしや！全員ぶっ倒したぞ！案外楽勝じゃねえか」

「いや、これは一時の応急措置みたいなものだ。アイツら、インベイダーはまた来るぞ」

「そう言えばさつきもインベイダーっていう言ってたな？教えてくれないか、お前たちがどういう仮面ライダーなのかを。信用していない訳じゃないが、俺達はもっとお前たちについて知るべきだと思ってる」

「当たり前だ。お前達がこの世界の仮面ライダーだからな、俺達について知る権利がある。全て話そう」

「よし、ここじゃあれだからついてきてくれ。俺達の秘密基地に案内する」

俺とフィリップはビルドの言う秘密基地とやらに向かう事となった。新世界を築いた事で秘密基地が喫茶店 *nascita* の地下という事は無さそうだが、果たしてその秘密基地とやらはどこにあるの

だ
ろ
う
か

。

仮面ライダービルド

「ようこそー！我が秘密基地へー！この基地の施設は全部俺製で最新鋭なんだ！凄いでしょ？最高でしょ!?天才でしょ!!」

変身を解いた仮面ライダービルドは、自分の秘密基地に帰って来るなり自称自分製の施設を自慢しだした。興奮し、暴走ぎみのソイツは自分の頭の後ろを素早くかく。かいた部分は寝癖のように逆立ち、整った髪型から一変、その着ている服と相まってだらしない容姿となってしまった。

「おい戦兔その辺にしとけ、コイツら困ってるだろ！それに自己紹介もまだだし！」

同じく変身を解いた仮面ライダークロース。暴走ぎみの相棒を止めるべく、ソイツを一喝する。どうやらそれはいつもの事らしく、暴走した相棒を止める役目だそうだ。ビルドの変身者の寝癖のように逆立っていた髪の毛は正気を取り戻したように元に戻る。もう寝癖の部分だけ別の生き物なのではないかという勢いで。

「はっ、すまん。つい自身の才能に自惚れていた。俺は桐生戦兔、仮面ライダービルドだ。よろしくな」

「仮面ライダークロース、万丈龍我だ。さつきはありがとうな」

「仮面ライダーゲート、戸島健だ。こちらこそ、さつきはありがとう」

「フィリップ、仮面ライダーサイクロン。信じてくれてありがとう」

フィリップが自己紹介を終えると桐生戦兔はフィリップの方に顔を向け、目を見開いてフィリップに近づいてその手を力強く両手で握る。それに反応したように寝癖が再び逆立ち、そしてまた暴走ぎみになる。

「よしフィリップ、さつきの約束だ。覚えているか？」

「分かったから落ち着きたまえ」

大方、ガイアメモリかライディングブレスを桐生戦兔に渡して研究させる約束でもしてしまったのだろう。俺の知る桐生戦兔は、未知のテクノロジーに対して目がない、科学者の性さがという奴だろうか？自身の知らない知識、つまりガイアメモリ、またはライディングブレスに

対してとても興奮しているように見える。

「受け取りたまえ、ガイアメモリとライディングブレスだ」

「おおー！これが俺の知らない未知のテクノロジーで作られたガイアメモリとライディングブレス。大丈夫、分解しても元に戻して返すから、寧ろ元よりスペックを良くして返すから！」

（両方だったかあ、しかも分解すんのかよ。）

「あ、ああ。その代わりにと言ってはなんだが、君達の使うフルボトルという物を見せてくれないかい？」

（こつちにも居たよ知識に飢えた子供の目をした奴が。）

未知の技術、知識を目の前になると目が子供のようキラキラと輝く。未知に対して知識欲に逆らえないという事に関してはこの二人は似た者同士だ。今のファイリッパは、まさしく「興味深いね」という目をしているのだ。

「こんな素晴らしい物を分解させてくれるんだ！寧ろそれじゃ割りに合わない！好きだけ調べてくれ！因みにフルボトルは全部そこにある！」

桐生戦兎はガイアメモリとライディングブレスを見つめたまま、振り向きもせずにフルボトルのある場所を指した。

「ありがとう！」

ファイリッパは目を輝かせたままその場から歩きだし、そしてフルボトルを手にしてそれを調べ出した。

「なるほど、これがこうなってるから。つまりこれは」

「ボトルの中の成分が上手く作用し、そして肉体を強化出来るのか。興味深いね。」

ああ、コイツらもう自分の世界に入っちゃってるよ。凄い集中力だ、周りの音がもう聞こえていないらしい。

「なんかゴメンな龍我、うちの相棒が」

「それを言うならこつちもだ。大分話がそれちまった」

「そうだ！アイツらが勝手に研究し出すから普通に忘れてた。話すよ」

そして俺は龍我に話した。俺が仮面ライダーとなった経緯を、仮面

ライダーの居ない世界の事を、俺達が戦っているインベイダーの事を、今までの事を全て。

「なるほどな。俺バカだから確認させてくれ。お前達の敵はインベイダーって奴らで、ソイツらは仮面ライダーの居ない世界を侵略するから、ソイツらから仮面ライダーの居ない世界を守る為にゲートに変身して戦う。でも最近の調子に乗って俺達仮面ライダーが居る世界にまで侵略しだした。今回はそのターゲットが俺達の世界になった訳で、ソイツらを倒す為にこの世界へやって来た。そう言うことか？」

「ああ、その認識であってる。しかし凄いなアイツら、俺達がこんなに喋ってたのに一言も聞こえてなかったみたいだぞ？」

「だな。」

すると、ずっと作業に没頭していた戦兎が立ち上がり、多分強化されたのである。ライダーリングブレスと、サイクロンガイアメモリと、もう一つのガイアメモリを手にし、それを上に掲げた。えっ、ガイアメモリ!?

「完成だ！ライダーリングブレス完全版、そしてサイクロンガイアメモリの構造を分析し、仮面ライダーゲートの戦闘データを元に作った、最っ新鋭にして最っ強にして最っ高のガイアメモリが！その名も〈ゲートガイアメモリ〉！凄いでしょ？最高でしょ!!？天才でしょ!!」

「ガイアメモリを作ったのかい!!」

さすがに作業に集中していたフィリップもこればかりは驚き、戦兎の持っていたゲートガイアメモリを取り上げて、それをまじまじと全体をくまなく見つめる。

「凄い、ガイアメモリの構造を完全に理解した上で作られている！それだけじゃない、この世界の最高峰のオーバーテクノロジーが組み込まれている！これは、興味深いね。でも僕には使えないな」

「そう、俺が開発したこのゲートガイアメモリはコイツには使えない。お前専用だ、戸島」

「えっ、俺?」

「そう。お前の戦闘データを解析していくうちに、ガイアメモリを

使った戦闘スタイルがあることが分かってな。この俺が、この寛容な心で、この専用ガイアメモリを！作ってやったという訳だ。調べるよ、サイクロンガイアメモリを使った戦闘では多少の誤差の反応があつてな。多分お前がサイクロンガイアメモリに適合してないからだ。でも、このゲートガイアメモリはお前専用でチューニングしてある。今までの誤差は完璧に無くなるし、思い切り暴れられる」

「そうか。ありがとう戦兔！」

「ああ。上手く使ってくれよ？」

戦兔はガイアメモリの端子を傷付けないように持ち直し、それを俺に手渡す。それを受け取ると、俺のものではない誰かの記憶が頭の中に流れ込んできた。恐らくは目の前に居る戦兔の記憶だろう。

〈見返りを期待したらそれは正義とは言わねえぞ！〉

〈仮面ライダーは軍事兵器じゃない。人を守るためにある。それだけは忘れるな！〉

〈僕だって戦争の道具を作るつもりなんて無かった！でもあなたの思惑に気付いた時にはもう遅かった！だから自分に言い聞かせたんです！ライダーシステムはエボルトを倒す為に必要なんだって！その為に多少の犠牲はやむを得ないんだって！〉

〈ラブアンドピース！〉

〈勝利の法則は決まった！〉

なるほど、葛城巧としての思いも込められているのか。これは二人のビルドの、ラブアンドピースを願う思いの結晶なのか。ならばこの世界をなんとしてでも救わなきゃいけない。俺は受け取ったゲートガイアメモリを胸に当て、再決心する。二人の、いや、龍我も入れて三人だな。三人の願いを受け止め、ラブアンドピースの理念を胸に刻む。

「このガイアメモリはお前達の願いその物なんだな。取り返そう、ラブアンドピースを！」

「っ！ああ！」

「いい感じのところ悪いけど、また来たよ。どうやらインペイダーが僕たちをお呼びのようだ」

「よし、行こうぜ！今度こそあのエボルトモドキをぶつ潰す！」
俺達は秘密基地の外に出て、目の前に扉を出現させ、その中に入った。

「フハハハ！やはり侵略はまず蹂躪じゆうりんするに限るな！」

エボルトインベイダーは、とうに人気もなく、ハイフィンベイダー達だけが徘徊し、破壊活動を繰り返すだけの街の中で一人高笑いする。

「クツクツクツ。む？やはり来たか、仮面ライダー共！」

破壊され尽くした、ただの瓦礫と化したビルのたてる砂煙の中に扉を出現させ、その中から出て俺達は肩を並べて歩く。

「酷いな。街がもうこんなに破壊されてる。全く！どこまでお前はエボルトに似てるんだよ！」

「でももう終わり、俺達がお前の侵略を止めてやる！」

「変身！」

「World gate keeper! Kamen Rider
Gate! f o o o o o !」

「サイクロン！」

「鋼のムーンサルト！ラビットタンク！Yeah！」

「Wake up b e r n i n g ! G e t C R O S S — Z
Dragon! Yeah！」

「俺達の！」

「勝利の法則は決まった！」

「さあ、お前の罪を数えろ」

「今の俺は、負ける気がしねえ！」

「良からう、俺直々に貴様らの相手をしてやる。かかってこい！」

その言葉がトリガーとなり、俺達の戦いは始まる。やはりと言うべきか、エボルトインベイダーは強敵で、四人がかりでも攻めきれない。気配を消してパンチをしても、背後からキックをしても、寸手のところで全て防がれる。どうやってあんなことを。

「貴様らは、最後に油断して殺気を放っている。これからあなたを殺

します、と言わんばかりにな。良くも悪くも、貴様らは分かりやすいんだよ」

寧ろ俺達より攻勢なエボルトインベイダーは、マスク越しでも分かるほどの余裕を見せながら俺達の攻撃を軽々とかわしていく。それどころかキックする俺俺の右足を右手だけで受け止め、力任せに足首を握り潰そうとする。

「っ!?ぐあああああああああつ!?」

「戸島!」

「よそ見するなよ仮面ライダー」

エボルトインベイダーは俺を地面に引きずったままビルドのふところまで近寄り、一蹴りで近くにある倒壊したビルDの壁まで吹き飛ばす。

「ガハアツ」

「桐生戦兔!お前」

「おい次来るぞ!」

「フンツ!」

エボルトインベイダーは俺を武器のように振り回し、フィリップとクロールズを巻き込んで俺ごとビルDの近くまで吹き飛ばす。

「くっ。そっ。」

「終わりだ、仮面ライダー!」

絶体絶命とはこの事だろう、まさに大ピンチだ。

(アアコレ、俺モウ死ヌカモ。悔シイナア)

意識が危ない。思考がまとまらない、感情が不安定で仕方がない。なるほど、マスクの中で泣くって、こういうことか。

(クソツ!立て!立て!!立て僕!!早く立てよ、まだ行けるだろう!!?僕の相棒が危ないんだよ!!!)

体が言うことを聞かない。いくら僕が脳で命令しても、体が反応しない。ピクリとすら動かない。ビルDとクロールズも気絶し、変身が解けてしまっている。鍵も半分気を失い、寝転がっている地面から動けずに居る。僕はもう待つしかないのだろうか?目の前で相棒が死ぬ

の体も、ライドキーの力か、体を自由に動かせる程に回復していた。僕はその場から立ち上がり、既にライディングブレスに刺さっているグリスライドキーを回す。

「鍵、君の言葉を借りるよ。〈グレードアップ〉！」

「Cyclone operator! Kamen Rider Cyclone! Type Grease!」

ロストドライバーと同じ声で変身音声が流れ、仮面ライダーグリスのアーマーに似たものが体に装着される。僕は「仮面ライダーサイクロン タイプグリス」へと変身した。

「心火を燃やしてぶっ潰す、か。気をつけたまえ。これから、鉄の嵐が吹き荒れる。」

「フィリッ・プ。」

鍵は僕の名前だけ言うのと気絶し、同時に変身が解けた。

「もう大丈夫だ鍵、君は休んでいるといい」

そう言いきって鍵の顔を見ると、気のせいだろうか、鍵の顔が笑っているように見えた。

「この世界に、ラブアンドピースをもたらそう！」

「仮面ライダーアアアアアアアアアアアアッ!!」

エボルトインベイダーは怒り狂い、僕に向かって走り出した。グリスのロボットの力でエボルトインベイダーの攻撃を分析し、それに対応しながら反撃をする。エボルトインベイダーは焦っているのか、分析をせずとも見切れるほどに攻撃が単調になってきた。だがそれに比例して一発の威力も増してきている。しかし、このグリスのアーマーは攻撃を吸収し、それをそのまま相手に返すという性質がある。つまり、エボルトインベイダーの攻撃は全て自分に返っているのだ。「グウツ。」

「痛いか？自分の攻撃は。だが安心しろ、あの三人はお前以上の痛みを心身に受けてきた！」

僕はエボルトインベイダーを右手で殴り飛ばし、その先にあった瓦礫の山に叩きつけた。

「カハアッ。」

「終わりにしよう。心火を燃やしてぶっ潰す！」

右腕のライディングブレスに刺さったグリスライドキーを回し、必殺技を発動する。トドメの一撃だ。

「Grease! Maximum Finish!»

鉄の混じった、硝煙しょうえんの臭いが漂ただよう黒い嵐を巻き起こし、それをエボルトインベイダーの居る場所に飛ばす。身動き取れないようにしてから自分の右足に風の力を集中的に流し込み、地上からのライダーキックを喰らわせる。ライダーキックは命中し、黒い嵐から解放されたエボルトインベイダーは強く地面に打ち付けられ、僕が着地すると共に背後で爆発した。

「守れた、僕の相棒を。」

「お前門番としての役目果たしたか？ほとんどフィリップがやったように思うのは気のせいか？」

「うるせえっ！あのインベイダーが規格外なんだよ！」

「ははっ、悪い悪い。行くのか？」

「ああ。次の世界が俺達を待っているからな」

「そうか。気をつけろよ。そうだ、伝言頼まれてもらってもいいか？仮面ライダーグリスによろしく言つといてくれ。それとこれ、お前なら使えるんだろ？」

「ビルドライドキー。」

「じゃあ頼んだぜ。」

「分かった、グリスには僕から伝えておこう」

「じゃあなお前ら、次会う時までにはもつと筋肉つけとけよ！」

「なんだそりゃ！またな！」

戦兎と龍我に背を向け、俺達二人は歩き出す。目の前に扉を召喚し、その中へ入り、後ろの二人が俺達を視認出来なくなったところで扉は閉じた。

「よろしくだつてさ、仮面ライダーグリス」

フィリップは自身の手のひらに乗ったグリスライドキーを見つめながらそう言った。フィリップは何でもないような顔をしていたが、

俺にはグリスライドキーがそれに答えるように鈍く光ったように見えた。

「フィリップ、ありがとうな、俺を守ってくれて」

「君は僕の相棒だ。死なれては困るからね」

「それもそっか！じゃあ、次の世界に行こうぜ！」

「ああ！」

俺達は走りだし、ビルドの世界を後にした。

「収穫は無いですか」

「寧ろあの状況で盗りに行こうと思える君が凄いよ！」

仮面ライダーアイン

「グリスライドキーかあ、こりやまた強力なライダーのライドキーを手に入れたな？」

「ああ。彼のおかげで鍵を助ける事が出来た」

「そっか。ありがとなフィリップ」

「どういたしまして」

ビルドの世界を発ち、数時間が経過した。俺達は戦兎達に言った通り、次の世界に来ていた。ライダーの居ない世界だが、インベイダーが侵略を開始しており、そして分かりやすく「活性化」していた。赤く発光したり、青く発光したり、黄色く発光したり。初めて見る傾向だが、さして問題にはならなかった。原因は2つある。まず一つ、活性化しているのは一部の能力だけであり、そしてそれらは微弱なものであり、そして必ず弱点があった。赤く発光した奴は攻撃特化、青く発光した奴は防御特化、そして黄色く発光した奴は敏捷特化、というような感じだ。攻撃特化は防御力を、防御特化は敏捷性を、敏捷特化は攻撃力を、それぞれ代わりに捨てていた。まさしくじゃんけんの法則だ。グーがチョキに強く、パーに弱い。チョキがパーに強く、グーに弱い。パーがグーに強く、チョキに弱い。この法則にフィリップが素早く気づき、勝利への最短ルートとなった。二つ目、エボルトインベイダーとサイクロンタイプグリスが非常に強かったこと。エボルトインベイダーと戦った後では、そこらじゅうにいたハーフィンベイダーが地面でチマチマと頑張っている働きアリのように思えてくる。そしてそんな風に思わせるほどの力を持ったエボルトインベイダーを圧倒した仮面ライダーサイクロンの新フォーム、「仮面ライダーサイクロン タイプグリス」だ。サイクロンの元からある能力、更にロボットの力で敵を素早く分析、フィリップの明晰な頭脳と相まって、かなりハイスペックなライダーとなった仮面ライダーサイクロン。単純なハザードレベルだけで強さを測定したら力の基となった仮面ライダーグリスは優に越えるだろう。グリスライドキーを使う人間がフィリップで本当に良かった。今思えば、仮面ライダーサイクロン

はとても万能なライダーとなった。自らの風の力で攻撃力や敏捷性を強化でき、更にそこにグリスのアーマーの防御力が合わさったのだ。馬鹿正直な戦い方ではもう勝てる気がしない。

「なるほど、グリスライドキーですか。行きますよ、Mr. アラタ」
「いっばれても知らないからな。頼むから僕まで巻き込まないでくれよ」

予告状 仮面ライダーサイクロン様

本日24時30分より「グリスライドキー」を頂戴するため、貴方様の元へ向かいます。

仮面ライダーアイン

「だってきフィリップ、どうする？」

「決まってる、迎え撃とう。前回は悔しくもクローズライドキーを奪われてしまったが、今度こそ」

「分かった。ゼツテエ借リヲ返シテヤル」

（そうか、そういえば前回アインが来た時大分悔しがっていたんだっ
たね）

深夜24時29分、予告した時間まで後一分、いよいよだ。

「鍵、いよいよ時間だ。覚悟は出来ているかい？」

「ああ。さつさとあのクソアインの顔を拝んで、一発殴ってやらないと気がすまない！」

俺はあらかじめゲートライドキーをズボンのポケットの中に入れ、ゲートドライバーを上着の下に装着し、いつでも応戦出来るようにした。フィリップも既にロストドライバーを上着の下に装着し、ライディングブレスも右手首に装着し、いつでも仮面ライダーアインとの戦闘に入れるようにしている。対策をしているのか、グリスライドキーも既に右手に握っている。

「そうだね。そろそろ来るよ！」

「Mr. アラタ、準備はよろしいか？」

「君がほとんどやるんだから、僕の場合準備もクソも何も無いだろ？」

「違うない。行くぞ！」

「必ず我が物にして見せよう！」

「盗れるものなら盗ってみろ！」

「仮面ライダー！」

やがて壁にかかった時計の長針が6の数字を指し、予告の時刻となった。数秒後に玄関のチャイムが鳴り、警戒心を緩めることなく、しかし警戒心が悟られるようなことが無いように、そこへ足を運ぶ。

(仮面ライダーアイン、どう来る?)

おそろおそろのドアの向こう側を見ると

(いや前と同じなんかーい！バカなの!?アホなの!?流石に二度も同じ手に引っかけからねえわ！いやでもアインの事だ、きつとまた違う策があるんだ。)

「宅急便です！判子をお願いします！」

(同じだよ、前の作戦と全く同じだよ、本当にライドキー盗みに来たのかよコイツ！)

アインの余りのバカさ加減に、俺は声にならない叫びを心の中で叫ばずにはいられなかった。だってコイツ前と全く同じ格好と作戦で来てるんだよ!?ただのバカでしょコイツ！

「ねえアイン、本当にこの作戦で行くの!?正気!?絶対バレるヤツだよねこれ！」

僕、「怪条 アラタ」は今、自分の腰に巻きつく意思を持つベルトに対して怒っている。それも非常にだ。理由は直ぐに分かる。この後、ベルト本人がその理由を言うからだ。

「何を言うかMr. アラタ、これはあえての作戦なのだよ。あえて同じ作戦で行くことで、本当に同じ作戦なのだろうか?と猜疑させ、悩

みに悩ませそしてその間に頂く、という寸法ですよ」

「とかそれっぽく言ってるけど違うよね？僕知ってるよ？君昨夜さ、僕が寝てる間作戦を練ってたよね？その時僕聞いちゃったんだよね。予算、準備、面倒、この三つの単語。これだけ証拠並べてもまださらばつくれるの？」

「さあ行こうか」

「おいー」

ねえ、見てくれたかな今のこのバカベルトの反応を！バカでしょ！もうバカ！僕はもう胃が痛いよ。後になつて僕たちがゲートとサイクロンに捕まるのは言うまでもない。

「いやあこんな時間に荷物をすいませんー！ご苦労様ですー！」

偽業者という事は分かつてはいるが、ここはあえて騙されてあげよう。そうする事で相手を油断させ、最後は見事に期待を裏切る、そう言う作戦だ。

「仕事なので大丈夫です」

「ちよつと待ってて、「今日は手元に判子がある」ので」

嘘だ。判子なんてものは最初からどこにもない。あるのはゲートドライバーとゲートライドキーだけだ。俺はあるはずもない判子を宅配業者の目の前で身体中を触って探しまわる。

(なぜ奥の方へ行かないのだ!?)

(逆に何でこの人が判子を探しに行く前提なの!)

(まあ良い。Mr. アラタ、代わりなさい。時間が惜しい)

(分かったよ)

僕は体の主導権を大人しくアインに譲り、僕は意識だけの存在となる。アインは相当な自信があるようだけど、僕はこれからどうなるか心配で心配でしょうがない。馬鹿なベルトを持つと本当に苦労するよ。

(それでは行きましょう。グリスライドキー、私の元へ来い)

(ファイリツプ、宅配業者が下を向いた)

現在、俺は宅配業者の目の前で判子を探すフリをしている。そうしているとは宅配業者はやがて帽子を深くかぶり、下をうつ向いた。

(顔を覗いて見てくれないかい?)

(分かった)

俺は脳内でファイリツプに言われた通り、うつ向く宅配業者の顔を覗く。見ると宅配業者の目は極限まで見開かれており、そしてその瞳は深紅しんくに輝いていた。しかし顔を覗くこちらに気づく様子はなく、目の前で手を振ってみても気づく様子がない。裏が取れた。

(ファイリツプ、グリスライドキーは?)

(まだ大丈夫だ。何かあったのかい?)

(裏が取れた。コイツ多分今グリスライドキーを探してる。目が赤く光ってる)

(分かった。充分に注意するよ)

グリスライドキーが狙われた理由、それは間違いなくあの戦闘での活躍が原因とみて間違いないだろう。あのエボルトインベイダーを圧倒し、おそらく、力の元となった「仮面ライダーグリス」をも超えているであろうあの能力、これこそ今回狙われている原因だ。僕は前回の様な失敗を犯さないようにと、グリスライドキーは既に右手に握り持っている。しかし、どうやらそれも見つかってしまったらしく、手の中で明らかな違和感を覚えた。相変わらず僕はそこからどうすれば良いかわからず、どうにもできずにいる。

(くそっ！僕はまた……！)

しかし前回のクローズと今回のグリスには、ある決定的な違いがあることが判明した。それは……

「お前誰だ!?この中から出て行け！」

……ライドキーに意思、または魂がやどっているかないかだ。グリスライドキー、いや、仮面ライダーグリスはライドキーの中で反抗でもしていたのか、ライドキー本体から火花を散らし、僕の手から離れ、やがてその違和感を完全に消し去った。

「……まずい！ Mr. アラタ、撤退です、逃げますよ」

（はあ!? なに、失敗したの!? だから言ったのにこの作戦で行くのかつて……）

「予想外でした、まさかライドキー本体に意思があるなんて……！」

「あれ、仕事放棄？ 駄目ですよそんなことしちゃ……。判子見つかりましたよ？」

そう言うときフリリップが家の奥から出てきて、「これだろ?」と言わんばかりにグリスライドキーを見せつけた。俺達は隠すために着ていた上着のチャックを全開にし、戦闘態勢に入った。

「もう、逃がさねえぞ、仮面ライダーアイン……！」

「クローズライドキーは返してもらえなくても、借りはきっちり返させて貰うよ!」

偽宅配業者はしばらくとどまったあと、自分の持つ荷物を放り投げて遂に逃げ出した。

「待てっ!!」

「今度は逃がさない!」

俺とフリリップとアインによる三人の追いかけっこが始まる。さしずめ俺とフリリップが鬼で、アインが逃げる側だろうか。流石と言うべきか、アインは怪盗と名乗るだけあり足がとても速い。それに動きにまったく無駄が無いため余計にだ。だが俺達も負けてない。今までの戦いで培^{つちか}ってきた体力がここに来て役にたった。負けず劣らず、アインを1メートルたりとも離^{はな}すことなく追いかけて続け、遂に行き止まりまで追いつめた。

「はあっ、はあっ、はあっ。んっ、今度こそ逃がしてたまるか!」

「悪いけど、大人しく捕まうてもらおうよ?」

「クツクツクツ。クハハハハハハハッ! 捕まる? 私が? 残念ですが、そうは行きません。私にも、目的があるのでね!」

そう言うときアインは自分の着ている服を「引き剥がし」、その下から更に新しい姿で俺達の前に現れた。黒い蝶ネクタイに白いスーツを

身に纏まとい、その上から更に白いマントを羽織はねっている。頭には黒いリボンが走った白いハットをかぶり、左目の下に黒いダイヤのマークのタトウたとうを入れていた。そしてその中のどれよりも目立つ「ある物」を腰に巻いていた。

「ゲートドライバー!?でも色も全然違うし、造形も微妙に違う。」

「アインドライバーです。仮面ライダーの名は伊達では無いのですよ。」

アインはズボンのポケットからライドキーを取り出し、それをドライバーに刺した。そして

「Ride Change!」

「変身」

「World treasure hunter! Kamen Rider Ine! fuhahaha!」

仮面ライダーアインに変身した。

「かかってきなさい、仮面ライダー達よ!」

「ワイルドップ、ここは俺に行かせてくれ。アイツは俺がぶつ倒す!」

「分かった。アインは君に任せるよ」

「ああ、変身!」

すかさず俺も変身し、仮面ライダーゲートになる。

「おや、あなた一人ですか?」

「お前なんて俺一人で充分だ!グレードアップ!」

俺は右腰からワイルドキーを取り出してゲートドライバーに刺し

込んで、それを回して「仮面ライダーゲート タイプW」に変身する。

「なるほど。せいぜい楽しませてください。グレードアップ!」

すると今度はアインも右腰からライドキーを取り出し、二つ目の鍵穴に刺し、それを回して

「World treasure hunter! Kamen Rider Ine! Type Acceler!」

「仮面ライダーアイン タイプアクセル」へと変身した。

「マジかよ。」

「あなた達は気づいていませんでしたが、私はいつもあなた達と共に

世界を巡っていました。W、ブレイド、ビルド、この三つの世界をね。もつとも、本命は全て持っていかれましたがね！」

コイツ、相当な手練れだな。しかし「三つの世界」か、この言い方だと、アインは「あの世界」を知らない事になる。この事黙っていよう。自分が有利になるために。俺達はガンブレードキーと「ガンブレードキーツヴァイ」なるものをぶつけ合い、火花散らしあう。お互いの強攻撃でお互いに大きく後ろに下がる。俺はその隙に素早くWライドキーとブレイドライドキーを刺し替えるが、アインも考えている事が同じだったようで……

「グレードアップ！」

俺はブレイドライドキーへ、アインは「ギャレンライドキー」へ刺し替え、それぞれ「仮面ライダーゲート タイプブレイド」と「仮面ライダーアイン タイプギャレン」に変身した。俺達は互角で、お互い一步も譲らない。ずっとこの状態が続いている。アインが撃ってくる弾をブレイラウザーで切ったり、俺がブレイラウザーで切りかかるとギャレンラウザーで撃ち返してそれを防いだり。

「グレードアップ！」

再び俺達はビルドライドキーとクローズライドキーに刺し替え、それぞれ「仮面ライダーゲート タイプビルド」と「仮面ライダーアイン タイプクローズ」へ変身した。俺は「ドリルクラッシュャー」などの科学の力を使った戦い方で、アインはお馴染みの肉弾戦で対抗する。

「これでお互い手持ちが無くなりましたね！」

「お前何か勘違いしてないか？俺が持つてる力がこれだけだとも思ったか？」

「何だと!？」

右腰から「電王ブレイズライドキー」を取り出し、「仮面ライダーゲート タイプ電王ブレイズ」へ変身する。はずだった……

「世界を越えて、俺、参上……ってあり？」

「はっ?？」

「はっ?？」

「はあっ!？」

「そう、ご覧の通り、「モモタロスイマジン」が憑依ひょういしてしまったのだ。」

「おい！お前モモタロスだろ！何で俺の中に入ってるんだよ！」

「テメエは何で俺の名前を知ってるんだよ！つーかテメエ誰だ！」

「ちよつと待て！モモタロス、お前さ、契約者何人居る？」

「ああ？二人だけど。」

「その二人目もう分かったわ。俺は戸島鍵、仮面ライダーゲートの変身者だ。お前の二人目の契約者とは、まあお友達だ。よろしくな」
「なるほど、だから俺を知っていたのか。で、テメエは今どういう状況なんだ？見る限り、目の前に居る白い奴と戦っていたみてえだが。ぶっ倒しても良いのか？」

「知り合いだから知ってる訳ではないが、まあそう言うことにしておこう。そんなことを考えつつ、俺はモモタロスの問いかけに対して答える。」

「出来るならな。行けるか？」

「あたりめえだろ！俺を誰だと思ってるんだ！」

「そうだな。そうだモモタロス、ちよつと主導権代われ。良いもの使わせてやる」

俺は主導権をモモタロスと代わり、ある物を取り出した。それは「仮面ライダーアイン、俺のこのタイプとこのメモリは知らないだろ？」

「ゲート！」

そう、「ゲートガイアメモリ」だ。俺はゲートガイアメモリを起動し、ゲートガイアメモリによって使用可能となった新しい武器を取り出した。そうだな、「ゲートガイアソード」とでも名付けよう。

「なんだ、私の知らないそのタイプとそのガイアメモリは！私が知らないものがあるなんて。」

「いいかモモタロス、これを作った人間のかかげる言葉はラブアンドピースだ。私欲の為じゃなくて、愛と平和の為に使えるなら、この力を使わせてやる」

「分かった。お前達にも、自分の正義があるって事だな。よし、じゃあ正義の為に、行くぜ行くぜ行くぜえっ!!!」

その頃

「モーターローラー！呼んでるのに何で来ないんだよ！ああもうじゃあウラタロス！」

呼んでも来ないモモタロスの代わりにウラタロスと呼ぶシンガだった。

モモタロスが憑依したゲート、Mゲートは右手にガンブレードキー、左手にゲートガイアソードを持ち、二刀流の構えでその場から走り出す。やはりと言うか、元からあるモモタロスの身体能力が俺の体に反映され、更に「電王ブレイズライドキー」への適合率がとても高く、こちらが押している状況となった。

「くっ！イマジンの分際で、私に刃向かうなど、許しません！」
「悪いな、一時的には言え、愛と平和が宿主のご要望なんぞな。とつとと決めさせてもらうぜ」

Mゲートはゲートガイアメモリを取り出すと、ゲートガイアソードの持ち手に付いたホルダーに刺し、持ち手のトリガーを引く。

「ゲート！マキシマムドライブ！」

両手に持った剣が刀身を同時に光らせ、必殺技を発動する。

「必殺、元祖俺の必殺技！ゲートバージョン！」

Mゲートは一気にアインのふところにつめよる。

「でえい！」

一発目。

「でああ！」

二発目。そして

「だああああああああっ!!!」

三発目。最後の一撃で仮面ライダーアインを強制的に変身解除させ、俺達も分裂して変身解除した。

「ふう〜暴れた暴れた」

「さて、どうしてくれようか？俺ってば心が寛容だから顔面一発殴らせるで許してやってもいいよ？しかし、モモタロスお前なあ、体を乱暴に使いすぎ！これもう筋肉痛来るな、って分かるくらい体に違和感ある！」

「わ、悪かつたな」

「まったく。でどうする？俺に一発殴られるか、また逃げるか。もつとも、こっちはモモタロスも入れて三人だ。逃げたところで、モモタロスに捕まってボコボコにされるのがオチだろうなあ？クツクツクツ！」

分かつてる、分かつてるよ！自分でも引くぐらいに今の自分が超悪役だって事くらい！でもどうしてもこいつを殴りたいんだよ！分かるかなこの気持ち！

(アイン、僕に代わって)

「Mr. アラタ!?何を言っているのですかあなたは！今出たらあなたが危ないですよ！」

「Mr. アラタ」、アインは確かにそう言った。アラタとは誰だ？アインの常人としての本名か？しかしそれにしても誰かに話しかけているような喋り方だ。

(いいから代わって)

「ですがしかし」

(代われって言っただろ！)

「ヒイツ!？」

やがて別人の声が聞こえてきて、人格が代わったように口調が変わり、自身の腰のアインドライバーを無理矢理引き剥がした。

「あの、すみませんでした！」

「なるほど。ベルトを装着することで体の主導権をそのベルトと自由にかえることができ、怪盗として動く場合は主導権はアインが握っていたと？そう言うことで良いアラタ少年？」

「はい、本当にすみません。あの、この程度では許されないと思いますが、今まで盗ってきたライドキー全部返します！」

アラタ少年は罪悪感に耐えきれなかったのか、ライドキーを全部返すと言いだした。

「なっ!? 正気ですかMr. アラタ! ライドキーをすべて渡すなど!」

「僕はいつだつて本気だ。返すたら返す!」

「そんな」

二人(正しくは一人と一つか)がそんなやり取りをしていると、突然青白い空間を開いて、中からフィリップが出てきた。

「ありがたいが、その必要はない。君達が戦っている間、僕なりに「そのライドキーが使えるライダー」について調べてみた。するとこんなことが分かった。僕達ライダーには1号ライダー、2号ライダー、そして3号という概念が存在し、1号ライダーの力が秘められたライドキーは1号ライダーにしか、2号ライダーの力が秘められたライドキーは2号ライダーにしか、そして3号ライダーの力が秘められたライドキーは3号ライダーにしか使えない。そしてそれらの概念に関わらず使用可能なライドキーも存在する。そのライドキーを使用する人物のライドキーに対する適合率が高ければ使用することが出来る。僕の場合は元々Wだったため適合率が高く、そしてそれを使用出来た。君もそうだモモタロス。君は現に電王であるために使用できた」

「なるほど、さっぱりわかんねえ」

「電王が電王の力を使えなきやおかしいだろ? つまりそういうことだよモモタロス」

「ああ、納得がいったぜ!」

しかしここで一つの疑問が頭に浮かぶ。フィリップは結局何が言いたいんだ? と。

「えっと、フィリップさん、でしたっけ? つまりどういう事ですか?」

アラタ少年が俺が聞きたかったことを聞く。フィリップのその口から出てきた答えは

「まあ、極論から言うくと僕達にはどうあってもそれらのライドキーは使えないと言うことさ」

「そういうわけだ。このライドキーたちはお前の物だよ。ところでさ

アラタ少年、そのベルトにお仕置きしても良いかな？」

俺がにこやかな顔でそう聞くと、彼もまたにこやかな顔で答えてくる。心の底からの笑顔を全面に浮かべながら。

「あつ、本当ですか？是非お願いします！」

「あ、あのーMr. アラタ？これから私は一体どうなるのですか？つてぎやあああああ！」

殴ってやりたかったが、そうすると拳が角に当たって痛いので地面に打ち付けることにした。今までために溜め込んできたストレスが一気に解放されていく。

「ごまあ無いねアイン？」

アラタ少年は満面の笑みを浮かべたまま、アインを見つめる。

「ちよつ、Mr. アラタ！見ていないで助けなさい！」

「助け”なさい”？」

「た、助けてください！」

「まったく、しょうがないな。鍵さん、もうその辺にしてやって下さい。こんなんでも、一応世界を共に旅してきた仲間なんで」

「分かった。その代わりつて言ったらあれだけど、俺達と一緒に戦つてくれないか？」

「っ！はい！喜んでお手伝いさせて頂きます！」

「なぜこの私がこのような者達と」

「壊すよ？」

皆まで言わずともその言葉の意味が分かってしまったのか、アインは慌てて答える。

「分かりました分かりました！協力しますから！」

「それで良いよ。それじゃあ僕らはこれで！鍵さん、アラタ少年だと堅苦しいんで、アラタって呼んでください」

「分かった。じゃあなアラタ。また次の世界で」

アラタは俺達に背を向けて、目の前に扉を開いてその中へ消えていった。

「アイン、ルールを決めよう」

不屈の魂

「おい鍵、お前え今暇か？もし暇なようなら、ちとばかし買い出しを頼まれちやくれねえか？必要な物のメモと金は渡すからよ」

「買い出し？いいよ。そういや最近の世界を飛び回ってばっかで手伝いを出来てなかったからね」

「おう、頼むぞ」

「今日も多いなあ。オヤジさん毎日こんなもってんのか？すげえな」

「俺は今、オヤジさんに買い出しを頼まれて外出している。そしてちょうどその頼まれた物の買い出しが終わり、今はまっすぐ帰宅しているところだ。ここ数日はインベイダーも大人しく、侵略されてる世界が少ない。あっても、そこはインベイダーの倒し方に関する知識があるライダーの世界だけだ。そうだ、ラブアンドピースとはこういうことだ。こんな平和な日々が続けば良いのに、なんて考えていることを過去の俺が知ったら何て言うかな？昔の俺は平和に飽きて刺激を求めていたからな。しかし、俺の「平和」という真摯な願いをうち壊すようにそれは現れる。それとはつまり「デファイリントライナー」だ。デファイリントライナーは俺の頭の真上の上空に現れ、そして俺の目の前で停車する。」

「ファイリップ、パシリにするみたいで悪いんだけどさ、ちよつと俺の代わりにこの荷物運んでくれない？」

俺はいないはずのファイリップに話しかける。直後青白い空間が開かれ、その中からファイリップの物と思われる右腕が現れ、「分かった」という言葉と共に消える。直後、デファイリントライナーの車体についた扉が自動で開き、中から人が降りてくる。

「お前の方からこの世界に来るとはな。久しぶりだなシユンガ！」

「おう、久しぶり鍵！」

そう、デファイリントライナーの操縦士にして、三代目仮面ライダー電王、仮面ライダー電王ブレイズの変身者である「時野 シユン

ガ」だ。

「どうしたんだ急に？連絡、つつても無理か。で、“何があつた”んだ？」

「流石に察しが良いな。鍵、協力してくれ。大人のお前の力を借りたい！」

俺達は場所を、ディファイリントライナーの車内に移し、シユンガがこの世界にやって来た理由を聞いた。

「えーとつまり？お前達の敵であるアナザーブレイズが仲間裏切られて、今回のサムライインベイダーがアナザーブレイズの立場そのものを力として吸収。アナザーブレイズは行き場を失つてお前との決戦に臨んで消滅。お前はブレイズとの戦闘に勝利した後、俺にサムライインベイダーの事を伝えるためにこの世界にやって来たところ。この解釈であつてるか？」

「そういうことだ」
俺はシユンガに確認をとって、自身の解釈があつているか確かめる。シユンガは首を縦に振り、それを肯定する。しかし、それを確かめたところで俺の頭にはある一つの疑問が思い浮かぶ。それは「なるほど。なあシユンガ、俺思つただけどき、お前、本当に倒したか？」

「どういう意味だ？」
流石に俺の言うことに疑問を感じたのか、シユンガは俺の問いかけに対して聞き返してきた。

「そのままの意味だよ。奴の消滅を確認したのか？見たのか？聞いたのか？ブレイズが消滅したって言い切るには証拠が足りなすぎる。シユンガ、“倒したはずの敵が復活するのはお約束”だぞ」

「ブレイズは、まだ生きてる」
「分からない、かもしれないってだけだ。もしかしたらちゃんと倒しているかもしれない。でも、俺は前者の方が濃厚だと思う。つと、大分話が逸れたな。サムライインベイダーが俺の世界に来るかも知れないんだっけ？そんなもん簡単だろ、ぶつ倒せば良いだけだろ

？」

「こりやあ、インベイダー達が鍵に勝てない訳だ、自信の出し方が全然違うよ。そうだな、来るなら倒せば良いだけ、俺達は今までそうやって来たんだもんな。よし、行こう！」

「ああ！」

シユンガはディファイリントライナーを発進させ、サムライインベイダーが現れるであろうその場所まで向かった。

「ほう？ここがゲートの世界か。中々に侵略し甲斐がありそうな世界だな。家来共、侵略開始だ！」

サムライインベイダーは自分の後ろに紫がかった暗い空間を開き、その中からイレベスや忍者を思わせるハーフィンベイダーを大量に召喚し、破壊活動を開始する。

「クッククック。素晴らしい光景だ。このまま全て破壊し、この世界を我が物とし天下を頂こう！」

しかし、背後に突如現れたディファイリントライナーのフレームがサムライインベイダーの背中に当たり、サムライインベイダーはその勢いでそのまま吹き飛ばされる。

「グオツ！」

「悪いけど」

「お前の天下はここまでだ！」

俺達がそう言い切るとディファイリントライナーの先頭車両のハッチが開き、俺達二人はそれぞれのバイクに跨がって飛び出し、そこから更にバイクごとのしかかるようにサムライインベイダーを攻撃した。

「オエツ！」

「汚ねえなおい！俺のバイクにかけてねえだろうな？」

「い、今のは仕方がないであろう！お主らがバイクごと乗っからなければ良いのだろう！」

「だって少しでも敵の体力削つとかないと」

「お主らは変なところで真面目か！」

「だって、俺ら仮面ライダーだからさ。変身！」

俺達は同時に、それぞれ仮面ライダー電王ブレイズと仮面ライダーゲートに変身する。直後、背後からまた別のライダーが現れた。仮面ライダーサイクロンと仮面ライダーアインだ。

「なんか増えたな。サイクロンはなんとなく分かるけど、この白いのは誰？ってかファイリッブその姿どうした？」

「はい順番に行こうなく、まずはアラタから」

「初めまして。仮面ライダーアインの怪条アラタです。よろしく願いします」

「こちらこそよろしくな。で、ファイリッブお前はどうしたんだ？」

「これはこのライディングブレスを使って、ライドキーで自身を強化した姿さ」

「へえ、そんなことも出来るんだな」

俺達が悠長に話をしていると、どうやらサムライインベイダーは待っていてくれなかったらしく、ジャンプしたサムライインベイダーが、真上から迫って俺達を斬ろうとしていた。俺達はなんとか紙一重でそれをかわしたが、奴の一撃はとても重く、斬りつけた地面を中心に突風が起こった。

「うおっ!？」

「戦闘中に話をするとは、随分と余裕なのだな？」

三人はその言葉に自分の出そうとしていた言葉を飲み込んだが、俺はこう言った。

「ああ、余裕だ。そしてお前はどうかやっても俺達に勝てない。たったそれだけだ」

言った。言ってしまった。これはもう絶対に負けられない。

「余程の自信があると見える。良かろう、この私が直々に相手をしてやろうではないか！」

サムライインベイダーは左腰から太刀を引き抜き、右手に持ってこちらに向かってくる。

「鍵さん、ハーフィンベイダーは僕たちに任せてください。鍵さんはアイツを！」

「分かった。行くぞシユンガ！」

「ああ！」

右手にガンブレードキーを持ったまま、俺は素早くゲートガイアメモリを取り出して起動し、「ゲートガイアソード」を呼び出す。呼び出されたそれは、「掴め」と言わんばかりに空中に留まる。ゲートガイアソードの持ち手を掴み、それを左手に持って二刀流の構えを取る。

「なんだよそのガイアメモリ！」

「ゲートガイアメモリ、俺専用だ。いいだろ？」

「別に羨ましくねえし！俺だつて二刀流出来るし！」

余程羨ましかったのか、右手にブレイクソードを、左手にデンガツシャー・ソードモードを持って二刀流を真似する。

「ふっ。」

「えっ、早っ!？」

ゲートガイアメモリを使用中の効果だ。ゲートガイアメモリを使用中の間はゲートの全体的な能力が強化され、それに伴って俺自身の身体能力も強化される。

「ぐっ。」

「どうした、自称侍！そんなものか！」

俺はそんな事を言いながらガンブレードキーにアビリティライドキーを刺し込み、それを三回回す。

「Ride Abirity! Power Form! Sheal
d Form! Speed Form!」

三つの力を装填し、銃口をシユンガに向け、そしてトリガーに指をかける。

「怖い怖い怖い何する気なの！」

「こうする気だよ！良いからお前も働け！」

俺はトリガーを引き、シユンガに向かってエネルギー弾を撃ち込む。

「うおおおおおおお!? つてあれ? ああそう言うことか、心臓に悪いなまったく。じゃあ、上司がああ言ってるし、俺も一丁やりますか！」

そう、俺が撃ったエネルギー弾は「対象を強化する弾」だ。エネルギー弾は見事シュンガに命中し、その対象となったシュンガは強化された。

「10発やって駄目なら100発、100発やって駄目なら1000発、それでも駄目ならそれ以上！」

「何回でも撃ち込んでやる！お前が倒れるその時まで！」

何回サムライインベイダーを攻撃しただろうか、サムライインベイダーが遂に地面に膝を突く。

「この、俺が、負ける、など、あり得、ない。」

「あり得るだろ？現にこんな状況だし」

そんな事を言っていると、後ろから二つの声が聞こえてきた。

「鍵さん、こつち終わりました！」

「早くそつちも終わらせるといい」

「だとき。決めるぞシュンガ」

俺達は同時に必殺技を発動し、狙いをサムライインベイダーに定める。

「二必殺、俺達の必殺技！」

二本の剣を構えながら、サムライインベイダーの懐まで一気に接近し、乱雑に何回斬りつける、最後は二人同時にサムライインベイダーを攻撃した。

「はあああああああつ！」

「グアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

やがて大きな爆発が起こり、サムライインベイダーは消滅する。はずだった。

「まだ、だ。まだ、我が覇道は、終わっていない。」

「そんな、まだ倒れないなんて。」

「どんだけ執念深いんだよアイツ！」

俺達がサムライインベイダーの執念深さに呆れているその時、サムライインベイダーの背後から謎のライダーが現れ、そいつはサムライインベイダーの後頭部を一蹴りした。

「グガツ!?こ、今度は、なんだ、お前は！」

「いい加減にしろ、インベイダー。ブレイズは二人も要らない、俺一人で充分だ」

そう言う謎のライダーは必殺技を発動し、構える。

「バグルチャージ！」

「消えろ、インベイダー！」

謎のライダーはその場で大ジャンプし、ライダーキックをした。ライダーキックはサムライインベイダーに命中し、今度こそサムライインベイダーは消滅した。

「答えが出た。俺は自分の信じる正義の為に戦うことにした。だからまたお前と対立するかもしれない。これが結論だ」

謎のライダーは歩きだし、空気に溶け込むようにしてその姿を消した。

「待ってくれ、〈ブレイズ〉！」

「仮面ライダー、ブレイズ」

「仮面ライダーブレイズか、良い響きだな」

「で結局、お前の担当する世界に何故インベイダーが出たのかは分かったのか？」

「いや、分ならず終いだった」

「そか。でも良かったな？お前の今の顔、めっちゃくしゃってなってるよ」

「そうかな？いや、そうかもな。じゃあ俺は帰るよ、またな」

「おう、また来いよ！」

シユンガはディファイリントライナーに乗り込み、それを発車させる。やがてディファイリントライナーはその姿を消し、辺りには何もなくなかった。

「行ったな」。しかし、仮面ライダーブレイズ、不屈の魂を持った仮面ライダーか。こりやまた敵にまわしたくないライダーが誕生したな」

そう独り言をつぶやき、俺は大人しく帰路についた。

熱血刑事はなぜアイドリングなのか

「うーん。」

「どうしたんだい鍵？さっきから浮かない顔して」

「ああいやさ、ちよつとシユンガの言っていた事が気になったんだよ。へスフィアアースにインベイダーが居るってな。でもあっちがあつちで解決するから別に良いかー」

「そんな事か。なら次の世界に行こう」

「そんな事って、流石にそれは無いだろ？」

「いや、僕から言わせればそんな事だね。事態は急を要する」

「ふうん？次の世界は？」

「ドライヴの世界だ」

「最悪だあ」

ドライブの世界は、ロイミュードという機械生命体に人類がおびやかされ、そしてそれを滅する為に作られたのが仮面ライダーだ。結論から言えば、ある一人の熱血刑事と、その刑事が変身するための意思を持ったベルトによって、ロイミュードは全滅した。その後、程なくして仮面ライダーはそのベルトによって封印され、刑事は変身が出来なくなった。もう一人のライダーを除いて。

「俺の記憶が正しければなんだけどさ、今ドライブの世界を守れるライダーって。」

「一人だけだ」

「急ぐぞー！」

「ああー！」

俺達は外に出て、俺はマシンゲーターに跨がり、フィリップは青白い空間の中に入る。目の前に扉を開き、そのままその中に入る。

「フィリップ、ナビゲート頼む！」

「ああーこのまましばらく直進してくれー！」

「分かったー！」

この「扉の中の世界」というのはとても広く、フィリップのナビゲート無しじゃ目的の場所までの移動すら困難だ。それに広いだけでは

ない、扉も多いのだ。世界と世界を繋ぐための扉が。一度いったことのある世界であれば何とかなる。ライダーの世界だったらその世界のライダーのライドキーでマシンゲーターのエンジンをかければいいし、ライダーが居ない世界だったらアビリティライドキーの「サーチ」で探せばいい。だが、行つたこともない世界を一人で探せと言われると、正直言つて無理である。実感がわかないかもしれないが、それが事実なのだ。

「あの扉の手前を左！あつたぞ、あれだ！」

思い切りアクセルを回し、マシンゲーターを急加速させる。バイクに乗つたまま扉を突き破つて外に出ると、もうインベイダーによる侵略が始まつていた。

「ああもう何コイツら！ゼンリンシューター全然効かねえし！進兄さんなんか知らない!？」

「俺に聞くな俺に！俺だつて初めてだよこんな奴ら！」

「だよねっ！」

「フンツ。弱いな人間」

一人は天然パーマの髪型で、赤いTシャツの上に白いパーカーを着こなし、「ゼンリンシューター」という武器の前輪でインベイダーを攻撃し、もう一人は、ネクタイをしめた状態の白いワイシャツの上から、ボタンを締めずにスーツを着た刑事。そして今回この世界を侵略インベイダー、居たよ。しかし不思議に思ったのがインベイダーのそのシルエツトだ。インベイダーは何かしらの力を吸収する事で本来の力を発揮し、そして進化、いわゆる完全態のようになる。なのにあのインベイダーのシルエツトはおかしい。俺の記憶が確かなら、あのインベイダーの力の元となつた奴は、今戦つた刑事によつて倒され、そして機能停止、いや、死んだはずだ。いや、一度復活してはいる。だがそれも長くは続かず、再び消滅しているはずだ。そしてそれらを踏まえた上でこの世界の時間を考えると、元となつたソイツが今存在することは考えにくい。

「なあフィリップ、アイツどうやって力を吸収したんだ？だつてアイツの力つて。」

明らかにハートだよな？

「ああもう！コイツら倒しても倒しても湧いてくる！埒が明かない！」

「進兄さん下がってて、俺がやる！チェイス行くぞ！」

「俺は、何をしてるんだろうな」

彼はバイクのマフラーを模した造形の青いベルト、「マツハドライバー炎」を腹に当て、ベルトのスロット部分を展開し、傷だらけの黒いミニカーならぬミニバイクを収納する。

「シグナルバイク！」

ロック風な待機音声が流れだし、白いパーカーの青年は変身ポーズをとる。

「レッツ、変身！」

ホルダー部分を収納し

「ライダー！チェイサー！」

変身に伴って再びロック風な音楽が流れる。青年の体に鎧がまわり、仮面ライダーへと変身。

「追跡！撲滅！いずれもマツハ！仮面ライダー、チェイサーマツハ！」
元の仮面ライダーマツハにチェイサーの要素が追加されたようなライダー、「仮面ライダーチェイサーマツハ」へと変身した。

「なるほどな。貴様、この世界のライダーだったか」

「この世界のとてどーゆー意味!?!」

「そのままの意味さ。どうせ直に邪魔者が来る、すぐに意味が分かるさ。フンツ！」

「うおあつ!?!」

ハートの姿をしたインベイダー、そうだな、「ハートインベイダー」としよう。ハートインベイダーは自身をゼンリンシューターの前輪で攻撃するチェイサーマツハを突き飛ばす。未知との戦いだ、こればかりはどうしようもない。

「フィリップ、俺達も行くぞ！」

「ああ！」

いつの間にか隣にいたフィリップ。そう言うと、左側の斜め前からあの刑事が駆け寄ってくる。

「おいアンタら！ここは危険だ、早く避難しろ！」

「いや、俺達は避難出来ないっつーかしちや駄目っつーか。なあ
フィリップ？」

「僕に振るな！まあ良い、行こう！」

「変身！」

俺達は目の前にいる刑事を無視して、仮面ライダーに変身する。

「マジか！」

刑事は俺達の変身を見て驚き、目を見開いて呆然と立ち尽くしている。俺達二人はその刑事を横切り、チェイサーマツハの戦っている戦場へと向かった。

「今度何!? 援護!? 敵対!」

「来たな。」

立て続けに起きる訳の分からないこんな状況の為か、チェイサーマツハは警戒心を剥き出しにし、複数のハーフィンベーターを抑えたままこちらを見る。

「そんなに警戒しないでくれ、俺達は味方で、コイツらを専門的に倒してるライダーだ！」

「コイツらはハーフィンベーターと言う！それは倒しても呼び出しているリーダー格を倒さないと延々と増え続ける！」

「じゃああの黒いの倒さないといけない感じ!」

「そーゆー事！」

「ほう？言うな人間。貴様らの相手はコイツらで充分だ」

ハーティンベーターはそう言い捨てるとハーフィンベーターを更に召喚し、その場から去ろうとする。

「待てインベーター！お前は一体何からその力を吸収した！」

そう、ハーティンベーターが何から何を吸収する事で、あの赤く燃える炎の如し心をもつロイミュード、「ハートロイミュード」と同じ姿になるのか、これが一番の問題だ。そしてそんな俺の問いかけに対し

て返ってきた答えは

「想像力と、記憶力と言うものを知っているか？」

「まさかお前」

「クツクツクツ、じゃあな」

ハートインベイダーは自身の目の前に紫がかった闇色の空間を開き、その中へと消えていった。ハートインベイダーのあの言葉、アイツの言うことが本当なのであれば、あの力は今戦っている白いライダーや、あの刑事の記憶や想像から生まれた事になる。

「クソツ、逃げられたか」

「それより今はコイツらを片付ける方が先だ！一体がああ刑事の方へ向かった！」

「マジかつ、進兄さん一体そっち行った！」

「えっ!?!いつの間に」

どうやら考え事をしていたよいで、チェイサーマツハの呼びかけでやっと現実に戻った感じだった。

「クツソ、固いなコイツ」

刑事はすかさず自身が所持していた拳銃で対抗するが、それもむなしく、ハーフィンベイダーにはほとんど効いていない。しかし刑事は逆に考えたのか、効いているという確信を得て更に発砲を続ける。後先考えず撃ち続けた為か弾切れを起こし、徐々に追いつめられていく。

「これは、不味いな」

「進兄さん！」

「俺が行く！」

俺はとっさにその場から飛び出して走り出す。左腰からアビリティライドキーを取りだし、素早くガンブレードキーに刺し込んで「スピードフォーム」を発動する。

「Ride Abirity! Speed Form!」
「消えろ！」

刑事に迫るハーフィンベイダーをガンブレードキーで一斬りする
と爆発が起こり、そのハーフィンベイダーは消滅し、同時にインベ

ダーとの戦闘も終了した。

「お疲れ。なかなかやるじゃん、アンタら」

「どうも」

「悪い、助かった。協力に感謝する！」

「いいよそんなの、困ったときはお互い様だろ？」

「そうか、そうだよな。アンタ達は仮面ライダーなのか？」

「まあ、応な」

「そうか、スゴいなアンタ達は。折角だし、ここで立ち話もあれだから特状課まで移動しよう。色々話が聞きたい」

刑事はそう言つて、俺達二人は話を聞くといい名目で連行される事になった。でも待てよ？特状課って確か解散したはずじゃ

仮面ライダードライブ

「ようこそ、旧特状課へ」

(あつ、解散したままなのね)

来て一番にそう思ってしまった俺は悪くないはずだ。だって、いきなり「特状課まで来てくれ」なんて言うもんだから特状課が復活したのかと思っても仕方がないはず。周りを見渡すと、俺が劇中で見た特状課そのまままで、よく見るといたる所に埃ほこりがかぶっていて、ワークデスクを指でなぞってみると、茶色がかった埃がギツシリと取れた。

「なんかごめんな、こんな埃っぽい所で」

「いや、いいよ別に。わざわざここを選んだってことは、ここにはそれだけ沢山の思い出があつたって事だろう？」

「ああ、あつたとも。思い出が沢山出来たさ。仕事をサボって、その度にバディに怒られて、またサボって、ベルトさんと出会って、そして、仮面ライダーになった。もつとも、今はただの刑事だけだな！」

「いくらなんでも仕事をサボり過ぎだろう」

「言いたかった事をフリリップに取られた。まあそれは良いとして、俺は刑事にただの刑事となった経緯を聞いた。理由は知っているが、俺が怪しまれないための作戦だ。確認も兼ねて一応聞いておくことにした。」

「なあ、その言い方だと自分も仮面ライダーだった、って言ってるように聞こえるけど。」

すると後ろから白いパーカーの青年が出てきて、ただの刑事となった経緯を説明してくれた。

「元々、進兄さんは仮面ライダードライブっていう仮面ライダーだったんだ。でも、俺達の敵であるロイミュードって奴らを全滅、いや、撲滅させて、進兄さんのさつき言ってたベルトさんが仮面ライダーをこの地下に封印したんだ。市民の平和を守るために戦う正義のヒーロー、今でこそ進兄さんはただの刑事だなんて言ってるけど、俺は今でも進兄さんは仮面ライダーだと思ってる」

劇中で見ていたから分かってはいるが、本人の口から語られると

やはり彼がどれだけ凄い刑事であるかが伺える。そうだ、彼は今でも仮面ライダーだ。市民の安全を第一に考えることの出来る仮面のヒーローだ。でもなぜだろう、今の彼は「心のエンジン」がかかって無いように見えるのは。

「そう言えば自己紹介がまだだったな。俺は泊進ノ介。元、仮面ライダードライブだ。よろしくな」

「詩島剛！同じく元、仮面ライダーマツハだ」

「お前は現役でマツハだろう？」

「違うぜ進兄さん、俺のはマツハであつてマツハじゃない、チェイサーマツハだ！シグナルマツハがベルトさんと一緒に封印されちまつたからな、今はこのシグナルチェイサーを使って変身してる。だから俺はマツハであつてマツハじゃない！」

「知らねー。まあいつもこんな感じだけどよろしくな。お前達は？」

「俺は戸島鍵、仮面ライダーゲートだ。よろしく」

「僕はフィリップ、仮面ライダーサイクロンだ。よろしく」

「鍵とフィリップだな、よろしく」

軽く自己紹介をすませたところで、俺は「ある事」を聞いた。

「なあ、進ノ介がさつき言つてたベルトさんって」

「ああ、そうか。まだベルトさんについて説明してなかったな。来るか？ベルトさんが居るところに」

(ど、ドライブピットに入れるだとおおおお!?)

俺は狂喜した。心の中で。ドライブと言えば俺が好きな仮面ライダーの中でもベスト5に入るシリーズで、そしてそんなドライブの秘密基地であるドライブピットに入れると言うのだ。狂喜しない訳がない。俺はこの喜びを声に出したい気持ちを抑えつつ、直立したまま腹筋運動を続ける。

「鍵、嬉しいのは分かるがとりあえず落ち着きたまえ」

しかしここでフィリップに落ち着けと注意された。

「ここだ。ここが仮面ライダードライブとして活動していた頃の秘密

基地、ドライブピットだ」

「凄っ」

驚きのあまり、俺の口からはその言葉しか出ない。スイッチを入れても電気がつかない辺り、ドライブピットが今は使用されていないというのが見てとれる。上を見るとロボットアームがいくつもあり、ドライブピットの中心部を見ると、鉄板の丸型の床があった。

「この丸い部分あるだろ？これの下にベルトさんと仮面ライダーがいる」

「この下に」

丸型の床の中心部に立ち、その場で左足の膝をついて鉄板を見つめる。

「ベルトさんはな、俺の心のエンジンをかけてくれた恩人なんだ。完全に冷めきって、何事にもやる気の起きない俺の」

「そっか。なあ進ノ介、一つ聞いていいか？」今のお前に心のエンジンはかかっているのか？」

「っ！それは」

俺がそう言うのと進ノ介は遂にうつむき、口をつぐんで沈黙する。

「俺は当時のお前を知っているわけでは無いけど、少なくとも俺には、今のお前は心のエンジンがかかっていないように見える。言いたかったのはそれだけ」

「」

「進兄さん、俺がこんなこと言うのもあれだけど、確かに進兄さんは刑事として、仮面ライダーとして成長したのかもしれない。でも、心のエンジンがかかっていないっていうのは鍵と同意見かもしれない」

「インバイダーの反応だ、二人とも行こう。泊進ノ介、君は来るのかい？」

「俺は、少し考え事したい」

「そうかい。じゃあ行こうか二人とも」

「ああ」

「分かった」

俺達はドライブピットを出て特状課を後にし、フィリップは青白い

空間に消え、俺と剛はそれぞれのバイクに跨がってインベイダーが出現した場所へと向かった。

「あのライダー共、また来るな。奴らは分かるが、あの場にいた刑事の男、アイツはなんだ？記憶を辿ってもそれらしき男はいや、一人居たな。ロイミュードを全滅させた男か、だとすれば中々手強いな。しかし、記憶が正しければあの男はもう変身できないはずだ。注視する必要はないか。この世界の侵略が終わるのも時間の問題か。来たな、仮面ライダー共め」

俺達は既にベルトを巻いた状態で並走する。それぞれ素早くゲートライドキーとシグナルチェイサーを取り出してベルトに装着し、バイクに跨がったまま変身した。

「変身！」

「World gate keeper! Kamen Rider Gate! f o o o o !」

「シグナルバイク！ライダー！チェイサー！」

俺達はそれぞれ仮面ライダーゲートと仮面ライダーチェイサーマツハに変身し、そのままハートインベイダーに突進攻撃をかますが、それはハートインベイダーになんとかかわされてしまう。バイクのブレーキをかけると、凄い勢いのスピードが出ていたためか、後ろにはわだちがくつきりと残っている。

「くそっ！」

「外したか。」

すると変身したフィリップとアラタが現れた。

「なんか大変な事になってますね、折角の街並みが台無しだ。僕も手伝います、鍵さん！」

「アインがこの世界の異常を察知し、駆けつけてくれたそうだ」「アラタお前最高だよ！超助かる！」

「また増えたな。まあ、戦力が増えてくれるなら助かるけどね！」

「一人増えただけだ、何も変わらない。行け、しもべ共！」

ハートインベイダーは自分の背後から大量のハーフインベイダー

を召喚し、俺達を襲わせる。

「いやあ、多いな」

「この量がただ多いなですまされる量なのか。スゲエな鍵って」

「ん？ 実は前なんかこれより多い時なんてあったんだぞ？」

「嘆いていても仕方ありません、とりあえず手分けして倒していきましよう」

「よし、んじや俺とアラタでこっち、フィリップと剛はあっち頼む」
「分かった！ 行こうフィリップ！」

「ああ」

俺は今、誰も居ないドライブピットの床にどっかりと腰を落とし、後ろに両手をつけて、両足をだらんと伸ばした状態で座っている。誰も居ないドライブピットには寂しさだけが残り、発した一声一声がこの広い部屋の壁に当たって自分の耳へと帰ってくる。

「なあベルトさん、聞こえるか？ 俺、遂に出会って間もない奴に心のエンジンが止まつてるなんて言われちゃったよ。仮面ライダーとして成長できても、根はそのままだな。ベルトさん、俺不安なんだよ、今の自分がちゃんと刑事をやれてるかどうか、父親をやれてるかどうかがさ。ベルトさん、今の俺はベルトさんにはどう見えてる？」

俺がそんな風に今は眠っているベルトさんに問いかけると、思いもよらない答えが返ってきた。声は自分のものではない、別人の声だ。ついこの間まで日常的に聞いていた声だ。

「私には、君は心のエンジンがかかっていないのではなく、一時停止している様に見えるな。いち刑事、いち父親としての当然の悩みだろう。しかし、もしそれが一時停止の原因なのだとしたら、君は少々停止しすぎていたようだ。立ちたまえ進ノ介。そろそろ、進む時だ！」
そう、ベルトさんだ。

「ベルトさん、ああ！」

答えて欲しかった人に答えてもらえて俺は心の底から嬉しくなり、かなりの勢いをつけて立ち上がった。

「仲間が待っているんだろう？ 速くトライドロンに乗って現場へ急行

するぞー！」

「ああー！」

俺はシフトブレスを左腕に巻き付け、ベルトさんを腰に巻き付けて
トライドロンの運転席に乗ってエンジンをかけた。

「行くぜベルトさん、久しぶりにひとつ走りつき合えよー！」

「ああー！」

アクセルペダルを踏み、俺達はドライブピットを後にした。

「クッククックツツ……どうした仮面ライダー共？さっきまでの威勢はどう
した？」

「クツツソツツ……」

単刀直入に言おう。俺達四人は今押されている。フィリッツプとアラタが「ハーフィンライダー達を抑えとくからハートインライダーを何とかしてくれ」との事で、俺と剛でハートインライダーの迎撃に当たっているが、ハートインライダーの強さと言ったらはかり知れず、こんな状況となってしまうた。ハーフィンライダーも徐々に増えてきている。これはまずい。

「鍵！っく……」

「剛、無理するなー！」

「無理でもしないとコイツ倒せないでしょー！」

「二人ともしつかりして下さい！うあっ!？」

「よそ見をするな怪条アラタ！死んでしまうぞー！」

そう、まさに絶対絶命の大ピンチって奴だ。そんな時だった。仲間のピンチに駆けつけた主役の如く、タイヤが六つ着いた赤い車が現れ、そしてハートインライダーに突進攻撃をかましたのは。ハートインライダーも流石にこれは予測が出来なかつたらしく、思い切り喰らっている。更にその赤い車の後に続く様に、突然現れた小さい道路の上を走るミニカー達が現れ、ハートインライダーを攻撃する。

「グウツツ……、一体なんなんだ……っ！その赤いボディの車、俺の記憶が確かなら……なぜ、なぜ……」

しばらく言葉をためてやがて言葉を発し、それと同時に人影が現れ

る。

「なぜトライドロンが!?!そしてそのブレスレットとベルト、ドライブが復活したと言うのか!?!」

そう、進ノ介とその腰に巻かれたベルト、ベルトさんだ。遂にあの最強コンビが復活したのだ。

「そーゆー事!行くぜベルトさん!」

「OK!Start your engine!」

進ノ介はドライブドライバーのエンジンをかけ、小さい道路の上を走って自分の元へやって来たミニカー、「シフトスピード」をキャッチしてレバー型に変形させ、それをシフトブレスにセットする。車が加速するような、ブーンという音がなり、そしてセットされたシフトスピードのレバーを起こす。

「変身!」

「Drive!Type Speed!」

やがて進ノ介は様々なアーマーを身にまとい、「仮面ライダードライブ」へと変身した。

「進ノ介!」

「進兄さん!」

「よう、待たせたな。久しぶりのドライブだ、お前達、ひとつ走りつき合えよ!」

「もちろんだ!」

「進兄さんとならどこまでも!」

「さて、そろそろ本気を出そうか。行くよ怪条アラタ」

「はい!」

進ノ介が来たことで俺達の中で士気が上がる。俺はWライドキーでタイプWへ、ファイリッパはライディングブレスを使いグリスライドキーでタイプグリスへ、アラタはギャレンライドキーでタイプギャレンへ変身した。剛もドライバーのシグナルチェイサーを引き抜き、「シフトライドクロッサー」に入れ換える。

「シグナルバイク!シフトカー!」

「レッツ、変身!」

「ライダー！マツハ！チェイサー！」

チェイサーマツハの全身が青くなり、目のバイザーは繋がっていた形状から分離し、オレンジ色に変化し、体に入っていた赤い二本の縦線の色は紫と赤に変化し、「仮面ライダーマツハチェイサー」となった。
！

「追跡！撲滅！いずれもマツハ！仮面ライダー、マツハチェイサー！！」
「チイツ。行け我がしもべ達よ！仮面ライダー共を殲滅しろ！」

俺達はこちらに向かってくるハーフィンベイダーを迎撃する。俺は右腰からゲートガイアメモリを取りだし、それを起動する。

「ゲート！」

起動と共に空中に召喚されたゲートガイアソードを左手に持つ。右手にガンブレードキーを持ち、もはやお馴染みとなった二刀流の戦闘スタイルに切り換える。ガンブレードキーにサイクロンの力を、ゲートガイアソードにジョーカーの力をまもってハーフィンベイダー達を一掃する。ある程度数が減ったところでゲートガイアソードの持ち手部分に着いたホルダー部分にゲートガイアメモリを挿入し、マキシマムドライブを発動する。

「ゲート！マキシマムドライブ！」

二本の剣を交差させ、しばらく溜めの動作を行ってから二本同時にハーフィンベイダー達を一切りする。俺の視界に映るハーフィンベイダーは全滅した。フィリップとアラタもそれぞれ必殺技を発動する。

「Grease！Maximum Finish！」

「Ine！Garren！Burning World Finish！
sh！」

フィリップが全てのハーフィンベイダーを黒い嵐で拘束し、アラタがそれら全てをギャレンラウザーで撃ち抜く。フィリップが嵐を解除し、ハーフィンベイダー達が地面に落下したところで大爆発が起こり、ハーフィンベイダー達は全滅する。そして剛。

「ヒツサツ！フルスロットル！」

ドライブバーのホルダー部分の上に着いたボタンを力強く何度も押

し、ハーフィンベイダーの群れのほぼ真上まで飛翔し、ライダーキックの体勢をとる。右足から白と紫の二色のエネルギーを大放出し、そのままハーフィンベイダー達に向かって滑空していく。

「マツハー・チェイサー！」

ハーフィンベイダー達はマツハチェイサーの右足から発せられるエネルギーに潰されるようにして倒され、そして消滅する。そして今回の主役である進ノ介。

「HISSATSU! Full Throttle! Speed!」

進ノ介が相手にしていたインベイダー、ハーフィンベイダーの周りをトライドロンが目に見えない程のスピードで何周も走る。もはやトライドロンはただの赤い帯となり、進ノ介はトライドロンフレームがけてライダーキックをする。やがてそのライダーキックは進化し、進ノ介は当たっては弾かれ、当たっては弾かれを繰り返すピンボール玉の如く何度もハートインベイダーに喰らわせる。そう、「スピードロップ」だ。そして最後の一撃、ハートインベイダーの周りを走り回っていたトライドロン赤い帯は消え、正真正銘のライダーキックだ。しかしハートインベイダーもやられまいと、腕をクロスさせて防御の体勢をとる。進ノ介のライダーキックはクロスした腕で止められるが、シフトブレスのレバーを三回起こしてシフトアップする。

「Speed! Speed! Speed!」

しかし流石は記憶と想像からハートロイミュードの力をコピーしただけはあるということか、それでも持ちこたえ、ハートインベイダーは進ノ介のライダーキックを食い止める。

「この程度で。」

「なら更にシフトアップだ！」

「進ノ介、これ以上この加速状態でシフトアップするのは危険だ！」

「大丈夫だよベルトさん！それに、こいつのこの姿を見ると、大切な友人を馬鹿にされているみたいで腹がたつんだ！」

「分かった、君にその覚悟があるなら私もそれに付き合おう！更に

シフトアップだ！」

何回もレバーを起こしてシフトアップし、徐々にハートインベイダーのガードを崩していき、完全に崩してハートインベイダーを破った。

「だあああああああああつ!!!」

「ぐおおあああああつ!!!」

ハートインベイダーは爆散し、その世界を終わらせた。過度なシフトアップをしたためか、進ノ介は変身が強制解除され、その場で地面に膝をついた。

「進兄さん！」

「おい大丈夫か進ノ介！」

「いや、問題ない。しかし、久しぶりのドライブの乗り心地、やっぱり最高だ。」

「そうか。Nice Driveだ進ノ介！そうだ君、確か鍵と言う名前だったな？」

「そうですね、なんですか？」

「君に渡したい物がある。受け取りたまえ」

「ほい、これ」

スーツのズボンの右ポケットに突っ込んだ進ノ介の手の中から出てきたもの、それはライドキーだった。

「お前達の呼び方にならってよぶならドライブライドキーってところだな」

「あ、それ！俺も似たようなものあるよ！」

剛もポケットに手をつ突っ込み、あるものを取り出した。

「これもライドキーって奴っしょ？マツハライドキーとチェイサーライドキーだ！」

俺達はそれぞれライドキーを受け取り、それを手に取る。

「ドライブライドキー、か」

「じゃあな進ノ介、剛」

「ああ、気をつけろよ」

「頑張れよパパさん刑事ライダー！」

「よせつて」

「ではまたどこかの世界で」

「おう！じゃあまたな！」

アラタとフィリップは異空間を開いてその中へ入り、そしてその中へ消えた。俺もマシンゲーターに跨がり、ゲートライドキーでエンジンをかけ、目の前に扉を開いてその中へ消えた。

「仮面ライダーゲートか。また一人、俺の背中を後押ししてくれた恩人が増えちまったな。」

「なら、その分仕事で答えなければならぬな？」

「そうだけ進兄さん！」

「ああ！今の俺は、脳細胞がトツプギアなんだ！」

決着！仮面ライダーゲート VS アナザーマリア

「ぐうううううううっ!!!」

「ガアアアアアアアッ!!!」

俺とアナザーマリアは今、それぞれ向かい合っている。それぞれの剣を互いに交え、打ち合い、そして殺し合っている。剣と剣をぶつけ合う度に火花が散る。それぞれの「怒り」を乗せて。

「殺ス!!!」

「やってみなさい!!!」

この時の事は、目の前の事以外あまり覚えていないが、激しく怒り狂っていたことを覚えている。だから本当の事を言うところ今こうして話している俺は、後からフィリップに話を聞いた俺なのだ。

「もうアイツ一人でも良いんじゃないかな？今のアイツなら何でもできる気がするんだよ、俺」

俺の暴れっぷりにシュンガはそんな事を言っていたらしい。

「まあ、そんな事を言ってたつてしようがないわよ。彼は目の前の戦いに全力なだけ。なら、私達も全力を出さない」と！

「そうそう！早くこの戦いを終わらせよう、美味しいスイーツを用意するからさー！」

「うん、それがいい。なら早いところ終わらせなきゃね」

マカロン、ホイップ、シヨコラの順にそれぞれシュンガに語り、シュンガがそれに答える。

「そうだな、こんな戦いさつさと終わらせよう。これ以上あの状態の鍵が暴れたら、また異世界線路の破壊の危機になりかねないからな」
そう、マヴェリックゲートが発動しているのだ。俺自身それに気づいてはいなかったが、周りからは、俺が赤く発光し、高熱の蒸気を身体中から出しているように見えたらしい。強いて言えば、俺が自覚出来たことは妙に体が熱いということくらいだろう。

「鍵！暴れるのも良いが、ほどほどにしてくれよー！」

しかし、マヴェリックゲートが発動している俺にはもはやそんな言葉は関係ない。そもそも聞こえてすらいない。ただ目の前の敵を倒

ゲートガイアソードも合わせて20個だ。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!?」

「鍵!!どけインベイダー共、邪魔だ!!」

俺は極度の頭痛で頭を抱え込み、地面に膝をついて転がる。それと同時に操っていた武器も地面に落下し、光の粒子となり、四散して消える。途中シユンガの声が聞こえ、こちらに向かってくる様子がうかがえたが、数多のハーフィンベイダーに道をさえぎられているのが分かる。あまりの痛さに動くことすら出来ず、絶対絶命のピンチって奴だ。

「あらあら、もうおしまい?無様ね、仮面ライダーゲート!」

「うつつっ、せえっ」

「フフツ♪終わりに!!」

「まだだ、まだ終わらせない!」

すると突然アナザーマリアの目の前に鉄製の大きな金庫の扉が現れ、その中から鈴夢とアラタが出てきて、それぞれの武器である「シルバーソード」と「ガンブレードキー ツヴァイ」でアナザーマリアを切りつける。

「鈴夢!アラタ!まったく、お前ら遅せえよ!」

「ヒーローが遅れて登場するのは基本でしょ?」

「アイン、交代だ。久しぶりに暴れていいよ!」

「承知した!」

アラタはアインと体の主導権を交代し、本当の意味での「仮面ライダーアイン」となる。

「予告しよう。本日、貴女様の運命を頂戴致します」

「えっ、アラタ?どうしたの急に?」

「Mr. アラタでは無い、私はアインだ」

「えっ、マジ!?!」

「本来の仮面ライダーアインはこの形が正解なんだよ。僕がアインに無理を言って変身しても主導権を握れるようにしてもらったんだ」

「なんか凄いな」

「当然です、私なのですから!」

「良いから行け！壊すよ！」

「それは嬉しくありませんね！」

久しぶりに見た、アインが体の主導権を握った状態の仮面ライダーアインだ。アインの状態の変身は過去に一度見ただけで、それ以降はずっとアラタとして戦っていたためアインの戦闘は久しぶりに見る。その場から走り出し、2人はアナザーマリアとの戦闘に入った。

「まさか、あの短時間でアレを倒したと言うの!？」

「当然だ！アイツは俺と同じ、ならパワーも弱点も俺と同じ！俺の事は俺が一番よく知ってるんだよ！」

「そういう事！」

順に鈴夢とトイがそう言い、アインと同時にアナザーマリアを攻撃する。その時の俺は痛さのあまり遂には気絶までしてしまい、変身が強制解除され、悪夢にうなされていた。

『梓！』

『戸島くん。ごめんね。』

その夢の中では俺はゲートドライバーを腰に巻いただけで変身しておらずただひたすらに走っていた。目の前にいる夏川、いや、梓の背中を追いかける。手を伸ばし、今にも消えてしまいそうな梓の手を掴もうとする。あと少し、あと少し、手と手の距離が1センチや2センチのところまで青白い光が梓の全身をおおい、四散して消滅してしまう。消滅する直前、梓はその瞳から涙を流していた。俺は地面に両手両膝をつき、絶望し、ただ泣き叫ぶしか出来なかった。その時、シユンガと鈴夢とアラタの声が聞こえてきた。

「本当にそれでいいのか！」

「梓さんはあなたの愛する人なんですよ！」

「鍵さん、あなたの梓さんに対する思いはその程度だったんですか！」

『違う。』

「ならお前の力も所詮はその程度って事だ！」

『違う！』

「そんな力じゃ世界どころか、愛する人さえ救えませんよ！」

『違うっ!!俺は世界なんてもうどうでもいいんだよ!!俺の望みはただ

一つ、梓を救いたいっ!!』

俺の思いに呼応してか、紅く燃える情熱をそのまま表したようなライドキーが現れた。右手で目の前のライドキーを掴み取ると俺の意識はやがて現実へと返り、そして立ち上がる。

「やっとお目覚めか!」

「まったく、鍵さんが王子様なのにその王子様が眠ってどうするんですか。」

「まあまあ。でも、散々あおった甲斐はあったよね!」

なるほど、戦いながらも直接俺をあおってたのか。どうりで妙に心に響くはずだ。何気なく右手の拳を開いて見てみると、夢の中で見たあの「紅いライドキー」があった。俺はドライバのゲートライドキーを引き抜き、ゲートライドキーがあった鍵穴に紅いライドキーを刺した。

「Burrurrurrurrst!!」

いつもと違う音声が鳴り出す。俺はそのライドキーを回し、更なる変身を遂げる。

「変身っ!!」

「Berserker of passion!!! Kamen Rider
er Gater!!! Marrrrrrrrrrvellick!!!」

変身音声が鳴った後、強制的にマヴェリックゲートが発動し、全身から出ていた蒸気は赤く燃える炎に変わり、その炎が俺の体にまとわる。アーマーは紺色から紅く変色し、所々に黒い炎のような模様が現れる。

「あの姿は。」

「凄い!」

「アイツ、遂に自分を制御しやがった!」

フリリップ、カスタード、シユンガの順に声が聞こえてくる。見た目自体はそんなに変わらないが、アーマーが紅く変わったのと、炎の模様が現れ、イメージが一変する。

「梓を返してもらおうぞ。」

「仮面ライダー、ゲートオツ!!」

立場が逆転した。俺は静かなる怒りを、アナザーマリアは怒りを全面に出しながら、それぞれの剣をぶつけ合う。決着の時だ。

「よし、俺達も気合い入れ直して行くぞっ！」

シユンガの言葉に反応し、疲弊しきっていたプリキユア達も立ち上がり、それぞれの敵に向かっていく。フィリップはタイプグリスに変身し、ハーフィンベイダーを出現させている機械を探す。

「見つけた」

フィリップは黒い嵐を発生させ、それを見つけた機械のある場所まで飛ばす。嵐はその機械に命中し、見事に破壊した。これによるハーフィンベイダーの増殖は止まり、減るところが増え続けるという現象がなくなった。反撃開始だ。

「よっしや燃えてきたー！」

「ここが踏ん張りどころよ！」

ジェラート、パルフエが発破をかけ、他のメンバーがそれに応じておー！と掛け声を出す。それにつられるようにシユンガも軽くジャンプし、ゴキゴキと音を鳴らしながら首を回す。鈴夢とアラタも背中合わせになり、それぞれの武器を構える。

「繁殖が止まったとはいえ、敵はまだかなりの数が残ってる。くれぐれも気をつけてくれたまえ」

「分かったっ！」

「行くよアラタ！」

「うん！」

それぞれがそれぞれの敵のいる方向を向き、敵の方へ走っていく。

「ゼアアッ！」

「グッ!? なんなのよ、なんなのよアンタ達仮面ライダーはあっ!!!」

「勘違いするな、俺は仮面ライダーなんて大層なものじゃない。愛する者の為に戦うただの仮面の戦士だ！」

「それを人間は『仮面ライダー』というのよっ!!!」

完全に理性を失っている。もはや目の前の標的を狩るだけのただの獣、まるでさつきまでの俺だ。アナザーマリアの攻撃はただただ乱

雑で、目視さえ出来れば攻撃をかわす事など容易い。それでもアナザーマリアは攻撃をやめず、延々と続ける。やがてアナザーマリアは大きくバランスを崩し、地面に転倒しそうになり、ギリギリのところまで踏ん張る。俺は隙を見逃さず、すかさず「あの技」を使う。

「レジェンドライダーの武器達よ、俺に従えっ!!!」

「待つんだ鍵、その技はさっき使ったばかりだろう!」

フィリップの制止する声が聞こえてくるが俺はその言葉を跳ね返す。

「問題ない!この技にタイムリミットがあつたのは俺が自分の中に『仮面ライダー』という制限をかけていたからだ!そして今の俺は仮面ライダーじゃない、つまり限界は、無いっ!!!」

どこからともなく光の粒子が現れ、いくつかの集合体となり、その集合体はやがて武器となる。

「行けっ!」

俺の言葉と共に武器達は飛んでいき、アナザーマリアへ攻撃を開始する。

「チイツ!なんなのよコイツら!」

(さつきは悪かった戦兎、俺はこれを私怨の為に使おうとしていた。でもやつぱり平和の為には使えない、今の俺は「愛」の為に戦っているからだ!)

俺は右腰からゲートガイアメモリを取り出し、そのスイッチを押した。

「ゲート!」

目の前にゲートガイアソードが出現し、俺はそれを左手に握る。遂にいつもの二刀流スタイルが完成した。ちなみに現時点での技の使用時間は約5分。

「お前達下がれ!」

俺の言葉と共に武器達の動きは止まり、元の定位置に戻って光の粒子となって消える。

「はあっ!」

「まだあッ!」

の問いに答える。

「やっぱり戸島くん。信じてたよ、来てくれるって。流石『仮面ライダー』だね」

梓から発せられた「仮面ライダー」という言葉は俺には重たすぎた。遂に俺の方が耐えられなくなり、涙をこぼしてしまった。

「俺は、仮面ライダーじゃない、そんな大層なものじゃないんだよ。本当に仮面ライダーなら、こんな世界を巻き込んだ戦い方なんてしない」

「そっか。でもやっぱり戸島くん、ううん、『鍵くん』は仮面ライダーだよ。全力で私を守ってくれる、私の仮面ライダー」

「鍵くん」と呼ばれたのを境に、俺は遂に我慢出来なくなり、涙を目からボロボロと流す。

「やつと名前で呼んでくれたな」

「うん。ごめんね、鍵くん。愛してるよ」

「俺も、愛してる」

俺達は顔を近づけ、そして。と思いきや。

「ウォツホンッ!!」

「!?!」

「ビュービュー！おめでとう！」

「良かったですね鍵さん！両思いだつてことが分かって！」

「えっ!?!なにになに!?!」

「コラー！目隠し外せー！」

「見ーえーなーいー！」

「悪いけど、あなた達にはまだ見せられないわ」

「同感。君達にはまだ早いと思うんだよ」

「うんうん！」

「」

上から順に、シユンガがわざとらしく咳払いをし、俺達がそれに驚き、鈴夢があたり、アラタが祝う。プリキュア達はと言うと、年少者であるホイップ、ジェラート、カスタードは、年長者であるマカロン、シヨコラ、パルフェに目隠しをされていた。ホイップは空気を讀ん

暴走気味のシユンガの言葉を無視し、俺はゲートライドキーでマシンゲーターにエンジンをかけ、目の前に扉を開き、その中へ飛び込む。後ろに梓を乗せて。やがて扉は閉じ、俺が出現させた扉は消滅する。「ねえ鍵くん、どこに向かっているの？」

「決まってるだろ、俺達の帰る場所だよ」

「そっか。安全運転でよろしくね、王子様」

「了解ですお姫様」

そんな言葉を交わしながら、俺達はプリキュア達の世界を後にした。

しかし俺達の戦いはまだ終わっていないかった。アナザーマリアを倒したあの時点で俺は気がつくべきだったんだ。アイツがそんな簡単にくたばるような奴じゃないという事に。

「ぐっ。グウツ!? 仮面ライダーゲート、あなただけは絶対に殺す。この私が、殺してあげる!!!」

仮面ライダーゲーム

「はい鍵くん、あーん♪」

「あ、あーん」

「おうおう、若いのは熱いねえ」

「そ、そこうるさいよ！俺だって恥ずかしいわ！」

オヤジさんの目の前でイチヤイチャを見せつけるとか、なんの罰ゲームだろうか。俺は今梓の手料理を食べている、梓による「あーん」で。オヤジさんが無駄な気を利かせて店を貸し切り状態にし、更には梓に店の台所まで貸している。これは逃げられない。ここで逃げたら男がすたるってものだ。完成した料理を梓が持ってきて、その梓の「あーん」で食事している。

「どう？おいしい？」

俺は口に含んだそれをしばらく噛み続け、そして飲み込む。

「うん、美味しい！」

「本当？良かった！」

幸せだ。今の俺の心情を形容できる言葉があるとすれば、この言葉が一番当てはまるだろう。今この場にシユンガが居れば嫉妬のあまり泣き叫び、発狂するのは間違いない。しかしそんな幸せが長く続くはずもなく、その時間は突然終わりを告げられた。

「お楽しみのところ悪いね。夏川梓、鍵を借りていくよ」

「もしかしてまたインベイダーが現れたの？」

「ああ」

「そっか」

あからさまに落ち込んでいる。俺はそんな梓の頭に手を置き、梓の頭を撫でる。

「大丈夫だって、すぐ戻る。俺が戻った時迎えてくれる奴が居なきや俺も寂しいからさ、ここで待っていてくれ」

「分かった！言ったらっしやい鍵くん！」

俺がそう言うとき梓はすぐにいつもの元気を取り戻し、俺に「行ってらっしやい」と言ってくれた。俺はその言葉に対して

し、俺を襲わせる。

「面倒だから一気に決めさせてもらうぞ」

右腰からウエポンライドキーを取り出し、ガンブレードキーに刺し、それを回す。

「Ride Weapon! Rider Weapons!」

「レジェンドライダーの武器達よ、俺に従えっ!」

俺はレジェンドライダーの武器を召喚し、それらにハーフィンベイダーの相手をさせる。元々ハーフィンベイダーは中途半端な存在なのでそれほど強くない。なので問題を起こさずに倒すことさえできれば苦になるような相手ではない。武器達はなんの問題もなくハーフィンベイダーを殲滅させた。

「そ、そんな。我がしもべ達がこんな一瞬で。」

「悪いな。でももう終わりだ、決めさせてもらうぞ」

俺はマヴェリックライドキーをガンブレードキーに差し替え、必殺技を発動した。

「Gate!!! Marvellick World Break!!!」

ガンブレードキーに炎を出現させ、その炎の刀身を巨大化させる。俺はその刀身でソルティインベイダーを一切りし、世界を焼滅させた。

「ぐおおああああああああああああ!!?」

「フウ、まあまああってところか。まあボチボチ使いこなせるようにしていかないと。おし、帰るか」

(しかし、なんでライダーの居ない世界にバグスターが? いや、居るのか? って事はさっきの世界はエグゼイドの世界? まあいいや、後にしよう)

そんな事を考えながら俺はマシンゲーターに跨り、目の前に扉を開いてバイクごとその中へ飛び込んで行った。自身の後をつける存在に気づかぬまま。

「ねえクロト、本当につけるの?」

「大丈夫なの? データ収集をするって張り切るのは良いけど、彼行っちゃったわよ?」

「問題ない。こんな事もあるうかと爆走バイクガシヤットを予備も含めて三本持ってきた。」

「本気!? だって彼、多分シユンガが言ってた『インベイダー専門のライダー』ってやつじゃない!?」

「Bakusou Bike!」

「翼、多分もう何を言っても無駄よ。クロトもうガシヤットを起動してしまってるもの。」

「ああもう分かった! 分かったわよ私も行く!」

「流石にクロトを一人で行かせるのは心配すぎるわね。」

「Bakusou Bike!」

知るよしもなかった、異世界の住人がやってくるなんて。今の今までそんな事は一度もなかったから。

「ただ今」

「えっ!? もう戻ってきたの!」

「言つたろ? すぐ戻るって」

「そうだね。って、なんかドアの向こうから声が聞こえない?」

何を言い出すか、と思いつながら耳をすましてその声というのを聞いてみる。本当だ聞こえる、めっちゃ聞こえるよ、こここそと。

(おい、押すな! 変身者のデータが取れないだろう!)

変身者、俺か。

(押しでないわよ! 押ししてるのはアンタでしょクロト!)

えっ、クロト。

(ちよつと二人とも静かにしなさい! 声でバレたらどうするの?)

もうバレてるけど。なんて事を考えながら、俺は静かにブラツクコーヒーをすすする。うん、落ち着く。やはり戦闘の後にはコーヒーに限る。そんな事を思っているとキーツと音をたてながら店のドアが徐々に開き、店のドアの前で地面に膝をついて聞き耳をたてていた三人(正しくは聞き耳をたてていたのは二人)の姿が現れる。

「あつってうわあつ!」

「はあ」

店のドアの前で聞き耳をたてていた男女二人は、ドシーンという効果音をもつとも似合いそうな程の勢いで地面に倒れ、そんな二人の後ろに立っていた（おそらく中では最年長と思われる）女性は、二人を見て呆れてため息をついていた。

「いらっしやいませ。ご注文は俺ですか？」

「とつくにバレてたみたいね。」

「で、いつから俺の事をつけてたんだ？」

俺は今、椅子に座って腕と足を組み、店の床に正座する男女三人（主にこの『クロト』とか呼ばれていた男）の方を向いている。

「君がインベイダーとの戦闘を終了し、バイクに跨って扉の中へ消えていった辺りからさ」

「その君ってのやめろ！なんか上から目線だし知ってる奴とかぶってなんか腹が立つっ！」

「わ、悪い」

「怒られてやーんの」

「うるさい」

「それで、どうやってつけてきた？俺バイクに乗って移動してたからかなりスピードを出さないと追いつけなかったはずだぞ？」

「これだよ」

クロトという少年はゲームのカセットのような物をポケットから取り出し、それを手に取って俺に見せつけてくる。

（ライダーガシャット!?!）

驚きのあまり俺は心の声を実際に出してしまいそうになったが、それをなんとか抑え込んだ。そしてそれを驚く暇もなく、少年は説明を始めた。

「これはライダーガシャット、俺が開発したアイテムだ」

俺の耳がおかしくなっていなければ、この少年は確かに「俺が開発したアイテム」と言った。そして少年の顔に俺は見覚えがある。シユンガとの出会いをきっかけに、俺は「ライトノベル」というものを読むようになった。もしそのライトノベルとやらの世界があるのなら、そ

の作品の世界観を知る必要があると思ったからだ。そんな幾つかあるライトノベルの中から読んだ一つの作品、「インフィニット・ストラスト」だ。クロトという少年の顔が、インフィニット・ストラストの主人公、「織斑一夏」に酷似している、というか超ご本人だったのだ。(織斑一夏、だよな)。彼は原作では姉に助けられてるはずだが。名前を変えてるということは、世間では彼が死んだか行方不明って扱いになっているという事か。そして、ライダーガシャットの起動。ライダーガシャットを起動するには、適合手術を受ける必要がある。そしてその適合手術という概念を作り出したのは元を辿れば檀黎斗だ。もし今俺の目の前にいる彼が彼の世界の檀黎斗だとしたら彼自身はもうゲーム病にかかっているということになるな。更に言えば後ろの彼女らだ。彼の言い分からすると、この二人もガシャットを使える、つまりゲーム病にかかっている事になる。って言うかこの二人別作品だよな、シンフォギアだよな。

俺は色々考え、彼の存在する世界が様々な世界の要素が入り混じった世界だという結論に至った。

「さしずめイフワールドってところか。」

「イフワールド?」

「いや、こつちの話だ。それより、さつき俺が戦っていた敵がインベイダーだって言っていたな?なぜ知ってる?」

「前に来たからだよ」

「前に来た?」

「ああ。本当ならアンタが来るはずだったんだろうが、インベイダーとの戦い方を知ってるやつが世界を超えてやって来てな」

(俺がインベイダーとの戦い方を教えた世界を超えるライダーなんて一人しか居ない。)

「なあ、お前らもしかして時野シユンガって奴知ってるか?」

「やっぱりこの人だ!ねえクロト、インベイダー専門のライダーって絶対この人だよ!」

「そんな事はもう分かり切っている!」

この反応を見るに、どうやら本当にシユンガと一度会っているらし

い。そして前にシユンガに聞いたことがある、アナザーライズがバグスターを取り込んで自分たちの駒にしていたという事を。

「なるほど、こう繋がっていたわけか。かなりややこしい事態になったな。まあ良い、とりあえずお前達をお前達の世界まで送る。『扉の中の世界』はかなり広いから、はぐれないようにバイクについてこいよ。」

「データは。」

「知らん！送ってやるだけありがたく思え！俺は今彼女さんとの時間を邪魔されて激おこ！プンプン丸なんだよ！」

「激おこプンプン丸。」

俺の言葉が可笑しかったのか、少年の隣に座る少女が腹筋を震わせながら下を向く。

「そこ！笑うな！」

「ゴメンなさいっ。ブフツｗｗｗｗ」

ついには吹いてしまったご様子。

「まったく。じゃあ行くぞ、ついてこい」

俺達は店の外に出て、それぞれのバイクに跨ってエンジンをかける。俺は目の前に扉を開き、三人を連れてその中へ飛び込む。俺は無事に三人を送り届け、今度こそ役目を終える。はずだった。一度倒したはずの敵が復活するなど、誰が想像出来ようか？いや、しようと思えば出来た考えだ。今まで一度も復活した敵がいなかったため、その考えに至らなかったのだ。

「グガアアアアアアアアツ!!」

「おいおい、アイツは、ソルティインベイダーは！俺が倒したはずだ！なぜ復活している！」

「一度倒してるとしても、それは最早過去の事だ。なら倒すしかないだろ！」

「ここまで来たんだ、お前らにも手伝ってもらおうぞ」

「元からそのつもりよ。この世界は、私達の世界。何とも知れない奴らに世界をあげ渡す気は無いわ！」

[N e f s u t a n F i n e]

中では最年長であろう女性は真っ先にベルトを腰に巻き、自身の持つライダーガシャットを起動する。

「そうだよ！この世界には、クロトとの思い出がたくさんあるんだから！」

「Amehabakiri Tsubasa！」

続いて青髪の少女。

「そういう事だ。アンタが心配するような事は、何も無い！」

「Mighty Action X！」

「そうか。なら問題ないな！」

俺はゲートドライバーを腰に巻き、ゲートライドキーをズボンのポケットから取り出してそれをドライバーにセットした。

「変身！」

「終わりを示せ呪詛！刻めバラル！完全聖遺物で敵を薙ぎ払え！」

「剣の刃 防人の力 Amehabakiri Tsubasa a！」

「マイティジャンプ！マイティキック！マイティアクション！X！」

「World gate keeper！KamenRider Gate！foooo！」

「殲滅開始！」

「コンティニューしてでもクリアする！」

俺達はその場から散らばり、復活したソルティンベイダーが大量に召喚したハーファイレベイダー達の迎撃を開始した。今回は数が多く、そのためかなり苦戦している。

「チツ、キリがないな。マヴェリックゲートに変身して一気に片付けるか！」

「マヴェリックゲート？一体何なのそれは？」

金色の鎧をまとい、ベルトを腰に巻いた女性が俺にたずねてくる。こんな人居たっけ？てか色々見えてるから隠して下さいお願いします。

「それに変身する時、俺のベルトがマヴェリックって叫ぶから、そっか

ら取ってマヴェリックゲート。もつとも、これに変身する時の俺は仮面ライダーじゃないけどね！」

素早く右腰からマヴェリックライドキーを取り出し、ゲートライドキーと差し換える。

「Burrurrurrurrst!!!」

「チェンジ！」

「Berserker of passion!!! Kamen Rider
er Gater!!! Marrrrrrrrrvelllick!!!」

「殲滅再開！」

ガンブレードキーを素早く取り出し、それに炎を乗せてハーフィンベイダー達を殲滅していく。ある程度数が減ったところでウエポンライドキーを取り出し、ガンブレードキーに刺してそれをひねる。

「Ride Weapon! Rider Weapons!」

頭上に数多の武器達が光の集合体となって現れ、それぞれ形を形成していく。

「それは一体何なの？」

「まあ、必殺技つてところだ。レジェンドライダーの武器達よ、俺に従えっ！」

武器達はそれぞれ違う方向を向き、周りの敵を殲滅していく。

「凄い……」

「これがあのライダーの力……」

「いつまでもカッコつけさせる訳にはいかないな……。俺達も行くぞ！」

ゲームキャラクターのような黒いライダーは専用と思われる紫色のゲームパッドのような武器と、白いボディに要所要所でピンクと緑が目立つハンマーと剣が合体したような武器を取り出した。それぞれチェインソーモードと剣モードの状態にし、二刀流のようなスタイルで戦う。二人も彼に続くように反撃を開始する。

「たあっ！」

「ていつ！」

「ブアハハハハハハ！」

「うるせーよ！もうちよつと静かに戦え！」

俺は左腕に力を込めて黒いライダーの頭を叩く。頭からはコーンという金属音がなり、そのライダーの性能がいかに高いかが思い知らされる。

「そうこうしてるうちに片付いたわね」

「そうね。後はあのソルティンベイダー？とかつて奴だけみたい」

「ゲート、ここは俺に任せてくれ。奴の弱点を見つけた」

「ほう？なら任せたぞ」

「ああ」

黒いライダーは自身のドライバーに刺さったライダーガシヤットを抜き、紫色の武器に差し換える。武器についた赤いスイッチを押し、必殺技を発動する。

「M i g h t y ! C r i t i c a l F i n i s h !」

「君の弱点はそこだなあ？」

急にねつとりとした喋り方に変わり、黒いライダーは武器の銃口を敵の額についた「赤いコアのようなもの」に向け、必殺技を放つ。銃口から放たれた一撃は見事命中し、ソルティンベイダーは爆破し、今度こそ消滅した。

「会心の一発うっ！」

「帰るのか？」

「ああ、本当ならこんな緊急クエスト予定にはなかったしな。まあ機会があれば来るよ」

「そうか。そういや、あんた名前は？」

「俺は鍵・戸島鍵。仮面ライダーゲートだ。お前は？」

「俺は神童クロト、仮面ライダーゲンムだ」

「名前にまで性格が滲み出てるな。さっきの二人は？」

「青い髪の方が風鳴翼、シンフォギア装者の一人だ。もう一人の眼鏡をかけた方が櫻井了子、シンフォギア・システムの開発者だ」

「クロトに翼に了子さんだな、覚えた。じゃあなクロト」

「おう、じゃあな！」

時空をかけるライダー

「うーん。」

「どうしたんだい鍵？そんな妙な顔をして」

「いや、よく考えればあの世界って俺の管轄外だよな？どっちかつつーとあの手の世界ってシュンガの担当だよなって思ってた。今度会った時文句言っとこ」

「そうかい。そういえば鍵、早速で悪いがまたライダーの世界だ」

「最近多くね!?ライダーの世界に現れるインベイダー！何なの!?舐められてんのかな俺ら！」

「それを嘆いていたって仕方ない。悔しかったらやるしかないだろう？」

「そんな事分かり切ってるけどね！」

「なら行こう」

「クソツ！コイツらは一体なんなんだ！ワームとは違う、でもクロックアップを使ってくるな、しかも通常のクロックアップより速い。加えて変な奴らも出してくるし。」

おおさつすがー、現場にはもう青い二本角の仮面ライダーとアリの兵隊さんの皆さんが手早く対処してる。でも正体不明の敵にはやっぱり為す術もないか。周りはコンクリートの壁と床と柱に囲まれており、非常に戦いにくい。

「コイツらはインベイダーだ！この大量にいるインベイダーはハーフインベイダー、雑魚だ。ただ厄介なことに、コイツらワームのサナギ体の力を持っている、でもアンタらの力なら苦になる相手ではない。ハーフインベイダーはリーダー格のやつを倒さない限り延々と湧き続ける。この世界の場合コイツらのリーダーは、アイツか！」

「な、なんだお前は!？」

まあそりやそうなるよな。

「俺は仮面ライダーゲート、世界の門番だ」

「世界の門番？」

「おいアンタ、ZECTなんて大層な組織持つてんだから、少しは独学で弱点とか性質とか調べて俺に楽させてくれよう！これじゃ体がいくつあってもインベイダーの対処追いつかねえっつもの！」

「な、なんかゴメンな。で？アンタはアイツをなんとか出来んのか？」

「問題ないな！」

俺は右腰からドライブライドキーを取り出し、ドライバーの二番目の鍵穴にそれを刺した。

「Ride Cross！」

タイプチェンジ時の待機音声流れ出し、俺はドライブライドキーに手をかける。

「なんだかんだ言つてコイツはまだ使つてなかったからな。試運転も兼ねて、ひとつ走り付き合つてやるよ！グレードアップ！」

ライドキーを回し、新たな姿へとタイプチェンジする。

「World gate keeper！Kamen Rider Gate！Type Drive！」

タイプスピードの変身音と共に、俺はドライブの要素が合わさった新たな姿、「仮面ライダーゲート タイプドライブ」へと変身した。

「ふうん？相手は常時クロックアップ発動中か。俺の体持つかな？」

文句を言いながら俺はどこからともなくガンブレードキーを取り出し、アビリティライドキーを刺してそれを五回ひねり、シフトアップした。

「Ride Ability！Drive！Drive！Drive！Drive！Drive！Drive！」

「アンタ、クロックアップが見えるのか!？」

「変身中に限るけど、クロックアップほど常に隣接した世界なら目視は出来る。」

「マジか。」

「マジだ。」

俺はその場から走り出し、クロックアップ中のインベイダーに攻撃を仕掛ける。インベイダーの姿はカッシスワームに似ている。さし

ずめカッシスインベイダーというところだろう。

「でえあつーって危ねっ!?!」

非常に言いにくいのだが、今何があったかを説明させてもらう。カッシスインベイダーをガンブレードキーで斬撃しようとしたところ、シフトアップのスピードに慣れていないためか、コンクリートの床に転がった石に足をかけ、つまずきそうになったのだ。非常にかっこ悪い。だから見なかったことにして貰えると助かる。

「クソツッ!カッコわりい!」

「貴様、俺のクロックアップに追いついていないと言うのか!?!そもそもクロックアップは見えないはずなのに、なぜ!?!」

「またそのくんだり?さっき言ったぞ。俺はクロックアップほど常に隣接した世界なら目視は出来るってなっ!」

「グオツ!?!」

カッシスインベイダーは俺の足かけで見事にすっ転び、クロックアップが強制的に終了する。

「おかえり、こっちの世界へ」

「貴様、さっきのその言い方、貴様のあのスピードはクロックアップでは無いというのか!?!」

「そういう事!」

シフトアップが解除され、俺は通常のスピードに戻る。しかしそこに二つの不運が重なってしまった。ひとつはクロックアップの世界に「赤いライダー」が現れた事、もう一つは同時のタイミングで青いライダーがキャストオフしてしまった事だ。

「あのライダーは、クツ、最悪のタイミングで現れたな」

「青い瞳に赤い一本角、あのライダーはまさか」

「こうしちやいられない!よし、俺も!」

「えっ?」

「Cast off! Change Stag Beetle!」

「待って待って待って待ってマジすかマジすか今しちやいますかあああああつ!?!」

赤いライダーが現れたことによる混乱と、青いライダーの急なキャ

ストオフで銀色のアーマーパーツが俺にジャストアタックしてしまっただのだ。俺はそのせいで目標を見失い、ついでは建物も建物の柱に当たったアーマーパーツによって建物の柱が破壊され、その建物は崩壊。これは駄目だと思っただのか、ウワサのその赤いライダーも姿を消した。カッシスインベイダーもそれに乗じてクロックアップで姿を消す。

「チツ、ここは退くしかないな」

「うそーん」

「マジか」

青いライダーはクロックアップを、俺は再度シフトアップして建物から脱出した。アリの兵隊たちは自分たちにアーマーパーツが当たると防ぐためか、既に撤退していた。全員が無事建物から脱出し、その場から離れた頃にはその建物は全壊していた。どうやら工事現場だったようで、建物の跡地には鉄柱がいくつも落ちていた。後でZ ECT隊員に教えてもらったが、建物の中心から半径100メートル以内に人が居なかったことが不幸中の幸いだそうだ。

「おいらっ！」

「ごめーん！」

「大丈夫かアイツら？」

仮面ライダーカブト

俺は今、ZECTの本拠の取調室？みたいな所で尋問されている。あの二本角の青いライダーの変身者に。

「で、なんで俺達の事を知っているんだ？」

しかし俺も馬鹿をやらかしたライダーに黙って尋問されていられるほど人間が出来ていない。俺はこの変身者に尋問される事に腹を立て、そいつに対して反抗の態度をとる。

「それより良いかな？なんであそこでアーマーパーツ外した？俺にクリティカルヒットしたし、アーマーパーツで工事現場は全壊するし、インベイダーには逃げられるし」

「うっ、すまん」

「すまんじゃないよまったく。で、何が聞きたいんだ？」

「ああそうだった。お前はどこでZECTの事を知ったんだ？」

「うーん、まず俺の事を説明する必要があるな」

俺は俺について説明し、これまでの事や世界の門番としての役割などを説明した。この世界はひとつではなく、パラレルワールドのようにいくつも存在すること、そしてこの世界がそんなパラレルワールドの中の一つにすぎないという事を。

「お前の話が本当なら、つまりお前は異世界から来たという事か？」

「そーゆー事。で、この話をふまえた上でもう一度話を聞いてもらいたい。俺は自分は『世界の門番』だと言った。そしてその世界の門番、つまり俺が倒すべき敵もいる訳だ。さっきのワームみたいな奴らがそうだ、俺はインベイダーと呼んでいる。奴ら、どういう訳か、ワームを擬態して侵略してきていた。っと忘れてた、俺の名前は戸島 鍵、仮面ライダーゲートだ。よろしくな」

「俺は加賀美新、仮面ライダーガタックだ。こちらこそよろしく」

「新だな、俺の知り合いと同じ名前だな。さて本題だ、俺がどうやってZECTを知ったか。フィリップ、出てきてくれ」

俺がそう言うとはも無い場所に青白い空間が開き、その中からフィリップが出てきた。

「うおっ!? 何っ!? 人っ!?」

「初めまして加賀美新。僕の名前はフィリップ、仮面ライダーサイクロンだ」

「あつ、どーも」

「コイツには『星の本棚』っていう特殊能力があつてな、地球の記憶にアクセスする事で様々な情報を知ることが出来る。この世界に存在する地球の記憶にアクセスする事でアンタ達のことを知った」

嘘だ。俺は元から知っていた。しかしこれらの言い訳がまったくの大嘘という訳でもない。フィリップがこの世界の地球の記憶にアクセスしたところ特に問題はなく、この世界の地球の記憶を知ることが出来たらしい。

「フィリップのこの能力はくれぐれも内密に頼むよ、悪用されたらたまつたもんじゃない」

「分かった、この話は上には黙っておく。それは良いんだが、結局お前達は何が言いたいんだ?」

「結論から言わせてもらう。この世界のライダーが所属する組織、ZECTの力を借りたい。ワーム討伐のスペシャリストが居ればこちらの戦況が大きく変わる。インベイダーについて詳しい俺達とワーム専門の組織の力を合わせれば、あのカッシスワームの姿をしたインベイダーを倒すのも楽になるはずだ、頼む!」

「分かった、ZECTも協力する。ただし俺が指揮する部隊、『シャドウ』だけになるかもしれない」

「それでもいい、助かる!」

俺達はZECTと手を組み、カッシスインベイダーを倒す事にした。するとさっそく新の部下と思われる男が何かの反応を感知し、声を上げて新に報告する。

「市街地にてワームに酷似した生命体の反応を確認! 多数存在します!」

「噂をすればって奴か。行こう新!」

「ああ! シャドウ隊員、総員出撃準備をしろ!」

「目標発見！姿を確認しました！」

「他にも多数見られます！」

「よし、攻撃開始だ！」

アリの兵隊、アントルルーパー達は新の指示でワームの姿をしたハーフィンベイダー達を攻撃する。実力は五分五分で、どちらの勢力も一歩も退かない。

「俺達も行こう！」

「ああ！」

「変身！」

俺はゲートライドキーを使って、新はガタックゼクターを使って変身した。

「キヤストオフ！」

「キヤストオフは良いけど建物壊すなよ？」

「分かってるよ！」

新はガタックゼクターの二本の角を180度開き、自身にまとわつたアーマーパーツを外した。

「Cast off！Change Stag Beetle
！」

「もう逃がさないぞインベイダー！」

「そういう事だ。クロックアップも今は意味が無いぞ、だって」

しかしカッシスインベイダーは俺の忠告を無視してクロックアップをした。しかしそのクロックアップは一秒も経たないうちに強制的に解除され、再びその姿を表した。

「グウツ!?おのれ、貴様も我が野望を邪魔するといふのか、仮面ライダー！」

青い瞳に赤い一本角を持った、赤いライダーが居たから。赤いライダーは武器の銃身をつかみ、それを引き抜いてダガーナイフのような形状にする。

「出たな、赤いライダー」

「えっ、赤いライダー!?今ここに天道居るのか!？」

「居るぞー、絶賛俺達の目の前に立ってる。クロックアップして見て

みれば?」

「わ、分かった」

「Clock Up!」

新はクロックアップをして、その赤いライダーの姿を確認する。仮面ライダーカブト、妹のために世界を守り、クロックアップの世界に消えた家族思いのライダーだ。

「天道!無事だったのか!」

「当たり前だ」

なんとというか流石というか、カブトは自尊心の塊とも言うべき人物だった。

「おばあちゃんが言っていた。天の道をゆき総てを司る男、それが俺だ。しかしお前は俺のゆく天の道をさえぎり、あまつさえ俺の妹が愛する世界を侵略し壊そうとしている。覚悟は出来ているんだろうな?」

そして劇中通りのシスコンだった。するとカブトはカツシスインベイダーに向かって走り出し、先制攻撃を決めた。カツシスインベイダーも負けじと反撃するが、攻撃がかわされては反撃され、かわされでは反撃されを繰り返していた。カブトの戦闘スタイルはカウンターアタック、防御を捨てて、無駄な動きをはずき、回避して攻撃する事につした攻撃スタイルだ。

「ふっ!」

「グウツ!」

本気で「自分は選ばれし者」と思っていて今まで仕事をせずトレーニングに時間を費やしてきたため、単純なパワーもそうだが、独自の戦闘スタイルを持って戦うことが出来ている。だがそれ故にパターン化し、反撃される事も少なくはなかった。

「ふむ、貴様の攻撃がだんだん読めてきたぞ。次は、そこかつ!」
「っ!」

そう、変身者にもよるだろうが、カブトよく言えば短期決戦型、悪く言えば長期戦に弱いのだ。カブトはついにカツシスインベイダーに反撃され、自身がもつとも得意とするカウンターアタックが通用し

なくなってしまうた。

「ぐっ!？」

「天道!？」

「俺達も行くぞ!？」

俺はタイプドライブに変身し、すかさずアビリティライドキーをガンブレードキーに刺してそれを回した。

「Ride Ability! Drive! Drive! Drive! Drive! Drive! Drive!」

アビリティライドキーを五回回してシフトアップし、カッシスインベイダーに攻撃を仕掛ける。

「一芸だけじゃヒーローは務まらねえぞ赤いの!？」

「確かに赤いが、俺の名前はカブトだ!？」

「そうか!？」

俺達は並んで立ち、それぞれ逆の足で、カブトは右足で、俺は左足でカッシスインベイダーを蹴り飛ばす。

「ふっ!？」

「はあっ!？」

「グオアツ!？」

流石に二人同時の蹴りは効いたのか、カッシスインベイダーは大きく後ろに下がり、バランスを崩して後ろに転倒した。

「お前らばかりにカッコつけさせてたまるかよ!？」

新もここぞと戦いに参戦し、自身の専用武器二本でカッシスインベイダーを攻撃する。

「そろそろ決めるぞ!？」

「ああ!？」

「1!2!3!」

「ライダーキック!」

「Rider Kick!」

「1!2!3!」

「ライダーキック!」

「Rider Kick!」

「んじや俺も！」

「Gate! World Finish！」

「ライダーキック！」

俺達はカッスインベイダーを取り囲み、それぞれ同時に回し蹴りのライダーキックをした。カッスインベイダーインベイダーは爆散して消滅し、その世界を終わらせた。

「さて、じゃあ帰るか。じゃあなカブト、それに新」

「おい、ゲートと言ったか？お前にこれをやる」

そう言っただけカブトの手から投げ渡されたのは、カブトの力が宿った「カブトライドキー」だった。

「そいつの使い方は俺には分からない、だからお前にくれてやる。お前なら使えるんだろう？それと、俺の名前は天道総司だ」
「え？」

「天道総司、それが俺の名前だ。これからは名前と呼べ」

「そうか。俺の名前は戸島鍵だ、じゃあな総司」

「ああ、じゃあな、『戸島』」

俺は変身を解き、総司の姿は完全に見えなくなった。マシンゲーターに跨り、目の前に扉を開き、俺はカブトの世界を後にした。

インファイニット・ストラトス ヴレイズへISSV

「ガアアアアアアアアアアッ!!!」

「ほら言わんこつちやない。あのドラゴンの暴走、間違いなくインベイダーを喰った影響だよな」

俺達が既に変身した状態で現場に駆けつけた頃には赤いドラゴンは暴走しており、辺りはもう火の海となっていた。

「ああ。奴の体を分析したが、インベイダーは完全に腹の中で消化している。だが遺伝子があのドラゴンの身体中に行き渡り、その急な体の変化と強力な力に耐えられず、暴走している。さしずめ『リオレウスインベイダー』というところだね」

「リオレウスインベイダーか、かなり厄介な敵が誕生しちゃったな。なあシユンガ、異世界線路はライトノベルだけじゃなくてゲームの世界にも繋がってるのか？」

「ん？まあな。有名なゲームだと異世界線路が敷かれている事がある。例えば『モンスターハンター』だな。このリオレウスはゲームの世界から、異世界線路を辿ってデータとして中から出てきた。そして何らかの力が働いて実体化し、そしてインベイダーを喰ってインベイダーになった」

そして俺はある事に気付く。

「なあ皆、だとしたらこれって相当ヤバくないか？だってリオレウスは異世界線路を伝ってゲームの世界から出てきたんだろ？それにこれは前に行った世界で分かったことなんだが、ハーフィンベイダーとて進化するのは例外じゃない。もしゲーム世界からモンスター達が出てきて、それをハーフィンベイダーが進化の媒体にしたら。」

すると仮面ライダークロースの変身者、カイトが言葉を発する。

「おい、アンタ鍵って言ったか？アンタのその考え、間違ってるなさそうだぞ。見てみるよ。」

カイトが指さした先には、リオレウスインベイダーが召喚したハーフィンベイダーが、どこからともなく現れた謎の光を喰らい、姿を変えている光景があった。ハーフィンベイダーの姿はやがて完全に変

わり、青い体に、特徴的な赤いとさかを持ち、鳥類のようなくちばしを持ったモンスターに変わり、そこからさらに黒い体色と白いとさかと筋模様が変わった。

「あれはランポスだな」

「ブレイズ！来たのか！」

「ああ。仲間が愛するゲームがこうも汚されては流石に黙っている訳にもいかないからな」

「そうか、ありがとうなブレイズ。ところでお前ゲームの事なんて知ってたっけか？」

「アスナに何度も協力プレイを強要されたことがある、だからある程度の知識はある。ランポスは、モンスターハンターの中では雑魚モンスター扱いだな。モンスターハンターが苦手なやつでも倒せるし、脅威度もそれ程高くない。青い体であることと、鳥類のようなくちばしと赤いとさかが特徴だな。でもインベイダーに取り込まれて変色している。さしずめ『ランポスインベイダー』と言う所か」

ランポスインベイダーか。俺はモンスターハンターをやった事があるが、ドスランポスとイヤックを倒すのがやっとだった。それ以降無理ゲーと判断してめつきりやらなくなったなあ。つてそんな事考えてる場合じゃない、倒さないとな。

「じゃあやるか！狩り、開始！」

「Ride Ability! Drago Knight Hunter Z! Fangg!」

ドラゴナイトハンターZ、これを使えるのはおかしいと思うやつも少なくはないはずだ。しかし何もおかしくはない、なぜなら俺は一度それが使えるライダーと一度会っているからだ。変身者こそ違うが、俺はゲンムと会っている。そしてドラゴナイトハンターZはゲンムの変身者が作ったものだ、使えるようになってからも不思議ではない。ただ、俺が使えるのはあくまで力だけだ。

「狩ゲーには狩ゲーってな！」

竜の力を身にまとい、異形の竜たちに対抗する。俺のそんな姿を見てか、後ろに立っていたスフィアアースのライダーたちも攻撃を開始

する。

「くっそ！悔しいけど、お前超かっこいいよ！」

「こりや俺達も負けていられないな！」

「鍵、お前にばかりいいところ取りはさせないぞ！」

この言葉を待っていた。俺はマスクの奥でにやりと口角をつり上げ、悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「そうか、なら勝負だ。俺はこの勢いを止める気は一切ない、だから勝手に追いついてきてくれ。モンスターハンターと言えはやはり、ひとくくりについてゲームだ。モンスターを狩ってなんぼのこのゲーム、同じ舞台の同じスタートラインからでない面白くないよな！」

そう言って、俺はスフィアアースのライダー3人にガンブレードキーの銃口を向ける。

「えっ!？」

「ちよつと待て！」

「ああ、あれか……」

シユンガの方は真つ先に撃たれる準備が出来ていたので、まずシユンガを撃った。撃った弾はシユンガに着弾し、ライトエフェクトと共に爆風を巻き起こす。

「撃ったああああああああああああああ!!!」

「シユンガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

突然仲間が撃たれた。その衝撃の事実には絶叫する二人だが、砂煙の中から現れたシユンガのシルエットを見て、反応がうってかわった。中から出てきたシユンガはむしろピンピンしており、今の自分の力を確かめるように軽くジャンプしたり、何も無い場所に向かってパンチしたり、「斬ったり」していた。

「なるほどな」

「えっ?」

「Blade!」

「こういうのもなかなかいいな、ちよつとだけお前のその力が羨ましいよ鍵」

「だろ? よーし、お前らもやるぞー。シユンガ、その二人抑えとけ」

「りよーかい」

「ちよつ、ちよつと待つてくれ！」

「俺達まだ心の準備が！」

「大丈夫だつて、痛みは一瞬だから」

「痛いの!?!」

そんな二人の嘆きの声をガン無視し、俺は二人にドラゴナイトハンターZの弾をそれぞれ一発ずつ撃ち込む。

「来てるから！弾来てるから！」

「離せシユンガ！」

二人の声はむなしくもシユンガに聞き入れてもらえず、弾は無事二人に着弾したのだった。

「うっ」

「いつ!?!」

「地味に痛いよこれ」

「Gun！」

「Claw！」

「待たせたなモンスター共、超協力プレイでクリアしてやるよ！スコアアタック開始だ、一位を取ってやる！」

「なーに言つてんだ鍵？一位は俺だ！」

「いやいや俺だろ！」

「お前らに一位は譲らねえっつーの！」

しかし俺達は忘れていた。真の意味でこの世界を守るべきなのは俺達では無いことを。真の意味で一番楽しむべきなのは俺達では無いことを。もつとも、インベイダーの狩りを楽しんではいけないのだが

「な、あ、俺は？」

「あっ」

「良いんだよ、俺は。この感じからすると、もう無いんだろ、その鎧みたいな奴」

「待て、今作った！作ったから元気出して！お願い！」

俺は既にガンブレードキーに刺さったアビリティライドキーを更

に回して弾を装填し、ISライダーに変身したハルトにそれを撃つた。

「うっ!？」

「Tail!」

「ドラゴナイトハンターテール、ドラゴンの尾と、力強い脚力が特徴だ。脚力って意味では、まあ、この中じゃ一番ライダーらしいな」

「おっしや燃えてきたあ!」

「あっ!ちよっ、待て!抜け駆けズルいぞ!」

「ランポス共は全部片付いたな。後は、この闇に染まった真つ黒なドラゴンだけな訳だ。悪いが、ラストアタックL Aは俺が頂く!」

「寝言は寝てから言えよ鍵、俺だよ」

「いやいや、俺だろ」

「俺だ」

「ちげ!よ俺だっつて」

「!!!」

俺も含め、この場にいる全員目は獲物を狩る肉食獣の目になっていた。今の俺達はリオレウスインベイダーを威嚇しつつ、互いに互いを牽制しあっている。これ程カオスという言葉が似合う状況が他に有るだろうか?

俺はそつとゲートガイアメモリを取りだし、スイッチを押して起動し、素早くゲートガイアソードを手取る。

「一位は俺だあああああああああああああつ!!!」

「あつ!必殺技で一気に決める!」

「V o l t e c k F i n i s h !」

「D r a g o n i c k F i n i s h !」

「F u l l C h a r g e」

「ウルドヴァーネアタック!」

「四人」の必殺技はリオレウスインベイダーに命中し、ついに倒れ、なかった。

「倒せてない!？」

「そんな！」

「マジかあ」

「そーいや鍵は!？」

「あっ」

ずっと姿を隠してリオレウスインベイダーの後ろで待機していた俺は姿を表し、マスクの下で顔をにやつかせながらこう言う。

「いやあサンキューお前ら、俺の思い通りになってくれて」

そう言い捨てて俺は二つの剣で同時に必殺技を発動した。

「Gate!World Brake!」

「ゲート!マキシマムドライブ!」

二つの必殺技を同時に受けたリオレウスインベイダーは今度こそ倒れ、そして消滅した。

「クソがああああああああああっ!」

「んじや、俺もう行くわ」

「おう、気を付けてな」

「ああ。そーいや二人とも、お前ら帰れるのか？」

「」

「沈黙は否定とみなすぞ。世界まで送るからついてこい」

俺はバイクに乗り、二人を連れてこの世界を後にした。

俺、参上！

《Ride Attack! Kabuto! World Break
!》

「であああああああああつ!!!」
「ぎやああああああああつ!!!」

今俺が何をしているのかと言うと、それはもう見ての通りインベイダーを倒していたところだ。今回のインベイダーはかなり特殊で、雑魚のインベイダーを召喚するのは今までのインベイダーと何ら変わりはない。のだが、問題はその召喚されたインベイダー達だ。ハーフインベイダーではないのだ。普通、強大な力を持ったインベイダーが召喚出来るのはハーフインベイダーなのだが、今回戦った蟻型のインベイダー、アントインベイダーと呼ぼうか。アントインベイダーは、召喚された一体一体が意思を持っていた。つまりハーフインベイダーでは無いのだ。数多のアントインベイダー達だが、もし本当の蟻に例えるのならば、召喚されたインベイダー達は働き蟻で、それらを召喚しているインベイダーは女王蟻という事だろう。こうもインベイダーの数が多いと倒すのにも一苦労する。しかし、フィリップの提案で女王蟻のアントインベイダーを重点的に攻撃する事になった。女王蟻を倒せば、司令塔を失った働き蟻達は動けなくなり、自然とこちらの勝利が確定する。俺はフィリップの提案を受け入れ、それを実行した。作戦は見事に成功し、女王蟻のアントインベイダーを倒すことが出来た。働き蟻達は司令塔を失い、動きをピタツと止め、その場で狼狽^{うろた}えだす。

「お前らの女王様は死んだ！まだ俺と戦う勇氣のある奴はかかってこない！」

その言葉に働き蟻達は怯^{おび}え、その場から逃げ出し、目の前に闇色の空間の裂け目を開いてその中へ逃げていった。これで終わり、だと思っていたが、まだ終わっていないかった。もっと早く気づくべきだった。この世界に存在する、異常なまでの「砂」の多さ。これに気づいてさえいれば、二次被害を起こさずに済んだのかもしれない。

「お前の望みを言え。どんな望みも叶えてやろう」

「行くよ、モモタロス」

「おう！」

「だあーもうっ！インベイダー逃がしちゃったよ」

「落ち着きたまえ鍵、そんな時もあるさ。しかし、まさかインベイダーが召喚するものが、ハーフィンベイダーでは無かったとは。興味深いね」

「出たよ、フィリップの、知識に飢えた子供の目！」

「ふふっ。しかしあの世界、存在する「砂」の量が異常だったな。そして何度か、時空の歪みが生じた反応を感知した。まあ、ものの数分でその歪みは消えたようだけどね」

「砂と時空の歪み？どういう事だ？」

「そのままの意味だよ。鍵、砂と時空に関連するライダー、知ってるかい？」

「思い当たる節はある。電王だな。未来からやって来た、電王の敵である『イマジン』は、自分の契約者となる人間に取り憑く時、人間の体に入ってその人間のイメージを元に自分の体を形成する。なんでも一つ願いを叶える代わりに、契約が成立した時に完全体となり、契約者の過去の時間を奪って過去の世界で破壊活動を行う。イマジン達は人間に取り憑く時、異常な量の砂を発生させる。取り憑いたばかりの、願いを聞く直前の姿もただの砂の塊だ。そして過去に飛んだイマジンは過去を破壊し、『時空の歪み』を発生させる」

「なるほど。どうやら、当たりのようだね」

「フィリップ！」

「分かってる、行こう！」

一体の異形しか存在しない闇色の空間、そんな中に黄色に光るもうひとつの異形が発生し、異形の体に激突する。光は砂となって異形の

仮面ライダー電王

「モモタロス、急ぐよ。イマジンに似たやつはもう過去に飛んで破壊活動を始めている！」

「そんなの、街を見れば分かる！街が過去改変でどんどん壊れていきやがる、クソッ！」

「鍵、急いでくれ！もうデンライナーが発車する！デンライナーが過去に飛ばば、僕達が救える未来も救えなくなる！」

「分かっている！間に合えよ！」

「おいアンタら！俺達もその電車に乗せてくれ！」

「なんだアイツら！」

「君達は？」

「僕達は仮面ライダーさ。野上良太郎、僕達が君の、電王の世界を救うにあたって必要な事、それはデンライナーに乗り、過去に飛んだ『イマジンインベイダー』を倒す事だ」

「イマジン、インベイダー！」

「なるほど、あなた方の敵であるインベイダーが、突如現れたイマジンを喰らい、進化した結果イマジンと同等の力を得た。力を得たイマジンインベイダーは過去へ飛び、破壊活動を行っている。そういう事ですな？」

「お、オーナー、いつからそこに？」

「かなーり、最初の頃からいましたよ。しかし、仮面ライダーゲートですかあ。いくら世界を救うためと言っても、パスを所持していないのに乗車するのは、関心しませんねえ？」

「あーすいません、そこはマジ勘弁！えっと、これは使えますか？」

俺はズボンのポケットに入った「紺色のパス」を取り出し、食堂車両の中のテーブルの上にそれを置く。

「これは……。見たことの無いパスですねえ？」

「二応ライダーパスです。デイファイリントライナーに乗車するために操縦者からそれを受け取りました。俺専用です」

「デイファイリントライナー。あれはまだ開発中の列車で、情報未公開のはずです。何故あなたがそれを知っているのですか？」

かなり警戒されている。それもそうだ、教えてもいない列車の情報を俺自身を知っているのだから。しかし、オーナーさんは今なんて言った？「開発中」、「情報未公開」という言葉が聞こえたのだが。

「ちなみに、あなたにこれを渡した操縦者というのは何者ですか？」

「三代目電王、仮面ライダー電王ブレイズ。未来の電王だ」

「ちよつと待つて、未来の電王？それなら幸太郎君が、NEW電王がいるはずだけど。」

「そう遠くない未来で、ある分岐点が発生する。その分岐点では、本来迎る運命と同じ手順を辿れば、未来の電王はNEW電王となる。でも、もう一つの運命を辿れば本来の電王とは違う未来の電王、電王ブレイズが誕生する。電王ブレイズが誕生する未来では、この時代には存在しない新たなライダーも誕生する」

「なるほど、三代目の電王ですか」

「このパスを通して操縦者と連絡を取る事も出来る。証拠についてわけじゃないけど、呼びますか？」

「いえ、結構です。あなたの言っていることが事実だということは理解出来ました。分かりました、あなたを正式な乗客として認めましょう」

「ありがとうございます。あと、この列車から降りても良いですか？」

「普段の私なら駄目と言う所ですが、どうしますか良太郎さん？」

「わかった。何があっても僕と一緒に居て、それなら別にいいよ。幸い、門番は特異点が過去に干渉しないのと同じように、世界に干渉しないみたいだからね」

「ありがとう」

「しかし、ちよつとした問題が発生してしまいましたねえ」

オーナーが席に座り、お馴染みの国旗付きのチャーターハンを、国旗を倒さないようにたいらげていきながらそう言う。良太郎 ほもオー

ナーの言葉の意味を理解したのか、その言葉に同意する。

「そうですね。イメージが飛んだ年代が分からない」

(なるほど、そういう事か)

普通、電王は契約者に強く残っている年代の過去に飛ぶことで破壊活動、過去改変を行うイメージの、過去に飛んだ道のりを辿る事で追跡するのだが、今回は契約者もイメージもない、イメージの力を持ったインベイダーなのだ。インベイダーという未知に対して知識を持たない良太郎には、追跡は難しいだろう。しかし、

「それについてなんだけどさ、提案がある。俺のパスを使ってくれ」

俺はずっとテーブルに置いていた紺色のパスを手に取り、パスを「起動」させる。起動したパスが発光し、発光する部分からスタートメニューのような画面が浮かび上がる。

「これは」

「これが未来の技術だぜ。えっと、ちょっと待ってくれ」

電王のライダークレストが写っているアプリケーションボタンを押すと、再び画面が変わり、「小さな女の子」が光をまもって浮かび上がる。

「お呼びですか？マスター！」

「マスター!?!」

「へえ？」

「zzz」

「わあ、カワイイー！」

『ナナ』、このデンライナーにアクセスしてくれ。このパスでデンライナーを操縦出来るようにして欲しい」

「かしこまりました！」

流石に俺の事をマスター呼ばわりしてきたデイフィリントライナー産のこのAI、ナーの存在には驚いたようで、俺達が真面目な話をしている中、バカをやっていたイメージズも声を上げて驚く。一人を除いて。

「アクセス完了です。しかしマスター、デンライナーを操縦出来るようにしたのは良いのですが、一体何をするのですか？」

「ああ、俺がとり逃したインベイダー。アイツがイマジンを取り込ん
で進化した。イマジンの力で過去に飛んだイマジンインベイダーを
追う」

「なるほどー！分かりました、では、パスを操縦席にセットして下さい。
セットして頂ければ、私が経路案内を致します！」

そう言い切るとナナは姿を消し、発光していたパスの光も消えた。
「だつてさ。ほら、使つてよ」

俺は良太郎に自分のライダーパスを投げ渡し、操縦をするようにう
ながす。

「分かった、ありがとう。行くよモモタロス」

「おうー！」

良太郎は腰に巻かれたベルトの赤いボタンを押してモモタロスを
自分に憑依ひょういさせると自分の黒いライダーパスを取り出し、ベルトに描
かれたライダークレストにそれをかざす。良太郎とモモタロスの声
が重なり、初代電王がその姿を現す。

「変身！」

《Sword Form》

ベルトから機械の音が響き、直後、良太郎の姿が電王プラット
フォームに変身し、そこから更にいくつかのアーマーが表れ、プラッ
トフォームの体に装着されていく。後頭部から「目」が火花を散らし
ながら進行し、やがて「停車」してその目が開く。

「俺、参上！」

「最初から参上してるだろ。いいから操縦頼むぜモモタロス」

「うっ、うるせー！」

電王は先頭車両に移動し、そこに設置された操縦席、「マシンデン
バード」に跨ると、マシンデンバードに俺の紺色のパスをセットする。
パスとデンライナー本体が接続され、デンライナーの時間逆行機能じかんそこうが
拡張された。先頭車両の操縦席にナナの声が響き渡り、デンライナー
が発進する。

『それでは、ナビゲートを開始します。私がナビゲートを致しますの
で、その通りにデンライナーを操縦して下さい。分かりましたかモモ

タロスさん?』

「おう!頼んだぜちつこいの!」

『わ、私はナナです!』

二人のちよつとした掛け合いが終わったあとでデンライナーは発進し、時間遡行を開始する。過去と未来を救うために。

『着きました!操縦お疲れ様です!インベイダーの場所は分かりますか?』

「そこは俺とフィリップがいるから大丈夫だろ」

『マスター!分かりました。それでは、私はスリープモードに移行します。マスター、お休みなさい!』

「ああ、おやすみ」

俺がそう言うとなナの声は消え、スリープモードと言う言葉の通りに紺色のパスの光も消え、スリープモードになった。そう、ナナはこのライダーパスの本体そのものなのだ。

「よし、それじゃ」

《Ride Change!》

「変身!」

《World Gate Keeper!KamenRider Gate!Type DEN-O Braize!》

「電王ブレイズか、てこたあそれが」

「ああ、未来の三代目電王の力だ」

「なるほどなあ。三代目が電王ブレイズなら、二代目は何になるんだろうな?」

「知らん、俺に聞くな。さて、そろそろ行くか。こっからの案内は俺がする、俺の言葉に従って操縦してくれ」

デンライナーは再び、イマジニンベイダーを追って発進する。

「ゲートオ、ゲートオ!!!さっさと来い、来ねえとこの世界が壊れちゃうぞ、ゲートオオオオオオツ!!!」

「そっかそっか、随分待たせたみたいだな。それは悪かったな」

「なに!?ぐあつ!」

俺を、仮面ライダーゲートをおびき寄せるためにわざわざ過去に飛んで過去改変までして。今みたいに呼んでくれればインベイダーを滅すべく飛んで行ったのだが、大分回りつくどいやり方だ。まあ、ここが「電王の世界」である以上どうしても電王が絡むのは必然なのが、おかげで良太郎とイマジンスに迷惑をかけてしまった。デンライナーのハッチが開き、それぞれのマシンに跨って電王と共にコックピットから飛び出す。飛び出したついでに電王と共にマシンの前輪による先制攻撃決め、自分とマシンの重さを利用した強力な一撃を決める。

「俺、参上っ!」

「この感じ、なんかデジャヴ。」

「おい、アイツがテメエの言っただイマジンだろ? さっさと片づけようぜ」

「そうだな。その前にモモタロス、パス返せ。お前すぐパス投げ捨てるだろ」

「おおそうだな。ん?なんで俺が投げ捨てること知ってるんだ?」

「未来でもやってるからだ」

嘘だ。本当だけど嘘だ。

「モモタロス、その投げ捨てるクセやめようよ、仕舞うのがカッコ悪くて投げ捨てて、その度に無くしてるんじゃないやもつとカッコ悪いよ?」

「うぐっさ、さっさと終わらせるぞー行くぜ行くぜ行くぜえっ!!!」

(逃げたな。まあいいや)

「そんじゃ、早いところ終わらせるか」

俺は右腰からゲートガイアメモリを取りだし、そのスイッチを押す。

「Gate!」

虚空からゲートガイアソードが召喚され、いつもの二刀流スタイルになる。ガンブレードキーを右肩に担ぎ、ゲートガイアソードを左手にもち、そのまま立ち尽くす。イマジンインベイダーがこちらに向かって走ってくるのですぐさま迎撃態勢に入り、互いに衝突する。

「モモタロス、こいつは俺を殺すという私怨にかられている。他のやつは眼中にないんだ！俺がこいつを引き付けるから、お前はこいつを攻撃してくれ！」

「俺の嫌いなやり方だが、やるしかねえよな、分かったぜ！」

俺がイマジニンインベイダーを引き付け、その隙に電王がそれを攻撃する。ありきたりだが、この状況においては妥当な先頭スタイルだった。現に、この戦法はしっかりとイマジニンインベイダーに効いており、確実にダメージを与えていった。しかしここで予想外な出来事が発生した。いや、少し考えれば予想できたはずだ。何故ならイマジニンインベイダーは、いや、「アントインベイダー」は、俺を殺す為にここに居るのだから。イマジニンインベイダーは胸ぐらを掴んでいた俺の腕を力強く振り払い、大きく後ろに下がって叫ぶ。

「ゲートは現れた！同胞達よ、今こそ立ち上がる時だ！亡き女王様の敵を討つのだ!!!」

その言葉を言い切ると同時に、イマジニンインベイダーの背後に闇色に染まった空間の穴が現われ、その中からアントインベイダーの大群が出てきた。

「女王様の敵っ!!」

「死ねゲートッ!!」

「おいおいおい、なんなんだこの量はよお、なあ、鍵つつったか？これ、もしかしくなくてもヤバいんじゃないか？」

「ああ、ヤバいな。」

絶体絶命。その言葉が最も似合う程の状況となり、流石に身動きが取れずにいた。しかしその時。

「おいおい、まさか、この程度でやられるつもりじゃないだろうな？野上？モモタロス？」

「鍵さん！大丈夫ですか!?!」

「ユウト！」

「アラター！ナイスタイミングだ！」

とても心強い味方が来てくれた。これ以上ない程にありがたい。しかし、どうやってここまで来たんだ？アインも世界を越えることが

出来るとはいえ、過去に飛ぶことは出来ないはずだ。

「一体どうやってここまで来たんだ？過去には飛べないだろう？」

「アイン曰く、『Mr. 鍵の持つライダーパスのデータを使って作ったこのライダーパスを使えば、あとは列車さえあれば過去に飛ぶ事など容易いのです』、らしいですよ」

「いつの間に俺のライダーパスのデータを盗ってたのか。まあいい、この際どうでもいい。アラタ、手伝ってくれ！」

「はい！行きましよう、櫻井さん！」

「ユウトで良い、変身！」
「変身！」

ユウトという青年は緑と黄色の2色のチケットを取り出し、アラタは自身のライドキーを取り出す。それぞれのキーアイテムをベルトにセットし、それぞれ「仮面ライダーゼロノス」と「仮面ライダーアイン」に変身する。

「最初に言っておく！俺はかーなり、強い！」

「アイン、セリフ借りるよ。予告しよう。本日、貴方の運命を頂戴する！」

ここに四人のライダーが揃った。

「さてと、反撃開始！」

俺達はそれぞれ四方方向に走り出し、それぞれアントインライダーの大群につっこんでいく。

「ふん、数が増えたところでこの状況だ。貴様らが不利なのに変わりはない！」

「どうだろうな？こつちには、かーなり強いライダーと、データだろうが景色だろうが、なんだって盗っちゃうライダーが来たからな、俺達の負けとは限らないぜ。最後まで何が起こるか分からないのが戦いだ！」

「ほざけ！戦いは始まった時から既に決している！」

「確かにそういう戦いもあるかもな。でも見てみるよ」

馬鹿みたいに居たアントインライダーの大群は徐々に減り始めて、やがて半数を切った。かなり強いライダーとなんでも盗るライダー

が来た事が大きく、きつきの時点での不可能は可能となっていた。

「戦いは、始まった時から既に決しているんだっけか？」

「くっ、もう良い、お前達下がれ！」

しかし、ここでイマジニンベイダーにとっても、もちろん、俺達にとつても予想外な出来事が起こった。

「待てよ、俺達は使えねえからもう良いってか？ふざけんなっ！」

「少し力を手に入れたからって調子に乗るなよ！」

「お前は力を手に入れてゲートを倒せる時を待ってたのかもしれない。そしてその時が来たからこうやって実行してんだろ？」

「でもそれは俺達も同じなんだよ！女王様を殺されて、復讐したいと考えていたのは全員同じだ！」

「なんだ貴様ら、働き蟻の分際で俺に逆らうのか！」

本来呼ばれるのはハーフィンベイダーだ。だが今回呼ばれたのは既に進化体のアントインベイダー。つまり意思がある。意思がある以上、こういうトラブルが起こるのは必然だ。ハーフィンベイダーとは異なり、コイツらは言われればなんでも言うことを聞くだけの操り人形では無いのだから。

「元はお前も働き蟻だろがあっ！」

アントインベイダーの中の一人がイマジニンベイダーに襲い掛かる。それに釣られるように、後ろにいたアントインベイダー達も次々とイマジニンベイダーに襲い掛かる。イマジニンベイダーもそれに負けじと対抗するが、イマジニンベイダーは手に入れたばかりの力を使いこなせず苦戦している。対して、アントインベイダー達は、生まれ持ち使い慣れたその力で、大人数を利用した最適な陣形を組んでイマジニンベイダーとの戦いを有利に進めていた。やがてイマジニンベイダーは大きな爆発と共に消滅した。

「お前の女王様に対する思いは本物だったのかもしれない。だがそこそが間違いだった。女王様に対する思いが強過ぎたせいで、お前は力を得た途端我々を道具として見るようになってしまった。仮面ライダーゲート！今回は大人しく退こう。先程の状況を見て、まだ戦いを続けようとするほど我々も馬鹿ではない。そしてこれからだ

！人間の心の強さがある限り、我々はお前達仮面ライダーどころか、人間にすら勝てない。だから我々は共存する、人間の心の強さを知る為に！そしてゲート！貴様と戦う！更なる強さを身につけるために！」

なるほど、これがかつての仲間との死闘を繰り広げた末に出た結論か。いや、俺は全然良いんだけど、寧ろ共存なんて喜ばしい事なんだけどさ。まさかそう来るとは思わないじゃん？だってインベイダーだぜ？ただただ侵略して残虐の限りを尽くすあの。なんて事を考えながら、俺が出した結論は。

「分かった、それで行こう。こちらとしても、共存出来るなら本望だ。お前らもそれでいいか？」

「お、俺は別に良いけどよう。」

「そのインベイダーとやらは、元々俺達の敵じゃない。そつちで判断してくれ」

「僕は鍵さんの判断に任せます。鍵さんの判断は、正しかった事は無くても、間違った事は一度も無かったですからね」

「最後の方が気になるが、まあいいや。インベイダー、これが俺達の考えだ。どうする？」

「フツ、お前達の頭が石頭でなくて助かったよ」

「そうか、よろしく！」

俺達は互いの方へと近づき、手を組んだ。するとその組んだ手が光りだし、そこから光は広がって、やがてアントインベイダーの全身を覆った。光は消え、そこに現れたのは、更なる進化を遂げて新たな姿と力を手に入れたアントインベイダーの姿があった。

「これは。」

「お前の正しい心が形となって進化したのかもな。新しい姿はなんか騎士っぽさがあるな。さしずめ『ナイトアントインベイダー』ってところか？」

「フツ、正しい心か。我々に正しかった事などひとつも無い。だからこそお前達と組むのだ、正しい事を学ぶ為にな。次に会う時はまた別の世界だ、またな」

ナイトアントインベイダー、正しき騎士の精神を持ったインベイダーが味方に着いた。去り際に見えたアントインベイダーの後ろ姿は、仮面ライダーの様にも見えた。

「ありがとう鍵君、僕達の世界を救ってくれて」

「やめてくれよ。そもそも、今回この世界を本当の意味で救ったのはあのアントインベイダー達だ」

「そうだな。人間の心を学ぶ為に強くなる、か。そういう意味で言ったら、俺にはアイツらは大分人間に見えたけどな」

「でも、その向上心こそ彼らの強きんじゃないですか？それがあつたからこそ、仲間の悪を見抜いて、正したと言っているのか分からないけど、まあ対応する事が出来ましたしね」

「だな、俺も良太郎と出会うまでは馬鹿な事を考えてたが、今じやすっかり丸くなったしよ。そうだ、おい鍵、これをやるよ」

そう言つてモモタロスの手から取り出された物は、電王のライダー・クレストが刻まれた銀色の鍵だった。

「これは！」

「君達風に言うなら、『電王ライドキー』って事なのかな？」

「初代電王の力。ありがとう、大事に使わせてもらおうよ！」

「おいアラタ、お前にはコレだ」

ゼロノスのライダー・クレストが刻まれたライドキー、『ゼロノスライドキー』だ。

「櫻井さん、いえ、ユウトさん！ありがとうございます！」

「ほら、次の世界に行きなよ。君の役目なんですよ？それ、是非役立てよ」

「ああ！それじゃ、またどこかで！」

俺とアラタはそれぞれ目的のために、次の世界へと向かった。

「ただいま〜疲れた〜」

「おかえり鍵」

「フィリップお前、途中から居なくなつてただらう！」

「僕の役目はあくまで導きだからね。帰る時はアビリティライドキーを使えば迷うことは無いだろう?」

「ま、まあ、そりやそうだけどさ。」

すると、店のキッチンの奥からこの店のマスターであるオヤジさんが出てきた。

「おう鍵、戻ってたのか。ちょうど今お前に客が来ててな」

「お客さん?どこ?」

「お前の後ろだ」

「えっ?つてうおあっ!?!」

俺が振り返って見てみるとそこにはイケメンの見知らぬ男が居た。真後ろに。超ガチ恋距離で。しかし俺はこの雰囲気を知っている。

コイツ、どこかで。」

「お前、あの時のーなんで人間の姿なんだ!?!」

「過去に記憶から力を手に入れた奴とお前は出会っているだろう。この姿では名前がないと不便なのでな、『アント』と名乗っている」

「アントインベイダーだからか?」

「安直で悪かったな」

楽しく話をする俺達をよそに、カウンターのテーブルの上には紫色の『ナイトアントインベイドキー』が輝いていた。

「ふーん?アレが世界の門番かあ。早くライドウオッチ欲しいなあ」

.....

2068：仮面ライダーオリス

《フィニッシュタイム！タイムラッシュユ！》

「でああっ!!」

「ぐああああああああっ!!!」

「ふう、いっちょ終わり！ゲートはいつもこんな面倒臭い奴らと戦ってるのか、大変だな。さて、そろそろ完成する頃かな♪」

「そろそろ半年かあ。」

と、俺がやる気なきげに呟くと、その言葉に対してフィリップが反応する。

「半年って、何がだい？」

「俺がゲートになって」

「ああ、確かに。」

「と！このブランクライドウォッチを受け取って」

俺はフィリップが発する言葉をさえぎり、ベルトの着いていない大きめのデジタル腕時計のようなものを取り出し、それをフィリップに見せる。

「ライドウォッチ？ライドウォッチと言えば、最近新たに誕生した仮面ライダー、時の魔王、仮面ライダージオウが使うキーアイテムだね。なんでそんな物が半年前に？」

「ああ、しかも俺にこのライドウォッチを渡してきたやつなんだけどさ、どう見ても劇中に登場してないんだよ。クウガとアギトみたいな感じかな？同じ世界線でも全く違う世界。」

「ふうん？ちなみにどう言った経緯でそれを渡されたんだい？」

「ん？えっと確か。」

半年前

この頃はまだジオウが誕生する直前で、俺はジオウに関してもライドウォッチに関しては無知だった。同時に、まだゲートにすらなっておらず、与えられた仕事をこなすだけのただの社会人だった。その日

はちようど真夏日で、着こなしたスーツの上着と白ワイシャツで熱気がこもり、とても暑かったのを覚えている。後になって知ったのだが、この日は今年一番の最高気温だったらしい。

「ああつちい〜」

「戸島くん、ネクタイちゃんと締めないと」

「こら戸島！ネクタイぐらいきっちり締めんか！」

「ほら！課長怒ってるよ！」

「うい〜」

暑さでエアコンがぶつ飛び、熱中症になる一步手前のこの状態で、ネクタイを緩めて我慢しながら仕事をしてたらネクタイの事を上司に怒られた事も覚えている。それくらいヤバい日だった。俺はそんな真夏日の気温の中、何とかその日の仕事を定時で終わらせた。

「それじゃお先失礼しまーす」

「お疲れー」

「戸島くん、一緒に帰ろー！」

「ああ」

（（アイツら、この真夏日だって言うのにオフィスの室内温度を更に上げる気か））

俺達は帰り道を歩き、いつも通り梓と居酒屋で寄り道していた（思えばこの頃は梓の事をまだ名前で呼んでなかったな）。夕方の七時位だっただろうか、ようやく外が涼しくなり、梓と別れた直後、ソイツと出会った。

「はあく疲れた！戸島くんお疲れ、また明日も頑張ろうね！」

「ああ、夏川も気をつけろよ」

「うん、じゃあねー！」

梓を手を振って見送り、視界から見えなくなり、俺も大人しく帰ろう、という所でソイツは現れた。

「あーお兄さんお兄さん！ちよつと良いかな？」

この時は、ただの客寄せだと思っていた。喋り方も何となくそれっぽい。だが近くにそれらしき店は見当たらない。俺はその事実には違和感を感じていた。

「なんですか？」

「ちよつとき、預かってて欲しいものがあるんだよね」

「預かってて欲しいもの？」

「うん、コレね。それ、『ライドウオッチ』って言ってさ、凄いものなんだよ。でも今は何も入ってなくて空っぽ、ブランク状態なんだ。だから、それがブランクじゃ無くなるまで持ってて欲しいんだ。近い未来、必ず必要になるからさ」

「な、なるほど」。でもなんで俺なんです？預かっどくだけなら俺じゃなくても」

「俺じゃなくても良いのでは？」と言おうとしたがその言葉は目の前の青年の言葉によつてはばまれ、ついに発することが出来なかった。

「君が持っていることに意味があるんだよ、『戸島 鍵』」

「なんで俺の名前を」

「それじゃ頼んだま！それに『力が宿ったら』取りに来るからさ！じゃあね！」

そう言うと、青年の背後に巨大なロボットが現れた。青い体とその顔が特徴的だったそのロボットの目には、白いローマ字で『R I D E R』と書かれていた。あまりの状況の変化に思考が追いついていなかった俺は、その青年の名前を聞き出すのが精一杯だった。

「ま、待て！アンタの名前は」

青いロボットのコックピットに乗り込もうとしていた青年は顔をこちらに向け、こう言った。

『オリス』、そう覚えといてよ！」

オリスという青年は今度こそロボットのコックピットに乗り込み、そのロボットを操縦して虚空へと消えた。

「俺、酔ってんのかな？平日なのに飲み過ぎたか？帰ったら即効でシャワー浴びてさっさと寝よ」

俺はこの出来事を自分の酔いのせいにし、真っ直ぐ帰宅する事にした。

「今考えれば、あの出来事は全て本当だったと理解出来る。あの口

ボット、フェイスパーツとボディの色が違っただけで間違いなく『タイムマジン』だし。」

「なるほどね、そのオリスという青年の言葉が本当なら、そろそろ現れるかもしれない、という事だね?」

「ああ。現に、こうして話している間にブランクライドウォッチの形状が変わってる」

「そうだね。しかし、これはいくらなんでも形状変化し過ぎじゃないのかい?」

「だよな。」

形状変化したソイツを握りしめ、改めてそのライドウォッチの姿を確認する。変色したライドウォッチの形状は紺色のボディをベースに、金色の新規パーツが追加されている。そしてそのウォッチ部分から大きく右に伸び出していた。このスペースにもう一つライドウォッチをセット出来そうだ。そしてウォッチ部分の中心には、大きく仮面ライダーゲートの顔が描かれている。

『ゲートライドウォッチ』、つて事か?」

「完成した。」

「今日からお前が仮面ライダーゲートだ」

その言葉と共に異形は『アナザーゲートウォッチ』を受け取り、そのスイッチを押す。闇色の瘴気が異形の全身を覆い、本来の変身者ではない者が変身する禍々しい姿、『アナザーゲート』へと変身した。

「っ!」

「どうしたフリリップ?」

「鍵、この世界に『イレギュラー』が発生した」

「インベイダーか?」

「インベイダーじゃない、『イレギュラー』だ。この世界にはあつてはならない存在だ」

「イレギュラーか。とりあえず案内頼むぞ!」

「分かってる！」

「さて、僕もそろそろ行くかな。未来を救う為に」

「よし着いた！おいそこの！お前何をやってる！」

俺はマシンゲーターで、フィリップの言う『イレギュラー』が現れた場所へと向かった。わだちが地面に思い切り残るほど力強くブレーキをかけ、マシンゲーターから降りてそのイレギュラーの元へと近づく。

「グルルルル」

「なるほど、無視か。しかしお前のその姿、ゲートに似てるな。俺の真似事か？俺の真似事なら、悪いことはしちやダメだろ？まあいい、俺が倒してやる！」

右肩のアーマーには『20XX』と書かれており、左肩のアーマーには『Gate』と書かれている。そんな奴の容姿はゲートを歪ませた様な姿で、一言で言って禍々しい。俺は奴の姿を確認し、ライドキーを一つの鍵穴に刺す。しかし、ここで一つの問題が発生する。「待て待て、なんでベルトが喋らないんだ？」

そう、いつもならばライドキーを鍵穴に刺したその時点でベルトが「Ride Change!」と元気よく喋るのだ。しかし、今回はそれが無い。

「なら、マヴェリックライドキーは！」

そう思つてベルトに刺さったゲートライドキーを引き抜き、マヴェリックライドキーを刺し替える。結果は同じだった。

「そんな」

俺はすぐさま変身できない理由を考えた。最大限に思考を巡らせた俺がこの結論に至るのにそう時間はかからなかった。

「タイムジャッカー。お前、俺のアナザーライダーか!？」

「グラアツ!!」

「マジかよ」

「鍵！君は下がっていたまえ！僕が行く！」

俺が変身出来ないという緊急事態にどこからともなくフィリップが現われ、腰にロストドライバーを巻き、サイクロンメモリを起動していた。

《Cyclone!》

「変身!」

ロストドライバーにサイクロンメモリをセットし、縦になっていたロストドライバーの稼働部分を傾け、仮面ライダーサイクロンへと変身した。そこから更に右腕に巻かれたライディングブレスにグリ斯拉イドキーをセットし、仮面ライダーサイクロン タイプグリスへとタイプチェンジした。フィリップはタイプチェンジするなりゲートのアナザールライダー、アナザールゲートへと突進攻撃を喰らわせ、アナザールゲートに問い掛ける。

「君は一体何者だい?なぜ鍵と同じ力が使える!?!」

「グラァッ!!」

と、アナザールゲートのパンチ攻撃。

「くっ。無視するとは感心しないね!」

アナザールゲートのパンチはあのタイプグリスを容易く吹き飛ばし、フィリップに大きな隙を作らせる。アナザールゲートはその隙に「ある物」を取り出し、ベルトと思われるものにそれをセットしていた。ある物、それは紫色のライドキー、つまり『インベイドキー』だ。

「嘘だろ!?!」

「インベイドキーを使うのか!」

《Invade Cross! World Gate Keeper
! Another Rider Gate! Type Nazca!》

禍々しい声で変身音声が響く。アナザールゲートの体の各所のアーマーがドロドロと溶けだし、グニャリと変形して新しい形をなす。

『アナザールゲート タイプナスカ』へと変身した。

「タイプチェンジも出来るのか!」

「これは、かなりマズいね。僕達はインベイドキーを用いたタイプチェンジに関しては無知だ。何も知らない。これは、どう対処すべきかな。」

俺達が絶賛ピンチのその時

「おつ、やってるねえ！これは僕が居なくても……いや無理か！」

「アンタ、あの時の！」

「やあ仮面ライダーゲート、半年ぶり♪と言つても、僕にとってはさつきぶりだけどね」

半年前に会ってそれ以来だったあの青年。そう、『オリス』だ。

「オリス！」

「へえ、覚えててくれたんだ、嬉しいなあ♪」

オリスと名乗る青年はかなりお気楽なテンションでアナザーゲートに近づき、奴の顔面を思い切り殴る。アナザーゲートは軽く吹き飛び、大きく地面に倒れる。

「生身でだと。」

「さつてつとつ。戸島鍵、約束は覚えてるね？半年前に君に渡したライドウオッチ、今手元にある？」

「あ、ああ、これだろ？」

俺はオリスに『ゲートライドウオッチ』を投げ渡す。

「そうコレコレ！戸島鍵、君ならもう知ってると思うけど、アナザーライダーはその年代のライダーの力でないと倒せない。僕達ライドウオッチを使うライダーは、その年代のライダーの力が入ったライドウオッチを使う事で、アナザーライダーを倒している。今回の場合はアナザーゲート、つまり君の力だ。だからこのライドウオッチ、使わせてもらうよ！」

オリスは腹にジクウドライバーを当て、それを巻き付ける。オリスはズボンのポケットからまた別のライドウオッチを取り出し、それをアクティブにする。

《オリス！》

ライドウオッチのスイッチを押すとしばらく機械音声が流れ、直後にオリスと言う。

「こっちもね」

オリスは左手に持った俺のライドウオッチ、ゲートライドウオッチのスイッチを押し、そちらもアクティブにする。

《ゲート!》

二つのライドウォッチをジクウドライバーにセットし、右手の親指でドライバ―上部分のグレーのボタンを押す。ドライバ―本体が傾き、待機音声が流れ出す。変身の構えを取って、左手でドライバ―本体を反時計回りに回転させる。

「変身!」

《Ride Time! 仮面ライダーオリス! Armer Time!
! World Gate Keeper! ゲート!》

「仮面ライダーオリス、ジクウドライバ―の最初の装着者である『Origin』にして、そのジクウドライバ―の開発をした『Special』、この二つの意味を込めてオリスだ。そして今はゲートの力も使える。『仮面ライダーオリス ゲートアーマー』って所だね♪」

「グルルルルルルルルルルルッ。ガアアアアアアアアアアッ!!!」

「おっ、怒った怒った♪」

オリスは相変わらずのお気楽だ。アナザーゲートの重そうな一撃を軽く受け流し、カウンター攻撃を喰らわせていく。

「このライドウォッチ、もう一つセット出来そうだな? やってみるか」
オリスは更に別のライドウォッチを取り出し、それをアクティブにする。金色のボディに中心に大きく描かれた仮面ライダーグリスの顔。グリスライドウォッチというところだろうか。

「んじゃあこれをセット!」

《ライドクロス! グリス!》

すると目の前にグリスアーマーが出現し、オリスがそれを蹴飛ばすとオリスに更にならから装着され、絶対零度の如き冷気を纏って同化する。グリスアーマーがゲートアーマーと同化することで進化したのだ。

「フムフムなるほど、『ゲートアーマー タイプブリザード』って感じか」

何度も首を縦に振り、一人で納得しているようだ。それをアナザーゲートは待たず、オリスにパンチを喰らわせようとする。しかし、アナザーゲートの拳がオリスのアーマーに触れた途端、アナザーゲート

の拳が凍り、全く動かなくなった。それに何故か痛がつてるようにも見える。

「あつ、言うのが遅れてゴメンね。今の僕にあんまり触れない方がいいよ、火傷するほど冷たいから」

なるほど、寒すぎて痛いのも同じ原理か。

「このライドウオッチ面白いなあ♪他には？」

開発者様はどうやらご満悦の様子。グリスライドウオッチをゲートライドウオッチから取り外し、次のライドウオッチをアクティブにした。

《エボル！》

「エボルだどうなるんだろ？」

アクティブにしたエボルライドウオッチをセットし、更にタイプチエンジする。

《ライドクロス！エボル！》

エボルアーマーが目の前に現われ、再びアーマーを蹴飛ばす。ついでにエボルアーマーのパーツの一つがアナザーゲートに直撃し、大きく吹っ飛ばす。全てのアーマーパーツがオリスに装着され、ふたたびゲートアーマーと同化する。

『ゲートアーマー タイプブラックホール』、かな？」

「自分で言うのもなんだけど、俺のライドウオッチすげえな。」

エボルアーマーは進化し、ブラックホールの力を得た。なるほど、これが俗に言う「ずっと俺のターン！」というやつか。しかしその優勢も長くは続かず、アナザーゲートが反撃しだした。

「なっ!?今のを避けたのか。」

それどころか、大ダメージを喰らってしまおうオリス。

「グウウウウウウウラアッ!!!」

「がっ、ガハアッ。」

鈍い音がここまで響いてくる。マスクの下で吐血でもしているのだろうか、液体が落下する時のぴちやぴちやという音まで聞こえてくる。

「オリス!!!」

「来ないでね！僕には、ソウゴくんを『魔王にした責任』がある。ゲイツくんを『救世主にした責任』がある。でも、僕は知ってる！ソウゴくんは、オーマジオウの未来を知った上で、最高最善の魔王になると言っている！ゲイツくんも、ソウゴくんの未来を知った上で、ソウゴくんを信じ、魔王を支える救世主になろうとしている！なら僕には、開発者として、そんな二人を支える責務がある!!!コイツは、僕一人で倒す!!!」

今のオリスの発言に、装着者^オ一号であり^リ開発者である者^スとしての覚悟が見えた。

「おふぎはここまで、本気で行くよ!!!」

「鍵、僕は彼を止めるよ」

「フリップ。でも、それはアイツの、オリスの思いを踏みにじることに！」

「分かってる！鍵、アナザーゲートの変身者が何者か分かるかい？」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味だよ。アナザーゲートの変身者は、僕達の敵、『インベイダー』だ！」

「嘘だろ。」

「このままでは、彼は死んでしまう。いくら時を超えることが出来る彼だとしても、本当の意味で未来が閉ざされてしまう！」

俺はすぐさまボンのポケットに入っていた『ナイトアントインベイドキー』を取り出し、右手の手の平の上に乗せてそれを見つめる。フリップは、俺がこれからする事を想像出来たのか、険しい表情で問いかけてくる。

「鍵、何をする気だい!？」

「相手がイレギュラーその物なら、こっちもイレギュラーを発生させればいい。」

そう言つて俺はナイトアントインベイドキーをベルトの鍵穴に刺す。

《Ride Change!》

「反応した！」

ゲートドライバーが反応したことに歓喜し、その勢いで鍵を回す。しかし何も起きない。訳も分からないままインベイドキーを何度も回す。しかしやはり反応せず、ゲートドライバーは沈黙を続ける。

「なんで、なんでだよ、今反応しただろ!?なんでここで動かねえんだよ!?頼むよゲート、俺に力を貸してくれ!アント、俺に力を貸してくれ!!頼む、今動かねえとアイツが、オリスが危ないんだよ。だから、動けええええええええええつ!!!」

強い思いを乗せて鍵を回すとついにゲートドライバーが反応し、紫がかつた黒い闇が俺の体にまとわりつく。

「グツ!?アアアアアアアアアアアアアアツ!!?」

「鍵!?クソツ、体が自由に動かない!」

体が苦しい。息が出来ない。闇に吸い込まれそうだ。気を抜けば、すぐに堕ちてしまうかもしれない。だが、こんな物がどうした。

「くっ、グウツ!!!こんな苦しみがどうしたあつ、こんな闇がどうしたあつ!!!目の前には、俺より苦しんでる奴がいる!この程度じゃ俺は折れない、こんな闇、光に変えてやる。」

やがて俺の体にまとわりついた闇は光に変わり、光が俺の体を覆う。

「ゲート、アント、ありがとう。これで俺はまた、戦える!」

紫色のインベイドキーは変色し、水色のライドキーへと変化する。俺はそのライドキーに手をかけ、それを捻る。

「オリス、今行くぞ。変身つ!!!」

《World of Guardian Knight! Kamen Rider Knight Gate!!! f o o o o o o o o o!!!》
「うるさい!」

文句を言いながらも、俺はゲートの新たな姿、『仮面ライダーナイトゲート』に変身した。見た目は大きく変わり、普段のゲートにくっつかの装甲が追加され、要所要所に走っていた金色のラインは銀色に変わり、ベルトの言う『ナイトゲート』に相応しい姿となった。

「待たせたな、オリス」

「戸島鍵、君、その姿は...そもそもどうやって変身を!」

「ナイトゲート、これが俺の新しい力だ。力をどんだけ真似ても、本質までは真似出来ない」

「なるほどね」

「オリス、コレだけはハッキリ言っておくぞ。コイツはお前一人では倒せない」

「」

「なんでか分かるか？変身者がインベイダーだからだ」

「インベイダー!?インベイダーって確か君達の・なるほど、そう来るのか」

「アナザーゲートは俺には倒せない。でも、インベイダーもお前には倒せない。だから、協力して戦おう!」

「うん、そうだね。分かった!」

さあ、『殲滅開始』だ。

アナザーゲートは「これはヤバイ」とでも思ったのか、背後に闇色の空間の穴を開き、そこから大量のハーフィンベイダーを召喚する。

「アイツらは」

「やつぱりそう来るか。そりゃ、本来変身出来ない奴が奇跡的に変身すれば焦りもするか。オリス、アイツらは『ハーフィンベイダー』だ。中途半端な存在だからハーフだ。コイツらは、リーダー格のインベイダーを倒さなければ際限なく湧き続ける。逆に言えばアナザーゲートさえ倒せばコイツらは消えるって事だ」

「なるほど、余裕だね。でも、そうなるとその間このハーフィンベイダー達を抑えといてくれる人が欲しいね?」

「それなら我々に任せろ。インベイダーの大群には、インベイダーの大群だ」

突然後ろから声が聞こえてくる。慌てて後ろを振り向くと、闇色の空間の穴が開いており、その中からウワサのアントと、その仲間が出てきた。

「えっ何、新手!?!」

「アント!来てくれたのか!」

「ああ。どうやら、我らの鍵は役に立っているようだな。我らの同胞

が一人居なくなつてな。反応を追つていくうちにお前と似た力を纏つてゐることが分かつた。まさか、アナザーライダーになつていたとはな。皆行くぞ、変身！」

「「変身！」「」」

アントと仲間達は変身の掛け声と共に、闇色の光をまとつて、文字通り人間体からアントインベイダーに変身し、アントの「突撃！」という掛け声と共にそれぞれハーフィンベイダーの大群に走つていく。

「お前達、コイツらは我々が抑えておく。お前達はアナザーライダーを倒すのだ！」

「分かつた！ありがとうアント！行こうオリス」

「うん！良い奴も居るんだね？」

「まあな。人間の心の力を学ぶ為に俺達の味方になってくれたんだとさ」

「なるほどね」

俺達はそんな言葉を交わしながらも、オリスは自身の専用武器である『ジカンクラッシュ』と、俺は『ガンブレードキー』と『ゲートガイアソード』を取り出す。オリスはジカンクラッシュのハンマーモードでアナザーゲートを何度も殴りつけ、俺はガンブレードキーとゲートガイアソードの二刀流でアナザーゲートを何度も斬りつける。俺達の怒涛の連撃でアナザーゲートはついにダウンする。オリスはジクウドライバーにセットされた二つのライドウオッチのスイッチを押して、俺はゲートドライバーにセットされた水色のライドキーを捻つて必殺技を発動する。トドメの一撃だ。

《Finish Time!》

《Ride Attack!》

「これで終わりだ！」

俺達は同時に腰をかがめ、ライダーキックの準備体制をとる。

《World! Time Rush!》

《Gate! Knight World Finish!》

ベルトの必殺技発動宣言がされたと同時に俺達は上空に飛び上がり、ライダーキックの姿勢をとる。しばらくして体の上昇が止まり、

破壊の侵略者

何も無い暗闇に一人、謎の『黒いライダー』がそこに立ち尽くしていた。!

「アナザーライダーを用いた『門番の破壊』は失敗か。チツ、あの役立たずが。しかし、『ナイトゲート』か。インベイダーとの絆の力によって生まれたインベイドキー、その中に込められた闇を光に、つまりライドキーに変えて、元から込められていた力とゲートその物の力を合わせることで生まれた力。ゲート、厄介な敵だな。だが、お前の存在はこの俺が必ず『破壊』するっ!」

「ハックシュンツ!!」

「盛大なクシャミだね、風邪かい?」

「風邪、ではないと思う。でも、寒気がしたのは事実だな、なんか殺気みたいなを感じた。」

「殺気?」

そう、殺気だ。風邪の時に感じる寒気とは別に、だ。俺に対する明確な殺意、どこにもいるとも知れないが、俺に殺意を向けて来たそいつが俺と、いや、アラタも含めて「俺達」だな。俺達と同類だというのは、直感ですぐに分かった。同類というのはつまり、『世界を越えられる』という事だ。世界を越えられると言えば、デイケイドの門矢士と、デイエンドの海東大樹が居るが、俺は知っている。士はそんな奴じゃないし、第一『通りすがりの仮面ライダー』だ。それに海東大樹に関しては、恨みを買うどころか、まだ会ってすらいらない。となると俺に殺意を向けているのは別の第三者だ。世界を越えられる第三者、俺はそいつに心当たりがあった。前に、シユンガの居る『スフィアアース』という世界に行ったことがあり、その中の一つの世界に、昔のゲートとアインと、『破壊の侵略者』による大戦に巻き込まれた世界があった。何が言いたいかって?俺が言いたいことはつまり、その第三者が、昔のゲートとアインが戦った『破壊の侵略者』ではないか、という事だ。

『世界の門番』であるゲート、そして『義賊』のアイン、二人は常に対立し、交わることは無かった。でも、一度だけ協力した事があったんだよな。ゲートとアインを気に入らない世界達が、その力を結集して造った存在。ゲートとアインの力を継ぎ、その二つの存在を破壊する為だけに作られた存在。破壊の侵略者、『仮面ライダーブレイク』。そんな、まさかな。」

「そのまさか、だよ。ゲート、これからお前を破壊する。恨むなら、ブレイクを造った多くの世界と、俺を恨め。」

「鍵、行くよ」

「行くってどこに?」

「察したまえ」

「インベイダーかあ、俺絶賛休憩中なんだけどなあ。オヤジさんのコーヒーで」

「だが、今回のインベイダーはどうも今まで通りにはいかなそうだ。かなり強力、しかも今回もまたこの世界だよ」

「へえ?どんなインベイダーなんだ一体。まあ、俺が倒すだけだ、なんの問題もない」

「ついでに新しい力も試してみてはどうだい?」

「そうだな。オリスライドキー、そしてナイトゲート。この力の見せどころだ!」

「さあ、侵略開始だ」

「ファイリップ案内ありがとう!うあつ、すごい数のハーフィンベイダー。これ過去最高じゃないか?」

「分からない。今は変身して、コイツらを片付けて、コイツらを召喚しているリーダー格を探し出すしかない!」

「分かってる!レイ、お前の力借りるぞ!変身!」

俺はズボンのポケットに手をつ突っ込み、そこから二つのライドキー

を取り出す。一つは俺がいつも使っている『ゲートライドキー』、もう一つは先日新しく手に入れた力、『オリスライドキー』だ。

《Ride Cross!》

ベルトがタイプチェンジを宣言した直後に、ゲートライドキー、オリスライドキー、順番に回し、変身する。

《World Gate Keeper! Kamen Rider Gate! Type Ori, s!》

『仮面ライダーゲート タイプオリス』だ。さて、オリスは一体どんな力を持っているのだろうか？

「まずはコイツだ、ジョーカー!」

俺は右手にジョーカーライドウォッチを出現させるイメージで、右手を敵にかざし、力を右腕に流し込む。紫色の光が右手に集結し、実体化こそしないがライドウォッチの形を形成する。紫色に光るライドウォッチの幻影のスイッチを押し、実物と同じ要領で能力を解放する。

《Joker!》

スイッチを押すとライドウォッチの幻影は、紫色の光の粒子となって四散し、俺の体に吸収されていく。光が吸収された事で俺の身体能力が強化され、それと同時にジョーカーアーマーが装着された幻影が発生する。とはいえジョーカーアーマーの幻影が発生したのは一瞬でその後すぐに消滅する。

「せいっ! はあっ!」

ジョーカーアーマーの力はやはりJoker、つまり『切り札』。全ての攻撃が一撃必殺で、それを喰らったハーフィンベイダー達は闇色の瘴気となってすぐに消滅する。

「へえ、凄いな。流石『オリス』なだけはある。じゃあこれはどうだ?」

再び先ほどと同じイメージで右腕に力を流し、右手に金色の光の粒子を発生させ、グリスライドウォッチの幻影を形成する。俺はそのスイッチを押し、力をジョーカーからグリスに切り替える。スイッチを押すとグリスライドウォッチは消滅し、再び光の粒子となって四散し、俺の体に吸収される。吸収された事で今度はグリスアーマーが装

着されたような幻影が発生する。ついでに新しい武器も装着された。「ツインブレイカーブレイカー、なのかな？しかも二刀流だ！」

オリスがグリスアーマー装着時に使用するその武器は、本家のグリスが使っていたような二刀流となり、俺の拳に装着される。しかし通常のツインブレイカーブレイカーとは少し異なり、本体の左右に取り付けられた銃口と銃口の間、その中心から黄金色の刀身が延び、『本家』と一番異なり、かつ、『元祖』にもっとも近い形状となっている。それと全く同じものが左右の拳に取り付けられており、それぞれフルボトルとライドキーがセット出来るようなスペースが設けられていた。「うーん、レイの奴こんなの使ってたか？アレか？タイプブリザードの時に使ってたアレか？だとしても大分形状変わってるぞコレ。ええつと、ライドキーをセット出来る場所がそれぞれ一つ、フルボトルをセット出来る場所がそれぞれ一つ、か。こりゃあ本家のグリスにかなり近い武器だな、まあいい。『心火を燃やして殲滅する』！」

俺はツインブレイカーブレイカーX（とりあえずの名前）を使って速やかにハーフィンベイダーを殲滅していった。この武器の性能が高かったからか、それとも元々敵の数が少なかったからか、ハーフィンベイダーは五分と経たずに全滅し、その場に立っているのははいよいよ俺だけとなる。俺がハーフィンベイダーを殲滅した事を確認し、辺りを見回していると、突然謎の『ライダー』が俺の後ろから歩み寄ってきた。

「流石は『世界の門番』って事か、そう簡単には破壊されてはくれないみたいだな？」

「破壊だと？一体何を言ってるお前、その姿は」

後ろから歩いてきたソイツに振り返ってその姿を確認する。振り返り、俺の目の前に居たのは、『黒いゲート』だった。

「黒い、ゲート」

「それだけか？他にもっとあるだろう？例えばさ、『この状況を引き起こしたのは誰か』とかさ」

「まさかお前が!?でも、ライダーが一体どうやって？インベイダーはその名の通り侵略者。っ！お前！」

「どうやら辿り着いたようだな？ 正解♪俺が破壊の侵略者、『仮面ライダーブレイク』。ゲートと対をなし、ゲートとアインを破壊する為だけに作られた存在だ。だが、そんな世界達の勝手な都合で扱き使われるなんてゴメンだ。俺の存在理由はただ一つ、復讐だ。仮面ライダーゲート、お前を破壊する事だ！」

俺はここまで聞いて逆に冷静になる。今はどつちかと言うと怒りの感情の方が強いのだが、何故か心底冷静だ。

「大体お前の言い分は分かったよでも、この世界を巻き込むのは違うだろ？」

「では、お前一人が、仮面ライダーゲートが誕生する為に、他の世界を巻き込むのも違うだろう？」

今ブレイクとかいう奴はなんと言った？「ゲートが誕生する為に他の世界を巻き込む」と聞こえた。

「おい、ブレイクって言ったか？お前それはどういう意味だ！」

「そのままの意味だ。お前が誕生する際、世界はお前の持つその力を恐れてインベイダーを生み出した。元々、自分の身可愛さに生み出した、自分達を守らせるために造った存在なのにも関わらず、だ。ゲートを恐れた世界達は、ゲートの強力な力を奪って、自分のモノにしようと考えた。そしてアインを生み出した、ゲートの力を奪い盗る為にな。しかし、生み出されたアインは従う事を嫌い、生みの親である世界の前からその姿を消した。アインは何度かゲートと対立し、やがて好敵手と言うに相応しい実力となった。これは、世界が恐れるわけだ。元々ゲートだけでも強力な力を持っていたのに、そんな奴がもう一人増えるわけだからな。そんな二人を恐れた世界は、ゲートとアインを破壊する為だけの存在、『世界の侵略者』を生み出した。二人とも「これはまずい、対立してる場合ではない」と考え、手を組んで侵略者に対立し、そして身を呈して『封印』した。しかし、その時点で残されていた力はほんの僅か。二人は未来で侵略者が再び復活するのを予期し、自分の命と引き換えに、魂を自分達の力の源となるベルトに封印し、後世の人間に自分達の思いを託した。それが今のお前達だ。侵略者は二人の予期した通り現代に復活し、再びその姿を現した。そ

れが今ここに居る俺、仮面ライダーブレイクだ」

そう言うのとブレイクは見た事のないライドキーを取り出し、自身のベルトにセットする。ブレイクの使うベルトは、ゲートと同じ『ゲートドライバー』だが、俺が装着するオリジナルのゲートドライバーとは決定的に違う。オリジナルが、紺の素体に金と銀の装飾があるのに対し、ブレイクのゲートドライバーは、黒をベースに金と紫色の装飾が施されている。オリジナルの完全な色違いだ。ブレイクは黒いゲートドライバーの二つ目の鍵穴にライドキーを刺し込む。

《Ride Cross!》

「グレードアップ!」

ブレイクは黒いゲートドライバーに手をかけ、元々刺さっていたライドキーと新しく刺し込んだライドキーを回す。

《Invader of Destroy! Kamen Rider Break! Type Eternally!》

ブレイクの黒いボディがうって変わり、所々で元の姿の意匠が残っているのに対し、ほぼ全てのアーマーが白く変色していく。

「仮面ライダーブレイク、タイプエターナルだ」

(そう来たか。仮面ライダーエターナルの力、かなり厄介だな。ならこっちは。)

俺はベルトに刺さった二つのライドキーを引き抜き、新たなライドキーに刺し換える。ナイトゲートライドキーと、Wライドキーだ。刺した二つのライドキーを回し、自身の強化とタイプチェンジを行なう。

「グレードアップ!」

《World of Guardian Knight! Kamen Rider Knight Gate!!! Type W!!!》

俺は「仮面ライダーナイトゲート タイプW」へと変身する。しかし、いつもと違う点がある。いつもは右半分ライトグリーン、左半分ブラック、というまさにWの代名詞であるサイクロンジョーカーの特徴が強い姿なのだが、今回は右半分ホワイト、左半分ブラック、所々に飾られた刺々しいブレードがあり、ファングジョーカーの特徴が強

い姿となっている。今の自分の力を試すべく虚空を殴ったり蹴ったり、『アームファンング』や『シヨルダーファンング』を出してみたりする。なるほど、どうやらゲートの強化に合わせ、ライドクロスのパフォーマンスも強化されているらしい。

「侵略再開！」

「殲滅再開！」

俺はブレイクに向かって、ブレイクは俺に向かって走り出し、再び衝突する。俺たち自身の力が強すぎるせいか、互いに互いの攻撃で吹き飛び、大きな隙を作る。俺はこの隙を利用してゲートガイアメモリを取り出し、ゲートガイアソードを召喚する。

《ゲート！》

「そう来るか、ならこちらも。」

ブレイクは右腰から謎の黒いガイアメモリを取り出し、そのスイッチを押す。

《ブレイク！》

スイッチを押されたことで黒いガイアメモリが起動し、虚空から黒い剣が出現する。出現したその黒い剣の姿は、まさにゲートガイアソードそのものだった。

「ゲートガイアソード!?なんでお前が！」

「お前風に言うなら、『ブレイクガイアソード』って所か？」

ブレイクは元から持っていた黒いガンブレードキート、ブレイクガイアソードをそれぞれ両手に持ち、二刀流のスタイルとなる。

「おいおい、それ俺の戦闘スタイルだぞ！」

「ふんっ」

再び衝突し、それぞれの剣を振り、火花を散らす。何度も剣を打ち合うと互いの剣と剣が衝突し、冷戦状態となる。俺はこの機会にある事を聞いた。

「おいブレイク、お前さっき俺が誕生する為に、他の世界を巻き込んだって言ってたろ？アレどういう意味だ？」

「まんまの意味だよ。ゲートの誕生を防ぐためにゲートを気に入らない世界が、他を巻き込んで多くの世界にインベイダーを出現させた！」

そのせいで巻き込まれた世界の四分の一は滅びたよ。俺はその巻き込まれた世界に住んでいた人間の一人だ！」

待て、その話が本当なら

「あの時のインベイダーの大量発生は、ゲートが誕生したから俺達の敵であるインベイダーは、世界が生み出したもの。敵は、世界そのもの。」

「どうした？自分が散々守ってきた世界が黒幕だと知らされてシヨックか？」

ブレイクは剣に力を込めて俺を振り払い、思い切り突き飛ばす。

「いや、そうじゃない。そうか、俺が気に入らないのか。愚かな世界達は『まだ』そんな事を続けているのか。」

「何？」

ブレイクのこの発言からか、俺にスイッチが入る。膝をついていた地面から、再び剣を握り、立ち上がる。俺の中に眠っていた誰かが。

『今のゲート』はまだ若いな、情熱的なのは良い事だが。新しい力もあるようだ」

「お前、誰だよ？」

様子が変わり、まるで別人のようになった俺に対してそんな質問をするブレイク。人格が変わったのは俺自身も自覚している。俺の中のもう一人はガンブレードキーとゲートガイアソードを握り、ブレイクに対立する。

「さあ、誰だろうな」

そう言うと俺は俺の体を操り、反撃に出る。奴がゲートとして戦いを始めた途端、先程まで互いに五分と五分だった戦いがうって変わり、奴が一方的に押し、ブレイクが防戦一方となっていた。奴の圧倒的な強さと戦い方、この動きは戦い慣れている奴でないと出来ない芸当だ。瞬時に戦況把握をし、状況に応じて動きを変える。こいつ、一体何者だ？などと考えている間にブレイクが地面に伏し、奴にガンブレードキーを首元に突きつけられる。チェックメイトだ。

「俺達を気に入らない世界が、ゲートとアインを破壊する為に作った存在がブレイク、その通りだ。ゲートとアインはブレイクを危惧し、

封印した。そして自分達も。三つの存在は復活し、現代にいる。現代において、もし『君』の世界が破壊されたというのが事実なら、それは俺の、いや、『私』のせいだ、本当に済まない。だが、だからこそ、このまま退いて欲しい」

「もう一度聞くぞ、お前誰だよ？」

ブレイクの問いかけに対し、少しの間をあげ、奴は答える。

「私は、仮面ライダーゲート。『世界の門番』だ」

「それは今なるほど、そういう事か。どうりで勝てない訳だよ」

「今のゲートに罪は無い。恨むなら、この世界に生まれた私を恨んでくれ」

「絶対に倒す。お前も、今のゲートもだ」

「私に挑戦するなら、今のゲートに勝つ事だ。今のままでは、負ける事は無いだろうが、勝つ事も出来ないぞ」

「ふんっ」

ブレイクは奴に背を向け、闇色の空間を開いてその中に消えた。奴もベルトのライドキーに手をかけ、変身解除の準備をする。

「さて、年寄りには年寄りらしく大人しくして、若者に未来を託さなければな。すまないな、少々出しやばりすぎた」

二つのライドキーを引き抜き、変身を解く。変身を解くと人格は元に戻り、『戸島 鍵』となる。

「なんだったんだ今のは」

今回の出来事をきっかけに、俺はしばらく苦悩するようになった。

異世界の魔法使いと白竜の使い魔

「なるほど、アンタらの言うそのインベイダーって奴を追っかけて、ここまで来たんだな?」

「ああ、何でも良い、何か心当たりはないか?」

俺達は今、休息も兼ねてやって来た、「音ノ木坂戦乱学院」で出会った少年少女達に話を聞いていた。出会った経緯は、「てんね」という少女が実験で失敗して爆発が起き、俺達がそれに気づいてかけつけた、という事からだ。

「いやあゴメンねお兄さん達、なんか心配かけたみたいで」

「全くだよ。で? シヨンって言ったか? お前は前に会ったことあるよな?」

「えっ、何? シヨンの知り合い?」

「知り合いつて言うか、本当に一度会った事がある程度だけだな」

「ああ。前にスファイアアースでの大戦があった時以来ですね」

「お? お前の性格からしてシユンガと同じタイプだと思ったけど、そうでも無いみたいだな?」

「異世界のとはいえ、一応人生の先輩なんで」

先輩、先輩かあ。

「ちよつ、ちよつと鍵さん!? 何泣いてるんですか!?!」

「あーゴメン、今まで先輩なんて呼ばれた事一度もなかったからさ。生きてて良かった。」

「ちよつと鍵くん、いくら職場で仕事の後輩に先輩って呼ばれたことがなかったからって、さすがに泣かないでしょ?」

「うっせー!」

なんて話をしていると、何がおかしかったのか、突然「カチナ」という少女が大声で笑いだす。

「うふふふつ、あつはははははは!」

「うおつ、カチナ!?!」

「いやーゴメン、この人たちのやり取り、見てて面白いんだもん! なんか、この人たちの何気ない日常会話が私的にツボっちゃってさ、はあ

「お腹痛いw」

カチナの笑いにつられてか、周りのみんなも笑いだす。

「おいカチナやめろ、俺まで何だか笑いが込み上げて来たじゃねえか
wwwお前らもやめろwww」

「だ、だって、カチナが笑うんだもんwww」

「おいカチナ、お前笑いすぎだwww」

「だって、ははははっ！」

いつまでも笑ってるコイツらに俺は痺れを切らし、ため息を一つ
く。

「はあ、お前らなあ。なあ、インベイダーの居場所は分かってるんだ
ろ？俺とアラタでこれからそこに向かう。梓の事は頼んでもいいか
？お前らそこそこ力を持っているみたいだし安心だ」

「えっ、これから!?でも」

「お願いします。早く片付けないと大変な事になるんです。あなた達
の世界の、その、オーバーメガ?の力を吸収した事で通常のインベイ
ダーの何倍も強くなってる。早くしないと取り返しがつかなくなる
！お願いします！」

俺とアラタで真面目な話をすると笑い声も止み、シヨンがため息を
ついて前が出る。

「ふう。分かった、そのインベイダーとやらの場所までは俺が案内
する。ついてきてくれ」

そう言うときシヨンはそこから歩きだし、実験室を出ていく。俺とア
ラタもそれについて行く。

「それじゃあ皆、梓の事を頼んだ」

「はいー！」

「任せてー！」

「早く行った行った！」

シヨンは学園の校門を出たところで立ち止まり、空を見上げて声を
張って叫ぶ。

「レシラム！」

名前か何かだろうか？それを叫ぶと突風が巻き起こり、白い巨体が空から舞い降りてくる。

「うおっ！なんだ!？」

「風が！つ！鍵さん、あれ!！」

「あれは!！」

やがてその巨体は俺達の目の前に着地し、その姿を現す。

「呼んだかシヨン?！」

「なんか来た!！」

「白竜?!！」

案内するだけなのに流石にこんなのが来るとは思わず、俺とアラタは息を飲み、目を丸くしてそいつの蒼い眼を見る。そいつの眼には太陽に似た暖かさが込められており、そして聖母に似た優しさまで感じた。しかし何故だろう、俺はこの竜を初めて見るはずなのに既視感を感じる。

「シヨン、この者達は?！」

「異世界の人間だよ。どうやらシユンガの知り合いらしい」

「なるほどな。インベイダー関係という事か?！」

「お前なんで知ってんだよ。まあ、そういう事。扉が出た場所だ、頼んだぜ相棒」

「ああ」

「ほら、二人とも乗れよ。コイツかなりのスピードと火力だから、振り落とされたり火傷したりしないようにしてくれよ?！」

「あ、ああ」

つてか乗れるのか!?!なんて事を考えながら白竜の背中に乗ると、既視感の正体がようやく分かった。コイツはポケモンだ、伝説の。まだ中学生の頃、必死になって遊びまくっていたシリーズに出て来たのを覚えている。名前こそ忘れたが、俺はコイツを手持ちとして使っていた。

「それじゃあ頼むぜ」

「では行くぞ。シヨンはともかく、客人の二人は怪我をしないよう気をつけてくれ」

「おい、俺はともかくってどういう事だ！」

どうやらかなり仲がいいらしい。互いに冗談を言い合えている。と、そんな漫才にも似た受け答えを見ていると

「着いたぞ」

どうやら目的地に到着したらしく、白竜は地面に着地していた。尾の部分を見ると、白竜の尾はバーニアのようになっており、高速移動に特化したフォルムとなっているのが確認できる。

「さて、着いた訳だけど、二人が探してるのってコイツであってるか？」

シヨンが親指で指した先にいたそいつは、紫がかった闇色の瘴気をまとい、元々黒い体が更に黒くなり、知能のないハーフィンベイダーとは思えない力を発していた。

「ああ、アイツだ」

「鍵さん、あれ本当にハーフィンベイダーですか？」

「分からない。ただ、アイツがオーバーメガとやらの力を吸収した事で並のリーダークラスのインベイダーと同等か、それ以上の力を手に入れてるのはまず間違いない」

「な、なあ、二人はさっきから」

「シヨンは下がってる！アイツは俺達の敵だ、責任をもって世界を守ってやる。アラタ行くぞ！」

「はい、鍵さん！アイン行くよ！」

「二変身！」

《World gate keeper! Kamen Rider Gate! f o o o o!》

《World treasure hunter! Kamen Rider Ine! f u h a h a h a h a h a!》

「殲滅開始！」

「貴方の運命を頂戴する！」

俺達はそれぞれゲートとアインに変身し、オーバーメガの力を吸収したハーフィンベイダー、「メガインベイダー」に向かって走り出す。メガインベイダーはハーフィンベイダーとは思えないほどの力を

持っており、二人がかりでもかなり厳しい状況だ。通常のハーフィンベイダーなら、ガンブレードキーのブレードモードで一発なのだが、何度切りつけても倒れない。ガンブレードツヴァイも同様だ。ガンブレードツヴァイは、アインがゲートから盗った「ガンブレードキーの戦闘データ」を元に作った武器でしかない。つまりコピーだ。俺のガンブレードキーで倒せないのだから、同スペックのツヴァイで倒せないのも当たり前だ。つまり何が言いたいかって？

コイツクソ硬え。

「あーもうなんだよコイツ！普通のハーフィンベイダーみたいに行かないのは分かってたけど、いくらなんでも硬すぎだろ！こちとら金属殴ってるんじゃないんだよ！」

「まあ鍵さん落ち着いて。でも、確かにコイツの硬さは異常ですね、これもオーバーメガの力？」

「にしたつて硬すぎだつて。」

「ですね。鍵さん、パワー系の力で攻めてみましょう。幾分マシンはなるかもしれない。」

「そうだな。パワー系ならコレとコレだな」

「僕も行きます」

俺はゲートライドキーを引き抜き、ナイトゲートライドキーとビルドライドキーに刺し換える。アラタもアインライドキーを引き抜き、透明感のある虹色のライドキーとクローズライドキーに刺し換える。

「アラタお前、そのライドキーは。」

「鍵さんが必死に世界を守ってる間、僕にも色々あつたんですよ」

「なるほどな。それじゃあ。」

「グレードアップ！」

《World of Guardian Knight!!! Kamen Rider Knight Gate!!! Type Build!!!》
《World of Masked Thief!!! Kamen Rider Masquerade Ine!!! Type Cross—Z!!!》

俺達はそれぞれ新たな姿に変身する。俺は、ビルドの『ラビットラ

ビットフォーム』と『タンクタンクフォーム』の要素を足して二で割ったような姿に。アラタは、クローズの『クローズマグマ』のような姿に変身した。

「それがお前の新しい力か」

「はい。『マスカレードアイン』、仮面アイシの力じゃない、本当の意味での僕の力です！」

「なるほどな。仮面を取って、本当の自分カをさらけ出して戦うアイン、マスカレードアインか。その力、頼りにするぞ」

「任せてください！」

俺は虚空から「フルボトルバスター」を取り出し、アラタは拳に炎をまとう。それぞれ戦闘態勢に入り、再びメガインベイダーに攻撃を開始する。相変わらず硬いが、さつきよりは攻撃が通ってる。アラタの提案のおかげで戦闘が楽になり、時間はかかったがこちらが有利な状況となった。やがてあと一撃で奴を倒せる状況となり、ダウンまで追いつめる。トドメだ。俺達はそれぞれベルトに刺されたライドキー二つを回し、必殺技の構えをとる。

《Knight Gate!! Build!! Hazard World

Finish!!!》

《Masquerade Ine!! Cross—Z!! Volcanic World Finish!!!》

「決めるぞアラタ！」

「はいー」

「二でああああああああああつ!!!」

上空に舞い上がり、ライダーキツクの姿勢をとる。ライダーキツクがメガインベイダーに命中し、二人同時に着地したところで、俺達の背後で爆発が起きた。

「よー」

しかし、奴はまだ倒れていなかった。正確には効いていなかったのだ。ゲームで例えるなら、そうだな、HPが残り1になったけどそれ以降無敵状態になって全く倒せない、というのが今の状態だ。

「鍵さん、まだです！」

「なあアラタ、アイツ、ダメージ受けてなくね？」

「ですね。これはかなりまずいですね。」

メガインベイダーに手こずっている俺達を他所に、後ろで俺たちの戦闘をずっと見ていたシオンが歩み寄ってくる。

「なつてないなあ二人とも、これじゃあシユンガの方が強いんじゃないか？」

「そりゃあ、専門的に倒してる奴らが違うからな」

「それもそうか。なら、俺が戦い方を教えてやるよ。来い、『レシラム』！」

そう言うときシオンはズボンのポケットから謎のメダルと宝石のような物を取り出し、腕に装着された大きめのデバイスにセットする。

《フレアクリスタル！ギア・ON！》

「ブレイブ、ON！」

《フレア！レシラム！》

デバイスからハイテンシオンな声で機械音声が流れる。シオンの頭上にレシラムと呼ばれた白竜が現れ、光に包まれる。やがて光の粒子となって四散し、シオンの体にまわり、姿が変化する。今のシオンの姿は、白竜を鎧としてまとったような姿だ。

「変身した!？」

「でもベルトを！」

!?

「平成ライダーには、ベルトを使わずに変身できるライダーなんていくらでも存在する！もしかしてアイツも。」

「ライダー、か。中々良いねその響き。でも違うぞ、俺はライダーじゃない。『魔法使い』だ！」

そう言うときシオンは両手に持った白い剣をドッキングさせ、なぎなた薙刀のような状態にした。

「葉の方ばかり引つ張っても意味は無い、根っから引っこ抜かないとな。雑草と同じだよ！表面ばかりダメージを与えても、意味は無い！」

シオンがメガインベイダーを攻撃し出すと、さっきまでの不利な状況は嘘のようにひっくり返り、こちらが押している。シオンの武器の

刃がメガインベイダーの体を貫通し、直接コアとなる部分を攻撃しているのが分かる。

「なるほどな。俺達も。」

そう思つて俺は左腰からウエポンライドキーを取り出し、ガンブレードキーにセットしてそれを回す。

《Ride Weapon! Ride Jet Dragon!》

「はあ? ジェット? ドラゴン?」

何を言い出すんだこの剣は、ウエポンなのにドラゴンなんて呼んでどうするんだ。なんて考えてると、後ろの上空から変な音が聞こえてきた。ジェット機が飛行中に出すような、キーンという嫌な音だ。

「ま、まさか、ジェットつて。」

上空に、純白ボディの戦闘機が飛んでいた。

「いやいや、これ武器というより兵器では!」

「け、鍵さん!? 何したんですか!」

「いや俺も分かんねーよ! なんで武器呼ぼうとしたのに兵器が来るんだよ!」

なんて喚わめいていると、今度はマシンゲーターにエンジンがかかり、ひとりで動き出す。

「あつ、ちよつ、待てコラー!」

勝手に動き出したマシンゲーターを追いかけ、やつとの思いで捕まえる。俺は無理矢理にでも操縦すべくマシンゲーターに跨る。しかしマシンゲーターの暴走は止まらず、何故か召喚された白い兵器に向かって大ジャンプする。

「待って! 事故る事故る! 事故るつて! アアアアアアアアアアツ!!!」

やがて白い兵器とマシンゲーターは衝突し、大爆発を起こす。と思いきやそんなものは一向に起きなかった。恐る恐る瞑つむっていた目を開いて見ると

「ライドジェットドラゴンつて、こういう事かよ。」

《ガアアアアアアアアアアアツ!!!》

マシンゲーターがその兵器とドッキングし、機械仕掛けの白いドラ

ゴンに変形していた。

「ド、ドラゴン。」

「えっ、レシラム!?でもレシラムは...えっ!?」

「まあ良いか。シヨン、そこどけく。巻き込まれるぞく」

「お、おう。」

「よーし、じゃあドラゴン、撃てえっ!!!」

ドラゴンの口から紅い炎弾が放たれ、メガインベイダーに直撃する。灼熱の炎はメガインベイダーの体を燃やし、消滅させ、中のコアを溶かしていく。コアは溶けきり、ついにメガインベイダーを倒すことが出来た。

「結局俺良いところ見せれなかつたよ、ほとんど。」

「まあまあ。でも、お前のあの動きが無きゃアイツは倒せなかつた。感謝してる。ありがとうな」

「でもアレは規格外ですよ!まさか兵器が出てくるなんて。」

「まあ確かに。多分レシラムの力だろうな。姿も力も似ていたし。レシラムの力、存分に使ってくれ」

「ああ。さて、梓迎えに行つてそろそろ帰るか」

「そうですね!じゃあねシヨン君!」

「ああ!」

俺達はシヨンに別れの言葉を交わし、我らが姫様を迎えに行つて自分達の世界へ帰つた。

鏡の世界

俺は今絶賛旅行中だ。フィリップの導きのもとに。前に体を「もう一人の自分」に操られ、それを引きずっている俺を見て、アラタが「少し休みましょう」と言ったことからだ。アラタの提案を飲んで、しばらくゲートとしての活動を休止することにした。今はゲートドライバーも無い。次はどこ、今は何、と言った焦りに縛られること無く様々な世界を渡り歩いている。まあ、万が一のためにゲートメモリだけは持ち歩いているが、満喫しきっている俺はそんな事はとうに忘れていた。

「こういうのも意外と良いな」

なんて言いながら歩いていると、道端に、カードケースのような黒い何かを発見した。それには竜の顔を模したマークが飾られており、それは金色に輝いている。

「龍騎のカードデッキ。玩具、じゃないよな、玩具にしては質感が良すぎるし、それに重い。玩具じゃありえない金属音もするし、この世界の年代からしても、玩具が発売されてる年でも無さそうだし。ここ龍騎の世界なのか？」

悩みに悩んだ末に俺はそのカードデッキを拾い上げ、それをズボンのポケットにしまう。

「交番に届けるか？いや、警察に任せていい代物でも無いか。どうしようかこれ。」

すると突然、交差点に設置されたカーブミラーから異形の生物が飛び出してきた。所謂ミラーモンスターという奴だ。

「えっ、モンスター!?待って、俺今変身出来ねえぞ！」

そう、変身出来ないのだ。ゲートドライバーがないから。俺は変身出来なければただの人間で何も出来ないのだ。仕方なく逃げる事にし、全速力で走る。しかしモンスターも餌の俺を逃がすまいと全力で追いかけてくる。

「来んな！」

「グギャアッ！」

「来んなって！」

「ガギイツー！」

このままでは埒が明かない。俺はこの拾ったカードデッキが本物である事にかけて、近くに停車している車のサイドミラーにカードデッキをかざす。するとミラーワールドで戦うライダー達の共通のベルト、「Vバツクル」が現れ、俺の腰に巻かれる。

「マジか！ ったく、この世界は俺を休ませる気は無いのか？ 別のライダーになつてまで戦えと？」

文句を言つても仕方ない。目の前にはモンスター、自分を喰らわんとする化け物が居る。ここで俺が逃げ切ったところでまた誰かを襲うかもしれない。なら俺がすべき事はただ一つ。

「一か八かだ、変身！」

俺は右腕を左上に真っ直ぐ伸ばし、Vバツクルにカードデッキをセットする。鏡に映された龍騎の姿が前後左右の四方向から迫り、俺は「仮面ライダー龍騎」に変身する。

「本当に変身しちゃったよ。まあ、ゲートに変身出来る時点で今更だけど。」

なんで言つてると幼い頃の記憶がよみがえる。今は亡き両親との大切な思い出だ。

『パパ！ ママ！ 僕ね、大きくなったらりゅーきになつて、わるいやつをやっつけて、みんなをまもる仮面ライダーになるんだ！』

『そうかそうか、なれると良いな！』

『ええ、鍵ならきつとなれるわ』

『うん！』

龍騎になつて、悪い奴をやっつけて皆を守る仮面ライダーになる、か。ゲートになつた時点で「悪い奴をやっつけて皆を守る仮面ライダーになる」って夢は叶ってたけど、龍騎にはなれなかったからなあ。また一つ、ガキの頃の夢が叶ったな。父さん、母さん、見てるか？ 俺、物心つく前に別れたからもう二人の顔思い出せないけどさ、二人に

言った夢、叶ったよ。だからさ、見守っててよ。

「っしやあつー！」

自身の胸の前で右手で拳を作り、変身した時のポーズをする。俺はモンスターの胸ぐらを掴み、車のフロントガラスに向かって投げつける。モンスターはフロントガラスに吸い込まれ、ミラーワールドに戻っていく。俺も戻って行ったモンスターを追うために、自らミラーワールドに飛び込んでいく。ミラーワールドに行くまでの道のりは、鏡と鏡が光を反射しあって目がチカチカする。だがそんな事は気にもとめず、ただひたすらモンスターを追いかける。ミラーワールドに到着してようやく追いつき、モンスターとの戦闘を始める。

「う、ううつ、ここは。」

俺は城戸真司、仮面ライダー龍騎だ。俺はある人をモンスターから守るために身を投げ出し、そして死んだ。はずだ。どういう訳かどう見ても目で捉えたこの体は生きていた頃の俺の体そのもので、異常はどこにも見られなかった。

「死んだ、よな、俺。」

おかしい。何がおかしいって？色々。俺は身体が本物かどうか確かめるために、近くに停車してあった車のフロントガラスを覗く。ガラスに映っていたのは確かに俺だが、俺の背後に、もう二つ別の存在が映っていた。振り返るとそこには何も存在せず、ただガラスに映っているだけということが分かる。

「ミラーワールド!?それにアレ、俺のカードデッキ、だよな?なんで他の奴が。」

とは言っても今の俺にはどうする事も出来ず、ただこの戦いを見守る事しか出来なかった。

「そろそろ、色々試してみたいよな。まずはコレだ！」

俺は左腕の『ドラグバイザー』を展開し、Vバックルにセットされたカードデッキからカードを引き、それをドラグバイザーにセットし、元の形状に戻す。

《SWORDVENT》

ドラグバイザーの目が黄色く発光し、機械音声でソードベントと宣言する。すると上空から、赤竜の尾の部分にあたる赤い曲刀が俺に向かって降ってくる。俺はそれをキャッチし、右手に持って構える。

「キャッチ出来る前提で設定されてんのかな？キャッチ出来なくて頭を切ったらどうすんだよ、でも大丈夫なように作られてんのか？」

などと言いながら考えているとモンスターは待ってはくれず、俺に襲いかかる。俺は曲刀で応戦するが、やはりなれない。ゲートメモリを取り出し、ゲートガイアソードを召喚して二刀流で戦うことにした。

《Gate!》

目の前に掴めと言わんばかりにゲートガイアソードが出現し、俺はそれを左手で掴みとる。いつもとは違うが、二刀流の完成だ。

「ふうっ。なれないけど、やっぱコレだよな。メモリだけは持ってきたという良かった」

両手に二本の剣を持ち、再び攻撃を開始する。いつもの戦闘スタイルになったおかげでいくらかは戦いやすくなり、龍騎の力にもそろそろ慣れてきた。何回かモンスターを切りつけたところで曲刀とゲートガイアソードを後ろに投げ捨て、次のカードを引く。再びドラグバイザーを展開し、カードをセットする。

《GUARDVENT》

今度は赤竜の腹の部分にあたる赤い盾が飛来し、右腕に装着される。

「ガードベントは確か、盾としてだけじゃなくて突進攻撃なんかにも使ってたよな。よし、行ってみよう！」

右腕に装着された赤い盾を前面に構え、突進していく。俺の突進攻撃はモンスターに当たり、モンスターは後ろに大きく吹き飛ばされる。モンスターも仕返しと言わんばかりに拳で攻撃してくるが、それを盾で防いで軽く受け流しつつ、隙あらば攻撃していく。

「ふむふむなるほどな、だんだん慣れてきたぞ。じゃあ次はコレだー！赤い盾が装着されたままの状態で次なるカードを引き、ドラグバイ

ザーを展開してそれをセットする。

《STRIKEVENT》

赤い盾は消滅し、代わりに赤竜の頭部に当たる赤い大砲が右手に装着される。

「おお、まんまドラグレッダーの顔だ。んじや、喰らつとけ！」

砲身にエネルギーを収束し、モンスターに狙いを定めて放つ。流石にこれには命の危機を感じたのか、新たな姿に変身し、巨大化する事でそれを防いだ。

「おいおい、本家龍騎にはこんな変身とか巨大化する設定なんてなかっただろ。仕方ない、ならこれで！」

《ADVENT》

何も無い場所に空間の歪みが発生し、そこから龍騎の契約モンスター、『ドラグレッダー』がその姿を見せる。ドラグレッダーは何故か不機嫌そうに喉を鳴らしながら俺の周りを飛び回り、その鋭い眼光で俺の瞳を睨みつける。

「グルルルルルルルルルルッ！」

「おお、本物のドラグレッダーだあ。って、な、なんだよ。そんな怖い目で睨んでくんناよ、どうした？なんでそんなに分かった。お前の契約者じゃないからだろ？」

ドラグレッダーは「当たり前だ」とでも言うようにその大きな首を縦に振り、さらに警戒心を高めながら俺を睨みつける。

「悪かった悪かったって！俺が悪かったから許してくれよ！いや、このカードデッキ、偶然拾っただけなんだ。そしたらあのモンスターが出てきて俺を襲って来たんだよ。本当は自分のベルトがあるけど、今は無いしな。しようがないから勝手にこのカードデッキを拝借したって訳だ。あのまま逃げ切ってもよかったんだけど、そしたらまた別の誰かが犠牲になりかねない。それに、ガキの頃になりたかった龍騎に変身できるんだぜ！このチャンスを逃す手はないだろ！」

「今回だけだぞ」という意思表示なのか、ドラグレッダーは鼻を切らし、巨大化したモンスターに向かっていく。ドラグレッダーは自分の尾に着いた刀身で切り刻んだり、突進攻撃をしたり、火を噴いたりし

て確実にモンスターにダメージを与えていく。その一撃、一撃はとても重く、雑魚のモンスターを一撃必殺するには十分な威力だった。ついにドラグレッツダーはモンスターをダウンさせ、変身解除、巨大化解除まで追い詰める。

「ナイスだドラグレッツダー！よし、トドメ行くぞー！一緒に頼む！」

俺はカードデッキに残された最後のカード、「ファイナルベント」を引き、左腕のバイザーにセットする。トドメの一撃だ。

《FINAL EVENT》

俺は左腕のバイザーを頭に両腕で竜のポーズをしてパワーを溜める。ドラグレッツダーが俺の周りを飛び回り、俺はその中を真っ直ぐに、一直線に、真上に飛ぶ。何度か回転しながら大ジャンプし、ドラグレッツダーが俺の背後に来たところで火を噴く。『ドラゴンライダーキック』だ。

「であああああああああああつ!!!」

ドラゴンライダーキックは見事モンスターに命中し、大爆発を起こしてモンスターを消滅させた。俺はカードデッキを外し、変身を解除した。

「ふう。いやあくやっぱ良いな龍騎。カッコイいわ。ありがとうなドラグレッツダー偽者の俺に付き合ってくれてさ」

ドラグレッツダーはなんの反応も見せずに俺の顔を見つめ、そして虚空へと消えていった。ドラグレッツダーが去り際に見せた顔は、笑っているようにも見えた。

「ああ〜疲れた！やっぱ慣れないな龍騎は」

「なあ、アンタ！アンタ、そのカードデッキで変身して、ミラーワールドで戦ってたよな！それをどこで見つけたんだ？なんで変身して龍騎になってたんだ!?!」

「き、城戸真司」

俺はこの出会いが偶然とは思えなかった。道端で見つけた龍騎のカードデッキ、死んだはずの龍騎の変身者、城戸真司。ただの偶然でこんな奇跡が重なる訳が無い。俺は運命を感じずにはいられず、ただ

ただ立ち尽くすことしか出来なかった。

仮面ライダー龍騎

「なあ、アンタの名前は？」

「危ない危ない、普通に名前と呼ぶところだった。俺は仮面ライダーになる前から仮面ライダーを知っている。だからこそ下手な行動は出来ない。もしも俺の素性を隠さずに行動しようものなら全てのライダーを敵にまわしかねない。だから言葉には気をつけているが」

「ああ悪い！名乗りもせずに色々聞いたりして。俺は『城戸真司』、仮面ライダー龍騎だ。本当はそのカードデッキで変身して戦うんだけど、まあ。周りを見る限りだとだいぶ時間が経ったみたいだな、俺が死んでから」

「やっぱり死んでるのか」

「えっ、なんだって？」

「何でもない。そうか、アンタが龍騎なのか。勝手にカードデッキを使ってすまない。本当は自分のベルトがあるんだが、今は諸事情で手元に無くてな」

「ベルトって、アンタ仮面ライダーなのか!？」

「まあな。仮面ライダーゲート、戸島健だ、よろしくな。なあ、カードデッキは返した方が良くか？返さないとドラグレッダーが怒りそうだし、変身できてももう力を貸してくれそうに無い」

「そうか、なら受け取っておくよ」

俺は龍騎のカードデッキを城戸真司に渡す。真司が受け取ったカードデッキをズボンのポケットにしまったところで俺はある話を切り出す。

「なあ真司、お前は死んでるんだろ？『この世界にいたら』色々とまづいんじゃないか？」

「その言い方が気になるけど、まあそうだな」

「込み入った話も色々ある。『俺の世界』に來ないか？」

そう言っただ俺は自分の後ろに扉を出現させ、直接俺の世界に繋がる扉を開いた。

「なんだ、これ」

「俺と一緒にいる間は世界から除け者にされたりはしない。だから俺から離れないでくれ」

俺は扉の中へと歩きだし、元の世界へと戻っていく。真司は戸惑いながらも俺の後を着いてくる。しばらく歩くとやがて到着し、周りの景色が変わる。

「嘘だろ」

「ようこそ、俺の世界へ」

「おう、帰ったか」

「お帰り鍵くん！」

「鍵さん、お帰りなさい！」

「やあ鍵、お帰り。随分苦労したようだね？」

「全くだよ。おいフィリップ、お前俺を助けてくれても良かったんじゃないか？え？」

「そうだね。でも、君自身も楽しんでいたんじゃないかい？」

「ま、まあな」

「鍵、この人達は？」

「俺の仲間。一般人だけど、俺が仮面ライダーだと知った上で支えてくれる人もいるし、仮面ライダーになって一緒に戦ってくれる奴もいる。紹介する、コイツは城戸真司、仮面ライダー龍騎だ！」

「よ、よろしくお願いします！」

俺の言葉と共に店にいる四人は真司に向き直り、一人ずつ自己紹介していく。

「七瀬祥太だ、この店のマスターをやっている。こここの連中からは『オヤジさん』って呼ばれている。お前も気軽にそう呼ぶといい」

「夏川梓です。鍵くんの恋人です」

「恋人いたのかお前」

「まあな」

「快条アラタ、仮面ライダーアインです。コイツは相棒兼ベルトのアインです」

「兼とはなんだMr.アラタ!? まあいい。アインだ、よろしく頼む、

『Mr. 真司』

「み、Mr 真司か」

「フィリップ、仮面ライダーサイクロンだ。よろしく頼むよ『城戸真司』」

「こっちはフルネーム!」

「俺はここを拠点に仮面ライダーゲートとして活動している。もつとも、今は休暇中だけだな。現にさっきまで真司のカードデッキを勝手に使って変身してた。真司、その辺に適当に座ってくれ、俺の事を話す。あの世界で、あの状況で話すのは流石に無理だったからな」

「分かった」

真司は店に設けられたテーブル席に腰を落とし、その向かい側に俺は座る。

「さて、どこから話したのか。どこから聞きたい?」

「つまり、そのブレイク?とかって奴と戦った時に二重人格みたいになつたって事か?すげえな」

「ああ。アラタに「疲れてるだろうから休もう」という提案を貰って、絶賛旅行中だったんだ、そしてあの状況だよ」

必要な事は大方説明し終わった。さあ、どんな質問が飛んでくるのだろうか?

「なあ鍵、お前のその話だと、ゲートってのは大昔のライダーなんだろう?自分の力を後世に継ぐためにベルトに魂を封印したって。さっき聞いたもう一つの人格の喋り方からすると、そいつ実は昔のゲートなんじゃないか?」

「昔のゲート?」

なるほど、確かにそうだ。一人称は「俺」ではなく「私」。それで自分で自分を年寄りと言い、若者に未来を託すと言っていた。彼が初代で俺が二代目、一体何が目的だろうか?ただ単に二代目の俺が心配だったから、という理由だとは思えない。それにアインの話では初代ゲートは自分の魂をベルトに封印する際に失敗して消滅しているはずだ。どういう事だ

「鍵！」

「うおっ!?!びっくりしたあ、驚かせるなよ」

「さつきからずつと名前呼んでたから」

「ああ、悪い。いや、お前がさつき言ってた事について考えてた。もしその通りなら一体何が目的なんだろうってな」

「ふうん？」

なんて話していると突然フィリップとアラタが並んでこちらに近づいてくる。

「城戸真司、頼みがある。すまないが、君のカードデッキを見せてもらえるかい？」

「俺のカードデッキ？別に良いけど。」

真司はズボンのポケットに手を突っ込み、黒いカードデッキを取り出し、テーブルに置く。フィリップはそれを手に取り、自身もズボンのポケットに手を突っ込んで緑色の何かを取り出し、それを見比べる。

「やっぱり。快条アラタ、君も見てみるといい」

フィリップはカードデッキをアラタに手渡し、アラタも自身が持つ紺色の何かとそれを見比べる。

「間違いないですね。真司さん、僕達が持つてる「コレ」って、あなたが持つてるカードデッキと同じものですよね？」

二人はそれぞれ持っていたものをテーブルに置き、真司に確認させる。

「コレって、カードデッキじゃないか!?!しかも蓮と秀一の。」

「やっぱりそうなんですな。」

「僕なりに色々考えてみた。僕達の手元にこのカードデッキがある理由をね。まず、龍騎の世界において本来死んだはずの君が生き返った事、そしてそれと共に蘇った君のカードデッキを鍵が手に取ったこと、そして、やむを得ないとはいえ君が「この世界にやって来た」という事。このカードデッキが存在する理由、充分すぎるほどあるね。そして最大の要因になるであろうものが一つある。城戸真司、君の世界にインベイダーが出現した」

「イ、インベイダー？なんだそれ？」

「俺たちが相手にする侵略者だ。さつき話したろ？」

「ああ、インベイダーって言うのか。それかなりまずいんじゃないのか!？」

「君の言う通りだ城戸真司。あの世界を守るはずのミラーライダー達が全員死んだおかげで、君の世界は今守れる者が誰一人いない。13ライダー居る君の世界にライダーになれるのは死んだはずの君だけだ。ここで君が変身して戦えば矛盾が生じてまた君が消滅しかねない。それでもいいと言うなら城戸真司、僕達を手伝ってくれないか!？」

俺たち三人は真司に目を向ける。真司はしばらく沈黙した後ついに口を開き、そしてこう言った。

「分かった、こちらこそよろしく頼む。元々、俺は死んでる人間だ。一度死んでるんだ、二度死ぬのだって怖くないよ」

「お前がそう言ってくれて本当に助かった。一緒に世界を救おう!」
「ああ!」

俺と真司は、アラタとフィリップを連れて再びこの世界に戻ってきた。見てみるとミラーワールドからのモンスターの侵食が始まっており、周りを見てみるとどこを見てもモンスターしか居ない。

「クソツ、早いな」

「なんだよこれ。モンスターはこっちの世界には居られないはずだ!なのになんで!？」

「アレはモンスターの力を持ったインベイダーだ。インベイダーは他から力を吸収することが出来る、こっちに居ようがミラーワールドに居ようが関係ないんだ!」

「そんな」

「早く何とかしましょう!」

アラタとフィリップはズボンのポケットのカードデッキを取り出し、それを地面の水溜まりにかざすと、Vバックルが出現する。

「お前ら、実はその状況結構楽しんでんだろ?」

「まあそれなりに！」

「せっかくの他のライダーに変身できる機会なんだ。逃す手はない」
「お前らのそういう所結構好きだよ。さて、そろそろやるか！」

俺は下腹部にゲートドライバを当て、腰に巻き付ける。真司も足元の水溜まりにカードデッキをかざし、Vバックルを腰に出現させる。

「二変身！」

俺は『マヴェリックライドキー』をゲートドライバに刺してマヴェリックゲートに、真司は龍騎に、アラタはナイトに、フィリップはゾルダにそれぞれ変身した。俺は変身するなりガンブレードキーを取り出してウェポンライドキーをセットする。

《Ride Weapon! Riders Weapon!》

「ザコが邪魔だ！レジェンドライダーの武器達よ、俺に従え！」

俺達の真上に光の粒子が出現し、直後、今まで出会ったレジェンドライダー達の武器が出現する。「本来の龍騎」とも出会ったので、その中には龍騎の武器も追加されている。

「行け！」

俺の一言で武器達はその場から動き出し、ミラーモンスターの力を持つハーフィンベイダーに攻撃を開始する。開始して20秒くらいだろうか、バカみたいに居たあのハーフィンベイダーの大群を一掃し、侵食を阻止した。

「ああ、アレですか」

「鍵、また使える武器が増えたんじゃないかい？」

「お前すげえな」

「こんなヤツらを相手にしている暇はない、早くミラーワールドに行こう！」

俺達は近くにあった店の窓ガラスを入口に、ミラーワールドへ飛び込んだ。と思いきや

「あだっ!？」

ゴオン、といい音を立ててそのままダイレクトアタックしてしまった。

「鍵さんwwww何やってるんですかwwww」

「つくづブツwwww」

「悪い鍵、コレはwwww」

上から順にアラタ、フィリップ、真司、三人が俺が窓ガラスにただタツクルしただけの光景を見て笑い出す。本当は俺もライダーなのだから入れるはずなのだが。

「お前らなあ！いくらミラーワールドに入れなかったからって、人の失敗を笑いやがってえ！」

そう、入れないのだ。『ミラーライダーではない』から。逆に本来の龍騎である真司や、今限定でナイトとゾルダのアラタとフィリップはミラーライダーなのでミラーワールドに入る事が出来る。

「悪い悪いwほら、肩掴んでやるからさ」

俺は真司に肩を掴まれることで一緒にミラーワールドに入った。

「はあ、大恥かいた。」

「過ぎたことを言っても仕方ないですよ鍵さん」

「うるせえっ！だいたいお前ら笑いすぎなんだよ！」

「まあ落ち着きたまえ鍵、前を見るんだ。ほら、どうやらお待ちかねらしい」

ゾルダの姿をしたフィリップに促され、前を見てみると今回の主犯と思われるインベイダーが居た。姿からして、どうやら吸収したのは『仮面ライダーオーデイン』の力のような。さしずめ『オーデインインベイダー』というところだろう。

「ゲート、か。私が聞いていた姿とは随分と違うようだか？」

「これも一つの力ってことだ。この世界から消えてもらうぞインベイダー。」

俺はゲートドライバーからマヴェリックライドキーを引き抜き、新しく水色のライドキー、『ナイトゲートライドキー』を刺し込む。

「アップデート！」

《World of Guardian Knight!! Kamen Rider Knight Gate!!!》

この変身音を聞く度に「うるさい」とつつこみたくなかったので完全に無視し、右腰から新たに『ブレイドライドキー』を取り出し、それをゲートドライバの二つ目の鍵穴に刺し込み、それを回す。

「グレードアップ！」

《World of Guardian Knight!!! Kamen Rider Knight Gate!!! Type Braidd!!!》

『仮面ライダーブレイド ジャックフォーム』の要素を強くとり入れた新たな姿、『仮面ライダーナイトゲート タイプブレイド』に変身した。更にゲートメモリのスイッチをオンにして、『ゲートガイアソード』を召喚する。ガンブレードキーとゲートガイアソードの二刀流だ。

「全て吐いてもらうぞ、インベイダー！」

「ふんっ」

《SWORDVENT》

通常とは異なる、低い音声で機械音声が鳴り、空から二つの黒い剣が降ってくる。オーティンインベイダーは、地面に突き刺さったそれらを両手に持ち、戦闘態勢に入る。どうやらベントカードを使えるらしい。厄介な能力を吸収してくれたものだ。

「そんなものまで吸収出来るのかインベイダーは？仮面ライダーの能力まで吸収している辺りもうなんでもありだな。いや、過去にライダーの力を吸収した奴が何体か居たが、ここまで本物には近くなかったよな。」

オーティンインベイダーはベントカードが使えるだけでなく、容姿もかなり仮面ライダーオーティンに近い。もはやスーツと装甲の色以外に違いが見えないまでである。しかし、よく見ると腰に巻かれたベルトがかなり歪んでいる。これが奴がインベイダーだという事の何よりの証拠となった。

「流石にこの人数を相手にするのはフェアじゃない、こちらも出させてもらいますよ」

オーティンインベイダーはそう言うと言わんと自身の体を発光させ、そこから数多のハーフィンベイダーを召喚する。しかし、どうにも違和感を

感じる。今までのインベイダーの召喚方法からして、元からストックしていたハーフィンベイダーをその場に出すといった感じだった。だが今回のオーデインインベイダーは違う。ストックしていたハーフィンベイダーを「出す」のではなく、自身が「生み出している」のだ。これは違和感を感じざるを得ない。

「鍵さん、コイツ。」

「どうやら、今まで通りには行かなそうだね?」

「ああ。おいインベイダー、お前、「何を吸収した」?」

「クククツ、やはりそう来ますか。何を吸収したと思います?」

「てめえつ!!!」

「クハハツ!良いですねその反応。良いでしょう、教えて上げますよ。

私が吸収したものは、『コアミラー』です」

「コアミラーだと!?!」

「コアミラーって何?」

「じーっ!」

「静かにしたまえ城戸真司」

「わ、悪い。」

真司は『コアミラー』という単語を聞いても何も分からないらしい。つまりこの真司は『仮面ライダー龍騎本編の城戸真司』という事になる。そもそも、コアミラー自体『あつたかもしれない世界線のもの』であり、本編にはまったく登場していない。つまりif設定のものだ。それが今オーデインインベイダーの能力として実在している。一体どういうことだろうか?

「なるほどそういう事か。そうだよな、お前らだつて世界を超えられるんだよな!?!だが、なぜこの世界なんだ!?!」

「どうやら、私がコアミラーのある世界を訪れた影響で物語が変化し、二つの世界線が一つに交わったようです」

「なんだと!?!それじゃあ、お前が吸収したオーデインは。」

「いえ、私が吸収したオーデインは紛れもなくコアミラーが存在する世界線のオーデインです。こちらの世界と融合したあとの、ね」

融合か。なら納得出来る。いや、何一つ納得出来ないが今はこれで

納得するしかない。オーデインインベイダーが言うには、進化する前のインベイダーが世界が融合した直後にコアミラーが存在する世界の線のオーデインを吸収したらしい。そしてその後コアミラーを見つければ、それも自分の能力として吸収した。という事らしい。

「お前が能力を手に入れた経緯は分かった。真司が生き返ったのも、大方お前の影響だろう。でも他のライダー達はどうしたんだ？なんで真司だけなんだ？」

「他の方々は、この世界の融合の圧力に耐えきれず、蘇生に失敗してしまっただけでしょう。しかし彼はそれに耐え切って蘇生に成功した、それだけの事です」

なんだよそれ。オーデインインベイダーのあまりにも無感情な物言いに俺は腹を立てて心の中でこう言った。ここで怒りに任せて戦おうものならオーデインインベイダーの思うつぼだ。何とか心の声が自分の口から漏れるのを耐えたが、真司は我慢出来なかったようだ。俺の心の声を代弁している。

「なんだよそれ。それじゃあまるで、皆が弱いって言ってるみたいじゃないかっ」

「おや、気づかなかったのですか？遠回しにそう言っているのですよ」

「てめえっ!!!」

ついに堪忍袋の緒が切れた真司。カードデッキから新たなカードを引き、それをドラッグバイザーに近づける。するとバイザーの形状が変化し、進化した召喚器『ドクダグバイザーツヴァイ』となった。

「俺を馬鹿にするのはいいよ、[!]実際馬鹿だからな。でも、死んだ戦友^なを笑うのは、絶対に許さねえ」

真司は力強く言い捨て、バイザーの口の部分を開くとそこにカードをセットし、再び口の部分を閉じる。

《SURVIVE》

「サバイブ」という機械音声と共に、真司は怒りの炎をまもって「仮面ライダー龍騎サバイブ」となった。

「っしやっ！」

「大丈夫だって！世界が元に戻ったんだ、俺も元の状態に戻るだけだろ？」

「だって、そんなんで」

「そんなんで良いのか？」と真司は言わせてはくれず、俺の言葉を言葉でさえぎる。

「良いんだよ！これで、本当の意味でライダーバトルが終わったんだ。ほら、周りを見てみろよ」

真司の言葉に促され、俺達は周囲を見渡す。

「な、なんなんだこれは？」

「ミラーワールドが、崩れていく」

周囲の風景にガラスに入るようなヒビが入り、その部分からパラパラと崩れていくミラーワールド。俺はミラーワールドのこの状況と真司の考えを瞬時に理解し、真司にこう叫ぶ。

「おい真司！ここから出るぞ！出ないと、お前が」

「ここを出たところで俺が消えるのは、多分変わらない。それに世界を元に戻せた。それで良い」

「良くない！消えたら元も子も」

しかし真司はやはり言わせてくれず、俺の言葉をさえぎる。

「これ！お前に渡しとくわ。きつとお前の役に立つ！アラタ、フィリップ、お前らもそれを持ってくとい。お前らはそれを正しく使えるからな、きつとアイツらも喜ぶ」

真司は俺達にカードデツキを託し、光の粒子となって消滅した。

「行こう、鍵、快条アラタ。もうすぐこの世界は消滅する」

「行きましょう、鍵さん」

「ああ」

俺はフィリップとアラタに肩を掴まれながら、崩れゆくミラーワールドを後にした。

「戻ってきたな」

俺達はミラーワールドから元の世界に戻り、同時に変身を解いた。

「城戸さん、消えてしまいましたね」

「っ!?!二人とも、見たまええ!」

フィリップはそう言うがいったい何を見ればいいのか分からず、と
りあえず前を見る。すると視界に入る全ての窓ガラスや鏡にヒビが
入り、そしてそこから光の破片飛び散る。

「ミラーワールド、本当に消滅したのか」

やがてその光の破片は青白く変色し、光の粒子となり、ゲートドラ
イバーの左側に設けられたホルダーにあるアビリティライドキーに
全て吸収された。

「これは。行こう。この世界での用事はもう済んだ」

俺はフィリップとアラタと共に、龍騎の世界を後にした。カード
デッキから姿を変えたそれぞれのライドキーを手にしたまま。

キバっていくぜ!

奇妙な笛の音色とともに夜闇の雰囲気が大きく変わり、大きな満月が紅く、そして妖しく輝く。紅い満月の真ん中に蝙蝠こうもりのような、しかしそれでいて人間のようなシルエットを持つ何者かが空を華麗に舞い上がる。

「ウェイクアップ!」

「はあっ!」

やがて異形とも思える何者かの攻撃は「インベイダー」に命中し、直後再び地面に着地する。

「グツ、やるなっ、仮面ライダーよ」。しかし、これからもやってくる我が同胞たちは、こんな物では無いつ!精々、『ゲート』がやって来るのを期待するのだな。」

インベイダーはそう言い残して爆散し、自身の世界を終わらせた。「ゲート、か。ここに来てよく耳にするようになったね、キバット」「そうだな。しかしアイツ、「これからもやってくる我が同胞たち」って言ってなかったか?あんな訳分からないやつがまだ来るってのか!?!」

「いったい何が起きてるんだ。」

ようやく元の世界に戻ってきた。皆の元へ帰ると、梓が真っ先に俺に抱きついてきて、「おかえり」と言ってくれた。俺も「ただいま」と言つて、梓をしばらく抱き締めた。俺の居ない間に何も無かつたか。フィリップに説明を求めたところ、「愚かにも君に挑もうとした輩やからが居たが、僕と快条アラタで撃退しておいた。僕らに勝てないようじゃ、鍵には到底勝てないだろうからね」との事。どうやらフィリップ達が俺の代わりに戦ってくれてたようだ。しかし、どんなに二人が頑張ってもインベイダー達が他の世界を侵略するのは変わりないよううで、帰ってきて早々嫌な言葉を聞いてしまった。

「鍵、次の世界だ」

「分かった。今度はどんな世界なんだ?」

「仮面ライダーキバの世界だ。もう既に侵略が始まっている。何度か撃退しているようだけど、そろそろ限界だろうね」

「キバの世界か。よしフィリップ、行こう」

「あークソつ！またかよ！おい渡、コイツら倒しても倒してもキリがねえ！こんなのどうしようもねえよ！」

「くつ、どうすればいいんだ?！」

俺達がキバの世界に来た頃には案の定もう戦闘は始まっており、キバが何とか持ちこたえてるといふ感じだった。ガルル、バツシャー、ドツガ、三人の従者を呼び、状況に応じて使い分けているが、正直もう限界に見える。むしろ限界を超えているのだろう。証拠に、キバからは嘆きの声が聞こえる。

「頼れば良いんじゃないかな?専門のライダーに」

「え?君は」

「フィリップ、行くぞ。アラタも居るなら、そろそろ出てきて欲しいかな」

この場に姿が見えないが、居るはずのアラタにそう呼びかける。

「バレてましたね」

「着実に怪盗としての腕を上げてるみたいだな」

「ええ。一応、仮面ライダーアインなので。修行もしないとアインがうるさいですからね」

「当然です。Mr.アラタ、あなたは私の後継者だ。その事をお忘れなく」

「だからこうして修行しているんじゃないか。鍵さん、フィリップさん、行きましょう!」

「ああ!」

「変身!」

俺達はそれぞれの変身アイテムをセットし、それぞれ仮面ライダーゲート、仮面ライダーアイン、仮面ライダーサイクロンへと変身した。

「殲滅開始!」

「予告しよう。本日、貴方達の運命を頂戴する!」

「さあ、お前の罪を数えろ！」

決まった。それぞれの決めゼリフを言い切つてやり切つた感じを感じながら、ハーフィンベイダーの群れに飛び込んでいく。俺はガンブレードキーとゲートガイアソードを取り出していつもの二刀流で、アラタはガンブレードキーツヴァイとアビリティライドキーを多様したトリッキーな戦闘スタイルで、フィリップは拳や足に緑色の風をまとして、それぞれハーフィンベイダーを殲滅していく。

「はあっ！ふっ！」

「こつちだよインベイダー！もう遅い！」

「その程度かい？」

「凄い、僕達が苦戦した正体不明の敵をあんなにはやく！」

「なあ渡、アレがゲートつて奴じやねえか？」

「うん、僕もそう思う。あの三人の中のどれかだと思う」

「あの緑色のはく、ゲートつて感じはしねえな、一人だけベルト違うし。あの紺色のと白いのがベルト似てるな？ゲートは確か門番なんだっけか？あの白いのはどちらかと言うと『怪盗』だな」

「つて事は、あの紺色のライダーが、仮面ライダーゲート？」

「なんじゃないか？ベルトもなんかゲートつて言ってたし」

「世界の門番、仮面ライダーゲート」

「さて、調理実習と行こうか」

俺はベルトの右腰にぶら下がったホルダーから、新たに手に入れたミライダーのライドキー、『シェフライドキー』を取り出し、ベルトの二番目の鍵穴にセットする。

《Ride Cross!Chef!》

「柊一郎、力を借りるぞ！グレードアップ！」

《World gate keeper!KamenRider Gate!Type Chef!》

頭にはシェフの代名詞とも言えるコック帽のようなものをかぶり、左右の腕にはコンロ型のガントレットが装着され、体中にコックコートのようなアーマーが装着された。「仮面ライダーゲート タイプシェフ」だ。

「そろそろ手料理がしてみたいと思っていたところだったんだ、丁度いい。焼き加減はどうする、レア?」

そう言っただけは自分の拳に装着されたコンロ型のガントレットから火を発生させ、まずは弱火で。

「ミディアム?」

中火へ。

「それともウエルダン?」

そして強火へ徐々に変化させ、拳に炎をまとってインベイダーを攻撃していく。更に右手にガンブレードキーを、左手にゲートガイアソードをそれぞれ持ち、二つの剣に炎をまとわせ

「それか、欲張ってフルコースでも行ってみるか?」

文字通り「焼き切った」。

「鍵さん、その力は?」

「仮面ライダーシェフ、未来のライダーの力さ」

「未来にもライダーは居るのか。そう考えると、僕達がここまでやって来たのも、無意味では無いと思えて、嬉しくなるね」

「ああ。たとえば俺達が倒れようとも、インベイダーの他にも悪意を持った奴らが現れようとも、俺達の魂を受け継いで、仮面ライダーに変身して、未来に繋げていってくれる。こんな嬉しい事も、中々ないよな!」

俺はベルトにセットされていたシェフライドキーを抜き、ガンブレードキーに刺し直し、それを右に捻る。

《Ride Attack! Chef! Bon Up Teat! World Break!》

「メインディッシュはこれで決まりだ!」

必殺技を発動した事によってガンブレードキーはシェフの専用武器、「ミートカッターブレード」へ、ゲートガイアソードも、中華包丁型の大剣に変形し、デタラメにハーフィンベイダー達を切りつける。

「ぶつ切りにして盛り付けたら完成だ! さあ、召し上がれ!」

ハーフィンベイダーを乱雑に切りつけ、最後の一撃を食らわせるのと、大爆発して殲滅した。

「お粗末さま」

「アレが、ゲート」

「はあくお疲れ、フリリツプもアラタも」

「ああ。鍵、君がさつき倒したのでこの世界に存在するインベイダーは全て消えた」

「逃げられましたね」

「ああ。どうする？このままこの世界に残って、リーダー格が出てくるまで待機するか？」

「そうしよう。元の世界に帰ってまたここまで戻るとなると、流石に時間がかかりすぎる。快条アラタ、君もそれで良いかい？」

「はい、構いません」

「よし、じゃあ今回は一度解散しよう。お疲れ」

そう言っただけで俺達はその場を離れようとする、後ろで傍観していた青年が俺達の近くへ歩み寄ってくる。

「待って下さい！」

「（紅渡か）君は？」

「僕は紅渡、仮面ライダーキバです。さつきは助けてくれてありがとうございます。ありがとうございました。あの、お礼もしたいので、良かったら僕の家に来ませんか？」

これが、俺とキバの初めての出会いだった。

仮面ライダーキバ

渡は部屋に飾られた綺麗なヴァイオリンと弓を手に持ち、顎あごをヴァイオリンの本体にあて、音楽を奏で始める。渡は音楽と一体となり、美しく、かつ華麗な音色を響かせる。俺達が渡の奏でる音楽に聴き惚れているとどうやら終わりに近づいたようで、最後に激しめの和音を奏で、指でヴァイオリンの弦を弾いて曲を終わらせた。静かに顎からヴァイオリンを離し、俺達に一礼した。感動のあまり俺は拍手せずにはいられず、フィリップとアラタも、俺の拍手に釣られるようにして拍手を شدした。

「ありがとうございます」

仮面ライダーキバの本編で渡が何回かヴァイオリンを演奏していた為、渡がヴァイオリンを演奏できるのは知っていたが、実際に生で聴いて見た後でも、渡の腕の良さを改めて実感出来た。

「凄いじゃないか渡！お礼にヴァイオリンを演奏してくれるって言うってたけど、まさかここまでとはな。」

「僕の腕は、多分父親譲りです。僕の父は、世界的に有名な凄腕のヴァイオリニストで、でも物凄い自信家で、女好きで、とにかく自由奔放なんです。でも、本気で惚れた女性や音楽に対してはどこまでも真っ直ぐでどんな無茶でも出来る人なんです。僕が今使ったこのヴァイオリンは『ブラッディ・ローズ』、父と母が共同で作り上げた、僕が知りうる中では最高のヴァイオリンです。僕が今こうしてヴァイオリンを作っているのは、両親の形見とも言えるこれを越えたいと思っただけなんです。僕の、原点です」

(紅音也とパールシエルファンガイアか)

「そうか。話してくれてありがとうな、渡。でも、他人である俺達に何でそれを話してくれたんだ？」

「何ででしょう、僕にも分かりません。あなた達と話していると、楽しくてついつい口がすべっちゃいます」

「そうか、ありがとう。それは嬉しいんだけど、でもな渡、相棒も相手にしてやれよ。お前の相棒、泣きそうになってるぞ」

俺がそう言うと言ったような顔をして後ろを振り向く。すると渡の目には、大きな赤い目に溜めた涙をこぼさずにこらえ、今にも泣きそうな金色の蝙蝠こうもり、『キバットバット三世』の姿が映った。

「き、キバット!? どうしたのそんな今にも泣きそうな顔をして!」

「だってよ渡、お前俺が何度呼びかけても全然気づいてくれなかったじゃねえか。」

「ごめんごめん。それでどうしたの?」

「ああ。ブラッディ・ローズが反応してるぜ」

キバットバット三世の言葉に促され、渡がブラッディ・ローズの方を向くと、何かに取り憑かれたように不気味な音を響かせ続けるブラッディ・ローズがあった。同時にフィリップも今回の親玉でもあるインベイダーの反応を感知したらしい。どうやら戻ってきたと見て間違いないだろう。

「行くか」

俺達がそれぞれのバイクに乗って現着した頃には例によつて侵略が始まっており、瓦礫にまみれた崩れた街となっていた。さて、今回のインベイダーはどんな奴だ?

「ウフフ♪ やっぱり最高ね、人間の愛するものを壊していくのは♪」

なるほど、今回は女だ。そして、どうしても渡とは戦わせたくない見た目をしている。

「鍵さん、今回のインベイダーの姿って。」

「ああ、パールシエルファンガイアだな。」

今回はどうやら記憶から能力を吸収したタイプらしく、どうやら渡の記憶から『母親の記憶』を吸収して進化したようだ。そして渡の母親、つまりパールシエルファンガイア、真夜だ。さしづめ『パールシエルインベイダー』というところか。

「パールシエルファンガイアか。確か紅渡の母親だったね」

「正確には、人間態の時は真夜って名前だな。パールシエルファンガイアは二人いるが、おそらく真夜の方を吸収したで間違いないだろう」

？

「母、さん。母さんだよね!? どうしてこんな事するの!? なんて!」

「まずい、渡がパールシエルインベイダーを完全に真夜だと、自分の母親だと思い込んでいる。これはまずい。渡は純粹で、それでいて優しい心の持ち主だ。それ故に何度もその優しさをファンガイアに利用され、ピンチに陥った事が何度もあった。このままでは今回も」

「渡、助けて。何者かに体を勝手に操られて身動き出来ないの! お願
い!」

「母さん。今助けるからね母さん! 変身!」

「渡はキバットに左手を噛ませ、腰に鎖が巻き付くようにして出現したベルトにキバットをセットし、仮面ライダーキバに変身した。」

「母さんの中から出ていけ! ぐあつ!」

「ウフフフツ」

「ダメだ。パールシエルインベイダーは渡が自分を母親だと信じ切っているのをいい事に、渡を好き放題にしている。」

「ああ渡、私苦しいわ。早く助けて」

「母さん」

「パールシエルインベイダーは声も似ている。その上、渡の記憶を吸収しているんだ。どんな母親だったかも理解した上で演じているのだろう。」

「鍵さん、僕達も! このままだと渡くんがやられてしまいます!」

「変身しよう、鍵!」

「分かってる!」

「変身!」

「俺達もそれぞれ仮面ライダーゲート、仮面ライダーアイン、仮面ライダーサイクロンに変身し、パールシエルインベイダーに攻撃する。」

「殲滅開始! はあつ!」

「あなたの運命を頂戴する! ふつ!」

「さあ、お前の罪を数えろ! せいっ!」

「ぐうっ!」

「待って下さい皆さん! 母さんはインベイダーに操られているだけなんです!」

「そこをどくんだ渡！そいつは紛れもないインベイダーだ！」

「お願いします！信じて下さい！」

「操られてるだけなら良いんだけどな、それなら何とかならなくもない。が、そいつはどうにもならない。お前の母親をただ演じているだけの偽物なんだからな！」

俺がそう言うのと、俺達に攻撃されて渡の後ろで倒れていたパールシエルインベイダーが復活し、渡を後ろから攻撃する。

「カハツ・母、さん。」

「ウフフツツ♪ごめんなさい渡、本当にごめんなさい♪」

渡は後ろからの強攻撃と裏切られたというショックで変身を解除してしまい、地面に倒れ込んでしまう。

「渡！」

キバットバット三世が真つ先にベルトから離れ、渡の顔を足でついたりしながら渡の反応を確かめる。ダメだ、反応がない。完全に気絶している。

「フフ。ウフフフフツツ♪ごめんなさいね渡、本当にごめんなさい♪あなたが純粹で簡単に騙されてくれるから、お母さんついはいはしゃいじやったわ♪」

「お前つ、渡がどんな思いでお前を守ったと思って。」

「知らないわ。この子が勝手に騙されて、この子が勝手に私を守っただけ。この子が純粹な子で助かったわ♪」

家族でないのは勿論、親戚ですらない赤の他人が何ただ一人に肩入れしてるんだって思った奴、笑えばいい。例えどんなに笑われようとも俺は渡を助ける。

なんでそんなに肩入れするのかって？さあ、なんでだろうな。

「インベイダー、覚悟しろ。俺は今、猛烈にキレてる。」

俺は右腰からマヴェリッククライドキーを取り出し、ゲートライドキーと刺し替える。

《B u r r r r r r r r r r s t ! ! !》

「アップデート！」

《B e r s e r k e r o f p a s s i o n ! ! ! K a m e n R i d e

させ、それをハーフィンベイダーの群れに飛ばして、アラタはルパンガンナーを召喚し、セツトされたルパンブレードバイラルコアのブレードを展開し、それを左手に逆手に持って、それぞれ攻撃していく。「おい渡起きろ！いつまで寝てる！」

俺は渡を守りつつも渡に接近し、ペチツと音を立てて軽くビンタして気絶している渡を起こした。

「アレ、僕は一体……。そうだ、確か母さんに。」

「いい加減に現実を見ろ渡！アレがお前の母親なのか!?奴の心をそっくりそのまま体现したかのような、あんな奴が！」

「ソレは。」

「アイツはお前の記憶から力を得たタイプだ。だからお前の母親がどんな奴だったか、大体は分かる。つもりだ。渡、お前の母親はあんな心無い事が出来る奴だったのか？」

「っ！違う！」

「なら立て！」

「はい！キバット！」

「おっしや！キバっていくぜ！ガブツ！」

渡の顔にステンドグラスのような模様があらわれ、眼が紅く変色する。直後、腰にどこからともなく鎖が現れ、紅いベルトに変形して巻き付く。

「変身！」

宙を飛んでいたキバットバットⅢ世を捕まえ、ベルトにセツトするとキバの鎧が現れ、再び仮面ライダーキバに変身する。

「渡、私を信じて！」

「いいえ、信じません。僕が信じるのは、僕が信じた人だけです！」

キバに変身した渡は、俺の顔を見てそう言った。

「なんだよ、照れくさいな」

ついに俺は耐えられなくなり、キバに変身した渡の背中を強めに叩く。

「痛っ!?!」

「ほら、行くぞ、」

「つてて。はい！」

俺達は走り出し、パールシエルインベイダーに一蹴り喰らわせる。

「キバット、アレやるよ！」

「了解だぜ！渡の為だ、大出血大サービスだ！」

渡は、青、緑、紫の三つの笛のようなもの、「フエツスル」を取り出し、キバットが口を開いてそこにセットする。まずは青いフエツスル。

「ガルルセイバー！」

次は緑のフエツスル。

「バツシャーマグナム！」

そして、最後に紫のフエツスル。

「ドツガハンマー！」

やがて彫刻のような姿をした従者達がそれぞれ右腕、左腕、胴体とそれぞれ憑依し、『仮面ライダーキバ ドガバキフォーム』となった。俺もセットしていたマヴェリツクライドキーを抜き、そこにナイトゲートライドキーを刺す。

《Ride Change!》

「アツプデート！」

《World of Guardian Knight!!!
Kamen Rider Knight Gate!!!
foooooooooo!!!》

「殲滅再開！」

ナイトゲートに変身し、俺は渡と協力してパールシエルインベイダーの殲滅を再開した。渡は左手にガルルセイバー、左手にバツシャーマグナムを、俺は右手にガンブレードキー、左手にゲートガイアソードを持ってそれぞれ攻撃していく。やがて自分たちの強攻撃でパールシエルインベイダーはダウンし、大きな隙を作る。

「トドメだ！行くぞ渡！」

「はい！」

渡が紅いフエツスルをキバットに啜えさせるとキバットはフエツスルを啜えたまま宙を飛び、右脚に巻かれた鎖を破壊して紅い翼を広げる。渡の背後に大きな満月が現れ、紅く変色して空を妖しく照ら

す。

「ウェイクアップ！」

「じゃあ俺も！」

《Knight Gate!!! World Finish!!!》

共に空を舞い、背中合わせになってそれぞれ必殺技を発動し、パールシエルインベイダーに命中させる。

「でああああああああつ!!!」

俺達が同時に着地すると地面にキバとゲートのライダークレストが刻まれ、アスファルトの地面に大きなヒビが入る。

「あああああああああつ!!!」

やがてパールシエルインベイダーは爆散し、断末魔と共にその世界を終わらせた。

「皆さん、ありがとうございます。あの、お礼って訳じゃないんですけど、コレ。」

「キバライドキーか」

「そして僕はこのイクサライドキーを貰っていきます」

「アラタお前、いつの間にか盗ってたのか」

「残念ながら今回はフィリップさんの分は無さそうですよ?」

「そうかい。まあいいさ、どのみち僕達はまた次の世界へ行かなければならない。あまり長居はしてられないよ」

「との事らしいから、俺達はもう行くよ。またな渡」

「はい、お元気で！」

「キバっていけよ！」

《序章》終わりの始まり

「仮面ライダーオリス、白羽レイ。本来存在すら許されない異物、イレギュラー。その存在が許されないゆえに本来は世界に消されるはずだが、何故だ？そうか、時の王であり、この世界の支配者たる者、常磐ソウゴに仲間として認められたからか。だが、それだけでは無いな。何かもうひとつある。ああ、なるほど。『世界の門番』か、面白い。確か、白羽レイは『ゲートの力』を持つていたな、ならば納得出来る。それにゲートや白羽レイと出会ったライダー達。貴様らが奴と出会ったおかげで、本来生まれるはずの無いライダーが生まれた。サムライ、ビート、シェフ。そしてまた、新たなライダーが生まれようとしている」

『D e i t a ！』

「俺に力をアマゾンツ!!!」

『W e e k ・ m e a t S t r o n g d i e t ！』

「あああああああああああああつ!!!」

「仮面ライダーアマゾンデルタ。アマゾンスの世界の平行世界に生まれた新たなライダー。ゲートとの出会いが生み出した第五のアマゾンライダー」

『ソウルドライバー！』

「変身ッ！」

『ヘンシン！レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム!? アイムアカメンライダー』

「レベルアップ！」

『ガツチャーン！レベルアップ！メダルフェルカーニバル！メダルソウルクラッシュ!!』

「さあ、ゲームを始めようか！」

「仮面ライダーソウル。エグゼイドの世界の平行世界の檀黎斗が新たに生み出したドライバーと、それを使用して変身する次世代の天才ゲーマー。Mの後継と謳われる者」

「なあお前、悪魔って信じてるか？そもそもいると思うか？いない？そうだな、普通のやつはそう答えるよな。いるんだなあこれが、ここにな！変身ッ！」

「仮面ライダーヘキサ。悪魔の力を使い、使い魔達を呼び出して戦う異色のライダー」

これが何を意味するか、僕達は、俺達は、まだ分かっていなかった。「これ以上はいかん、一気に世界が増え過ぎた。早急に、オリスを排除しなくてはな」

これは物語の始まりにすぎない。いや、これはあくまで序章だ。まだ始まってすらいらない、始まる前兆なのだ。『彼女』がオリスを『物語(世界)から』排除しようとする時、全てが動き出す。本来生まれるはずのない物語はやがて一つに交わり、破滅へと向かうだろう。それでも、彼らは抗うのだろうか、このまだ知らぬ絶望的な状況に。

「な、なんだ、これ」

「体が光って、あっ消えた」

「一体何が起きようとしているんだ」

さあ、終わりの始まりだ。

1st. E p アマゾンデルタ

恐竜、それは太古に存在した地上を制する者たちの総称。そんな恐竜達に憧れ、幼いその心を以て現代に恐竜の遺伝子を蘇よみがえらせようとしている者が居た。猪瀬竜牙いのせりゆうが、それが彼の名だ。彼は考古学者にして、同時に一人のアマゾン細胞研究員でもあった。

ある場所で、二つの異形が闘っている。一つは人型でありながら蠍さそりのような姿形をとった異形、サソリアマゾン。もう一つは人間のようでありながらその狂人的なパワーをもって戦いの場を制する異形、猪瀬竜牙だ。

「ほらほらほらほらさつきまでの威勢はどうしたっ！俺を喰うとか言う割には全然喰えてねえな、まだ変身してすらいないぞー！」

「グ、グウツ、コイツ、本当二人間力!？」

「人間？そんなもんとつくにやめたよ。今の俺はお前らと同じ『アマゾン』だ」

「ソウカ貴様、モシヤト思ツタガ、既二人間ヲヤメテイタカ。ナラ、ナゼ我々ト敵対スル!?人間ハ我々ニトツテタダノ食糧デシカナイ! 貴様モアマゾンナラバワカリキツテイル事実ノハズダ!」

「はあ、わかってねえなあ。だから『失敗作』なんだよ」

「ナンダト!？」

竜牙は普通の人間に聞こえるか聞こえないか程度の声で異形を挑発し、複眼を持つ黒いベルト、『アマゾンズドライバー』を装着して左側のグリップを手前に捻った。

《DELTA》

「アマゾン」

やがて竜牙の周りに水色の炎が発生し、その衝撃で突風を起こす。突風は蠍の異形を軽く吹き飛ばす。

「グウツ!？」

《Week meat Strong dieat!!》

「グウウウラアアアアアアアアツ!!!」

ゾンの身体はドロドロと溶けだし、黒い粘液の中からサソリアマゾンのコアが出現する。竜牙はそれを拾い上げ、力任せにそれを握りつぶし、そして変身を解除した。

「腹減った、帰るか。って言いたいけどそうも行かないよな。一体なんなんだこの光。って、うおおあつ!？」

やがてその謎の光は竜牙の全身を包み込み、竜牙と共に姿を消した。どうやら彼女が動き出したらしい。交わるはずのない物語は、彼女の行動ひとつでやがて大きく交わっていく。

1st. Eppソウル

1 1 1 1 1 1 0 1 0 1 1 1 1 0 0 1
1 1 1 1 1 1 0 1 0 1 1 1 0 0 0

GAME START

さあゲームスタートだ。エナジーアイテム「変身」を使用して

キャラクターセレクト

変身した直後、左腰に添えた『キメワザスロットホルダー』のボタンを何度か押し、ステージセレクトをする。セレクトするとやがて周囲の景色はどこまでも広がる草原へと変わっていく。対する対戦相手は、マイティアアクションXのボスキャラであるバグスターソルティイ。ステージが完成すると同時に、右手に俺の専用武器、『ガシヤコンブレイザー』が出現する。ガシヤコンブレイザーはガントレット型の腕に装着する武器だ。剣と銃が一体となっており、刀身を展開、または収納する事でブレードモードとガンモードを切り替えることができる。

「一度言ってみたかったんだよね。ノーコンティニューで、クリアしてやるぜ！」

『シャッキーン！』

「シャッキーン！オラアッ！」

さあ始まりだ。変身し、ガシヤコンブレイザーを使って戦うこの男、「秋音裕翔」は、ガシヤコンブレイザーをブレードモードに変形させて戦う。この秋音裕翔はあらゆるジャンルのゲームでその眠る才能を発揮しており、特にメダルゲームにおいては、輝かしい功績を残している。今までワンゲームでジャックポットを外したことは無く、全てのゲームにおいて勝利している。メダルゲームは結局はコンピュータが決めた数値の確率、つまり運で決まる。そのため「チーターでは無いか？」と疑われる事も少なくは無かった。そこで、ある検証が行われた。二回勝負をし、一回目は何もせず二回目には裕翔の体を調べ、チートに必要な道具などがあるのではないか、あった場合、

それを取り上げて勝負をさせるといふ物だった。怪しいとされたア
クセサリーなどは全部取り外し、携帯も含め、全てを没収した。結果
は変わらなかった。なんと裕翔はコンピュータが決めたその確率
すらも利用し、頭で計算し、勝利していたのだ。この検証により、裕
翔が真正正銘の天才ゲーマーだと言うことが証明された。しかしそ
の頭脳を幻夢コーポレーション社長である檀黎斗に目をつけられ、そ
の後不慮の事故で適合手術を行う事となってしまった。彼はこの真
実にまだ氣づいてはいないが、その手術で見事に適合して『仮面ライ
ダーソウル』としての才能を開花させた。

「さあて、なにを使うかなあ。よしこれだ！」

ソウルは右手の手のひらを開き、そこに「エナジーアイテム《分身》」
を召喚した。

『分身ッ！』

ソウルが右手でその黄色エナジーアイテム《分身》をキャッチする
と、エナジーアイテムはその場で分解され、ポリゴンとなり、光に変
換され、ソウルに吸収された。やがてソウルが一瞬黄色く発光し、1
0人にまで分身した。

「さて、どーれだ！」

『ガッチーンッ！』

ガシヤコンブレイザーブレードモードの刀身を折りたたみ、今度は
ガンモードに変形させた。本物を含めた分身たちは一斉にガシヤコ
ンブレイザーのAボタンを連打し、ガシヤコンブレイザーにエネル
ギーを蓄積して一気にそれを放った。ソルティの周りにいた雑魚バ
グスターを一掃し、ついにソルティ一人となった。さあ、トドメだ。
「必殺技はこれで決まりだな！」

ソウルはソウルドライバーのレバーを一回引き、キメワザを発動す
る。

《MEDAL! CRITICAL STRIKE!》

《JACKPOT!》というゲーム表示と共に地面から無数のメダル
が湧き出て、メダルの山ができ、そしてその頂上にソウルが立つ。
その中のメダルのいくつかがエナジーアイテムに変化し、そしてその

いくつかの全てがソウルの右足にまとわる。マッスル化でキメワザの威力の強化、高速化で加速、分身でキメワザの分身、その他、様々な効果を付与し、ジャンプ強化で強化された脚力で空高く飛び、ジャンプの限界に至ったところでライダーキックの姿勢を取り、そのままソルテイに向かって一直線に滑空した。ライダーキックは見事にソルテイに命中し、ソルテイの体はメダルに変化していき、そして炸裂した。

《GAME CLEAR!》

ソウルはゲームクリアの表示を見てドライバーからエナジーアイテムを引き抜き、変身を解除した。変身解除と共に、エナジーアイテムは消滅し、変身者である裕翔に戻った。

「おーっしゲームクリアだ！帰って風呂に入ろう！ん？なんだこの光
俺から出てねえか!?ちよっちよちよ待て！おい！」
裕翔の声も謎の光に届かず、やがて裕翔はどこかへ消えた。
?

しかしこれも数ある分岐した物語の中の一つ。分岐した物語はやがて一つに交わる。さて、どのように物語は進んでいくのだろうか？この時点ではまだ誰も知る由もない。

「状況は？」

「見ての通りだ。いつどこで契約したのか分からんが、ヴァリアントに変身した人間はもうその頃には意識が無くなっていて、残った身体ぬけがらだけが暴走している状態だ。結果として大惨事、町は壊され、住民は何人か殺され、蹂躪された」

「酷いな。刑事さん、俺がやるからみんなを退避させて」

「お前、でもその力は！」

「悪魔の事は、悪魔がやるしかないでしょ」

「わかった。生きてろよ」

「もちろん」

刑事さんはパトカーの中にある無線機を通して部下を退避させ、この場を俺が受け持つことになった。

「さて、やりますか。変身」

使い魔の魂が込められた弾倉型の特殊アイテム、『シャドウソウル』をズボンのポケットから取り出し、それをトライガンに装填する。トライガンのセーフティーを解除して銃口を自身の頭に当て、引き金を引くと頭から血ではなく闇色の光の粒子が飛び出た。やがて変身音と共に光の粒子はリュウの身体に吸収され、蒼い炎が身体を包んで変形し、完全なる悪魔「仮面ライダーヘキサ」となった。

「It's show time」

リュウは左腰に取り付けられた「トライナイフ」を握りしめ、右手に銃、左手にナイフという遠近に対応出来るスタイルを整えた。

「踊ろうぜーハッ!!」

リュウは先手をうち、ヴァリアントの懐ふところまで一気に接近し、そしてトライナイフを逆手に持って斬り掛かる。しかしヴァリアントもそれになんとか反応する事ができ、長く鋭い爪でトライナイフの刃を受け止める。リュウはそれに対して素早く反応し、トライガンで銃撃する事によってヴァリアントを混乱させ、掴んだトライナイフの刃を解放させた。

「今のは普通に危なかったな。自我は無くなっても、考える脳は残ってるって事か？ならこいつでどうだ」

トライガンの銃身を掴んでリロードアクションを行ない、力が空となった魔弾丸を捨てると、次の弾丸の発射準備が完了する。次の弾丸は……

「いでよ、キメラー！」

発射されたと同時に魔弾丸は光に姿を変え、その光は何体もの生物が融合したかのような、まさに化け物と呼ぶに相応しい生き物、ヘキサの使い魔、『キメラ』が召喚された。どうやらヴァリアントも弾丸から生き物が生まれるとは思わなかったようで、キメラを見てかなり戸惑っている。だがそんな時間は与えない。

「狩れっ！」

リュウの指示でキメラは動き出し、ヴァリアントへの攻撃を始めた。このキメラは鳥類の翼と鉤爪、肉食獣の力強い顎と鋭い牙、草食獣の鍛え上げられた脚力、魚類のエラと尾ひれ。それぞれの長所が全て合わさった使い魔になっている。空に逃げようものならその翼で追いかけて、水中に逃げようものならその尾ひれとエラをフル活用して底まで追いつめ、陸でやり合おうものならそれはもうキメラにとつて餌同然。ヴァリアントに逃げる場所などどこにも無かった。ヴァリアントも恐らくそれを察しているのだろう、だからこそ何も出来ない。ついにヴァリアントはダウンした。

「オーバーキルは鉄則だ、確実に殺るならな。トドメだ！」

リュウは、トライガンにトライナイフをセットし、自身の腰に巻かれたベルトのバックル部分にトライガンの銃口を当てる事で、必殺技を発動した。

《Hexa!Thre!Two!One!Zero!GAME SET!!!Judgment Strike!!!》

「此で永遠にサヨナラだ」

厨二病チックに左手で仮面を覆い、引き金を引いて、トライナイフと合体したトライガンの銃口から、エネルギーの収束された魔弾丸を発射する。同時にヴァリアントの周囲に結界を作った。光の速さで発射された魔弾丸は結界内で跳弾し、幾度もヴァリアントを貫く。やがてリュウは左手から魔法を発動し、跳弾しっぱなしの魔弾丸を回収

し、キャッチ、そして地面に捨て、光の粒子として消滅させた。消滅した魔弾丸が地面に落下したと同時に闇色に発光し、ピキピキと音を立てながら体にヒビが入り、パリンと音を立ってガラス片のように爆散した。

「ふう、終わったか」

やがてリュウはトライガンからシャドウソウルを取り外し、再び自身のズボンのポケットにそれをしまった。しかし、その直後に「それは起こった。

「な、なんだこの光は!? 身体が」

リュウは何かを言おうとしてその世界から、「仮面ライダーヘキサの世界」から姿を消した。

ついに全ての未来のライダーが一つの世界に集った。恐らくここからの物語は誰にも予測出来ない。さあ、楽しもうか。本来存在しない平成ライダーの、歴史の終わりと始まりの物語を。

『ORI, S!』

ライドウォッチのリユーズを回し、

『ICE!』

最後にもう一度リユーズを回す。

『HEULE!』

「変身っ!」

『Trinity Time!3つの力!仮面ライダーオリス!アイ
ス!ウール!トリニティ!トリニティ!!』

「よし、来たね二人とも!」

「あれ、私さつきまで、それよりレイ、これはどういう状況かしら?」
「へなるほど、あれが話に聞いていたインベイダーか。いや、それだけ
じゃないね。アナザーライダーもいる。他にも新種のバグスターと
か、僕らの知らない敵が多くいる!」

「いや、仲間を呼べとは言ったけどそんな形態予想出来ねえじゃん
?え、どう見てもトリニティじゃん」

「俺に「仲間を呼べ」と言われてレイが取り出したライドウォッチは、
紛れもなくトリニティライドウォッチだった。何故俺がトリニティ
ライドウォッチの存在を知っているのか、それは俺の住む世界が元は
「仮面ライダーの居ない世界だった」ということにある。俺の世界で
は、仮面ライダーは子供に多くの夢を与える存在、特撮ドラマとして
知られている。仮面ライダーという番組はゲートが現れた今でも放
送されている。俺はそれを毎週楽しみにしながら見ている。平成最
後の作品となった仮面ライダージオウ、その中に登場したのがトリニ
ティライドウォッチだったのだ。しかしトリニティライドウォッチ
はトリニティライドウォッチでも、種類が違ったのだ。主人公、常磐
ソウゴが使うトリニティライドウォッチは、「ジオウトリニティライ
ドウォッチ」。でもレイが取り出したそれは違った。ジオウトリニ
ティライドウォッチにならって呼ぶなら、「オリストリニティライド
ウォッチ」と言うところか。なるほど、正史からは離れて一つの物語
として独立しているのか。

（だったら、なおさら下手なことは言えないな。俺の軽率な一言でレ

イの世界を破壊しかねない。デイケイドじゃないけど、平行世界の人間の何気ないたった一言で破壊者になりかねないからな)

「新しい力か?」

「うん! 僕と涼香とウール君の、僕たち三人の新しい力だ」

「そうか。なら、俺も新しい力を見せてやる!」

俺は変身用の鍵穴にセットされたゲートライドキーを抜き取り、代わりにナイトゲートライドキーに差し替える。

『Ride Change!』

「アップデート!」

『World of Guardian Knight!! Kamen Rider Knight Gate!!! fooooooooo!!!』

「あくうるせつ。この変身ストレス溜まるわ」

「その姿、僕が初めて君のいる時間軸に行ったときに変身した姿だよね?」

「ああ、今日はこの力の本領を見せてやる!」

『Ride Cross! Ori, s!』

「グレードアップ!」

『World of Guardian Knight!! Kamen Rider Knight Gate!!! Type Ori, s』

やがて三つの仮面がそれぞれ右肩、左肩、胸部に装着され、その他にもいくつかの黒いアーマーが装着され、『仮面ライダーナイトゲート タイプオリス』となった。

「それ、僕らめ!?!」

「なるほど、中間フォームはオリストリニティか」

「その姿って。」

「まあ、そういう事だから。行くぞ!」

レイと共に敵の群れに走り出し、俺は本来相手にする事こそありえない敵を相手にすることになった。

「うわ、フィリップの言う通りだ。アナザーライダーやインベイダーだけじゃない、一体何が起こったらこんなカオスな光景になるんだ!?!」

「でもきつと何か原因があるはずだ！例えば『何者かがこの時代に深く干渉してきた』とか！」

迫り来る敵の攻撃を捌きながら、俺達は言葉を交わす。するとその言葉に応えるように謎の声が聞こえてくる。女性の声だ。

「干渉してきたのではない、貴様が干渉しているのだ。本来存在するはずのない2050年のライダーよ」

「本来存在するはずのないライダー？どういう事だ！」

なるほど、そういう事か。ジオウ本編に仮面ライダーオリスは、もつと言えば白羽レイは居ない。だから彼女はレイをイレギュラーとみなして存在を消去しに来たのだろう。

「鍵、君の言葉って、いくつか引つかかる部分があるんだ。まるでそのライダーの運命を知っているようなね。ねえ鍵、君の知る運命の中に僕は居るかい？」

「さあな。自分で考えてくれ」

「鍵！」

「そんなに知りたいたなら！自分で何とかしろ。俺の何気ない一言が、お前の世界を壊す事だつてあるかもしれないんだぞ！」

「そうだね。ごめん、変な事聞いたね。でもね、何故か分かってしまっうんだ、いとも容易くね。」

「レイ」

「まあ、可能性の話だしね。今を」

「俺はお前を否定しないぞ、レイ」

「え？」

「俺はお前を、いや、『お前達』を否定しない。こうして形になっていく限り、お前たちはそれは一つの独立したお前の物語なんだ、お前の『世界』なんだ。それにほら、俺を見てみる！俺みたいないなライダー、どの時代探したつて居ないだろ？お前なんかより俺の方がイレギュラー、お尋ね者だよ。そんな事一々気にしてたら身が持たないぞ。今は、目の前の綺麗な、俺にドストライクな見た目のお姉さんをどうにかするのが先だ！」

「そうだね、ところで鍵、君つてあーいう女性がタイプだったんだね」

！

「さっきの言葉は気にするな！行くぞ！」

「うん！」

「愚かな。ゲートよ、貴様もイレギュラーだな。一度迄ならず何度もこの時間軸に干渉しおって、これ以上は許されんぞ」

「とか言ってるけどさ、アンタも実はイレギュラーだよな。あんたみたいなのは見た事がない。何者だ？」

「ほう、それに気づくか、ならば教えてやろう」

女は黒いダイヤルの着いた金色のライドウォッチを取り出し、ダイヤルを回してアクティブにした。

《ゾアノヒム》

女は金色のジクウドライバーを取り出し、それを下腹部に添えて巻き付け、ライドウォッチをセットする。セットすると待機音声が流れだし、背後にアンティークな時計が現れる。

「変身」

《Rider Time! Kamen Rider! ZOANOHIMU》

「変身しただど!？」

「我が名は仮面ライダーゾアノヒム。時の調和を保つ、時の番人だ。オリス、貴様を排除する」

「なら、俺はこいつを守る。俺の名は仮面ライダーゲート、世界の門番だ。悪意のある者が世界に侵入し、破壊しようとするなら、速やかにそれを排除する。それが俺の役目だ！コイツの物語がある限り、コイツの世界を守る！」

「そうか。ならば貴様も排除だ！」

「出来るもんならやってみろ！行くぞレイ！」

「うん！行くよ、ウール君、涼香！」

「う、うん！」

「ええ！」

イレギュラーを排除し、本来の歴史に修正する時の番人、ゾアノヒム。そしてそのイレギュラーであり、排除の対象となった物語の主人公、オリス。物語として確立している限り、例えばそれがイレギュラー

であろうと守り続ける世界の門番、ゲート。どちらが正義とは断言出来ない、むしろ正義はゾアノヒムの側にあるのかもしれない。だが、例えばレギュラーにより誕生した物語だったとしても、その物語を守る。それが世界の門番であるゲートの仕事だ。だが俺は物語を守るだけだ、あとの選択はお前にかかっているぞ、レイ。

2nd. E p オリス

もしゾアノヒムの言う「本来の歴史」と言うのが僕の想像通りなのだとしたら、いや、今はタラレバの話をしていても仕方が無いか。だけどそれなら尚更だ、僕がこんなところで立ち止まっている訳にはいかない。本来の歴史がそうであるならば、イレギュラーの僕はその運命を変えなきゃいけない。イレギュラーにもイレギュラーなりの意地があるんだ、それなりの事はしてみせるさ。この世界では僕は変身者0号で開発者、オーマジオウは紛れもなく僕が生み出してしまったものだ。この事実は揺るがない。僕がソウゴ君をオーマジオウに変えてしまった事実は、揺るがない。

「だからこそ、僕はオリスとして戦わなきゃいけない！イレギュラーがどうした、正史がどうした！僕は皆の未来を守る！」

「そうだ、それでいいんだレイ！それでこそ仮面ライダーだ！これからの未来、全ては俺達の選択次第で良い方向にも悪い方向にも倒れるんだ。だったら少しでも自分が良いと信じた方向に持っていこう！」

「ああー！」

僕らは互いの拳を力の限りぶつけ合い、それぞれの武器を取り出してゾアノヒムに向き合う。正史？知らないな。僕らの未来を返してもらうぞ！

「全く、仮面ライダーという者共はいつの時代もそうだ。いつの時代も自分勝手にその後の結末など考えぬ。まあ良い、この場で貴様らを始末すれば歴史は正しいものに戻る。何も問題ない」

なんて、目の前のお姉さんは言ってるけど、残念ながら僕らはそんな一筋縄じゃ行かない。僕らの最大の武器は、未来に抱く希望と今まで紡いできた友情だ。

「はあっ！」

鍵はお馴染みの二刀流、ガンブレードキーとゲートガイアソードで、僕はジカンクラッシュヤーでそれぞれゾアノヒムに対して切りかかり、攻撃を仕掛ける。しかし一筋縄じゃ行かないのは向こうも同じようだ。謎の武器を取り出し、三つの武器の攻撃を一気に受け止める。

攻撃を受け流し、僕達の隙を作ると、左腕からライドウオッチを取り出し、それを起動した。

『メタルビルド!』

「メタルビルドだと!？」

「メタルビルドならこれだ!彼の力なら!」

『グリス!』

ライドクロスタイム!グリス!

僕もグリスライドウオッチを取り出して起動する。ベルトにセツトし、回す事でグリスのアーマーがゲートアーマーの上からかぶり、タイプグリスブリザードに進化したのを確認すると、再びゾアノヒムと対立する。

「そうか!メタルビルドはグリスに倒されてる、メタルビルドの力にはグリスの力って訳か!なら一番近いビルドで行くぞ!」

『Ride cross!Build!』

ラビットラビットとタンクタンクを足して二で割ったようなアーマーがナイトゲートに装着され、「仮面ライダーナイトゲート タイプビルド」となった。

「メタルビルドの攻撃は一撃が全て重い!二人で同時に防ぐよ!」

「了解!」

ゾアノヒムによる紫色の邪悪なオーラをまとったキャタピラ型の攻撃が繰り出され、僕達に迫り来る。僕達は二人がかりで攻撃を受け止め、それを振り払う。

「二でああつ!!」

「ほう、少しはやるようだな仮面ライダーよ。だが私の力はこの程度ではない」

そう言っ次に取り出したライドウオッチは

『クロノス!』

仮面ライダークロノスのライドウオッチだ。

「クロノスか、エグゼイド系のキーは持ってねえな」

「ここは任せて、僕が行く!」

「分かった!俺はドラゴナイトハンターZで支援する!」

鍵はアビリティライドキーをガンブレードキーにセットし、装填された力を僕に撃ち出す。

『Ride Ability! Drago Knight Hunt
er Z!』

「使え！」

「言われなくとも！」

僕はドラゴナイトハンターZのエネルギー弾をジカンクラッシュャーで受け取り、クロノスの力を起動したゾアノヒムを攻撃していく。さすがにあれを受けるのはまずいと思ったのか、ゾアノヒムは自身の武器を使って僕の攻撃を捌いていく。ついには一発も当たらず、ジカンクラッシュャーを弾き飛ばされた。

「さすがに今のを食らってはまずかったな、中々に危なかったぞ。貴様らのその連携、さぞお互いを信頼しあっているのだな？だが、無意味だ」

「チツ、全く当たらなかった！」

「当然だ、私は一分先までの数ある可能性の未来を見る事が出来るのだ。今のお前の動きから予測して、あとは未来を見れば貴様らの攻撃を全て捌ききるなど造作もない」

「何そのチート、そんなのもうかなわないじゃん」

僕が一度諦めかけたその時、鍵は何を「見た」のか、ある事を言い出した。

「それでも無いかもしれないぞ。ゾアノヒムさん、あんたの言うその未来を見れる能力つてのは、俺達の攻撃だけなのか？」

「...どういう意味だ」

「さあな。そろそろだぜ」

鍵がそう言うと、何も無いところから見たことの無い三人のライダーが現れ、ゾアノヒムに立ちはだかる。

「見ツケタゾ、原因！」

「ああ、そうだな。どうやらこのライダーの影響で俺たちはこの場に集まったらしい」

「どうする？倒すか？」

三人のライダーの特徴はそれぞれバラバラで、一人はアマゾンライダーのような銀色のライダー、一人はゲーマーライダーのようなシアンのライダー、一人はそのどちらにも当てはまらない特徴を持った、悪魔のようなライダーだ。

「この三人のライダーたち、この見たことの無いミライドウオッチの」

「狩り、開始イ」

「GAME START!」

「It's Show Time!」

三人のライダーはその場から動き出し、ゾアノヒムに襲いかかる。銀色のライダーはアマゾンズドライバーと思われるベルトからグリップを引き抜いて剣を生成し、ゾアノヒムに斬り掛かる。シアンのライダーは剣と銃と盾を合体させたような武器を取り出し、そして剣に変形させて斬り掛かる。悪魔のようなライダーは自身が手に持つ派手な銃で銃撃する。銃撃する前、銃に装填した謎の宝石で出来た弾倉が特徴的だった。銀色のライダーは攻撃しては空へ撤退し、それを繰り返し、シアンのライダーは状況に応じて銃に切り替え、遊撃する。悪魔のようなライダーは後方から銃撃し、装填した弾倉を取り出してまた別の弾倉を装填し、謎の生物を召喚した。ゾアノヒムも全ての攻撃を捌ききれなくなり、遂に三人のライダーの同時攻撃を食らう。

「チツ、流石にコレは不利だな。一度撤退するでしょう」

そう言うゾアノヒムは闇色の瘴気を身にまとい、どこかへと消えてしまった。

「クソツ、逃ゲラレタカ」

銀色のライダーがそう言うのと三人のライダーは同時に変身を解除し、元の人間の姿に戻る。

「仕方ない、一旦出直すか」

「あく腹減ったー。ん、そこの二人もライダーか？なあアンたら、どっちでもいいんだけどなんか食べ物持ってない？出来るだけタンパク質豊富なやつ」

今の発言で確信した。僕たちに食べ物を求めてきた、銀色のライ

ダーに変身していた者。彼は間違いなくアマゾンライダーだ。アマゾンはタンパク質を摂取しようと、良質なタンパク質を持つ人間を捕食する傾向にある。人間を捕食するたびにアマゾン狩ることを専門とする駆除班に駆除されてきた為、僕の時代では絶滅危惧種だ。アマゾンが絶滅危惧種として国に指定されたのは、人間との共存方法が確立した直後。国の対応はあまりに遅すぎた。アマゾン自体変身しなければ普通の人間の姿と変わらないので、国がアマゾンを探し出し、保護する前に個体数が減っていき、滅ぶのが先だろう。

「さっきの銀色のライダーに変身してたアンタ、アマゾンだな？」

「へえ？」

鍵は一体何を考えているんだ、腹が減ってストレスの溜まってるアマゾンを煽ってどうする！

「凄い殺気だな。安心しろ、別に駆除するつもりは無い」

「あっそ、ならいい。で飯ある？」

敵意が無いと分かった瞬間、彼から放たれていた凄まじい殺気は嘘のように無くなり、再び僕らに食料を求めだした。彼の様子を見た鍵は――

「アンタ金は？」

「ある」

「日本円か？」

「日本円」

「ならすぐそこにコンビニがあるから適当に買ってこい」

「うい」

それで良いのかアマゾンライダーよ、少なくとも僕はそんな風に適当にあしらわれたら嫌だ。この場から消えて十数分、彼は大きめのレジ袋に大量に袋詰めされたさば味噌の缶詰を両手に持って再び現れた。

「あのさ、その袋の中身、何？」

「え？さば味噌缶だけど」

「そんなの見れば分かるよ！なんでそんなに大量に買ったのって話だよー」

「だって美味しいじゃん。タンパク質も豊富だし、俺より美味しい」

「二回も言わなくても分かるよ!」

「あ、あのレイが、ツツコミ役に徹しているだと。」

「僕だって初めてだよこんな経験!」

何故かこの短時間で随分と疲れてしまった。これは良くない、早めにこの状況を何とかしなければ僕がどうにかなる。そんな事を考えながら僕は未来ノートを開き、今まで生まれてきた仮面ライダーのデータが記録されたデータベースを開く。すると新たに三項目、見覚えのないライダーの情報が更新されていた。そう、この場にいる三人のライダーの情報だ。

(仮面ライダーアマゾンデルタ、変身者は猪瀬竜牙。活躍年は2021年? シノビの一年前か。僕の記憶が正しければその年は既にライダーが存在していたはず。あの悪魔みたいなライダーの事は知らないけど、水色のゲーマーライダーもそうだ。そもそもエグゼイドの歴史は終わっているはずだし。)

実は心当たりがない訳では無い。ゾアノヒムがこの時代にやってきた理由とゲートの能力だ。鍵はなぜ、僕らライドウォッチを使うライダーのようにレジエンド達の武器を使えるのか、なぜソウゴくんのように変身出来たのか。僕はこう考えた、「鍵はそうなる事を望んでいた」のではと。当たり前的事だが、何かを作る、何かを壊す、何かを守る、何かを捨てる。こと、「何かをする」において、したい、やりたい、と望む必要がある。いわゆる欲求というものだが、鍵はその欲求が並外れているのではないだろうか? それこそ、「世界の侵略」という現象を起こすくらいには。もちろん、仮に僕の考えが正しかったとして、全部が全部鍵のせいになる訳では無い。それでも、先代のゲートが鍵を二代目を選んだ事で、世界の侵略が始まったのは事実だ。ここら辺の事に関しては鍵に確認しなくては。

「鍵、僕ちよつと気になったんだけど、君ってライダーになる前は何をしてたの? 戦い方が今まで戦いと無縁だった人の動きだったからさ」
「セキュリティに関する仕事だよ。休日はよくオ리지ナルの仮面ライ

ダーの絵とか描いたりしてたな。んー」

「どうしたんだい？」

「いや、ゲートって考えれば考えるほど俺が描いてたライダーにそっくりだなんて」

(これだ。)

確信した。鍵はやはり、ゲートとなる事を望んでいた。

「鍵、ちよつとこっちに。これからの話を彼らに聞かれたらややこしくなるから、場所を移そう。君たち、ちよつと僕ら外すね」

「あいおー」

「わかった」

「お好きにどーぞー」

一人はさば味噌缶を食べ、一人は銃の手入れをし、一人はゲームをしていたが、僕は気にせず建物と建物の間にもちようどいい路地裏を見つ、そこに鍵と二人で入っていった。

「鍵、君のゲートとしての本当の能力と、ゾアノヒムが複数の世界を融合してまとめて滅ぼそうとしている理由が分かったかもしれない」

「本当か!?俺のゲートとしての本当の能力って、一体なんなんだ？」

「君の能力、それは『望んだモノを実現する能力』だよ」

「ゴメン、俺の脳の理解が追いついてない、いや理解出来てるけどチート過ぎて疑わざるをえない」

「君の言いたい事は分かる、でも今は僕の考えを聞いて欲しい。君は仮面ライダーになる前、休日はオリジナルの仮面ライダーの絵を描いていたと言った。それはつまり、無意識にそんなライダーになる事を望んでいたんじゃないのかい？」

「そ、そう言われればそうかも」

「そして君はこうも言った、描いていたライダーがゲートに似ていると。つまり、ゲートになったのは君がそう望んだからであって、ゲートに変身したのは必然だったんだ。その強い望みが、別次元に存在する先代のゲートに届いて、君は二代目となった。そう、君の望んだモノを実現する能力は、ゲートの復活を望まないインベイダー達の侵略を開始させるくらいには強いんだ」

僕がそう言うのと鍵はついに黙り込み、口元に左手を当てて考え出した。少し重く考えすぎてるようだ、これからの戦闘に支障が出なければ良いが。

「別にそこまで深く考える必要はないんじゃないかな、これはあくまで僕の考えだし」

「あるよ、深く考える必要。お前の考えがもし本当だったら尚更だ。もしお前の言うように、俺の能力が『望んだモノを実現する能力』なのだとしたら、望み次第では世界を破壊させかねない。だからこれからどう自分と向き合うべきなのかも、考えないといけない」

確かに、望み方次第でディケイドと同じ存在になりかねない僕が予想した鍵の力。僕が予想した力は、鍵には想像以上に重いのかもかもしれない。

「もし君が門矢士のような破壊者になったら、そうだな、その時は僕が止めてあげるよ。だから安心しなつて」

「そうだな、そうなら安心だ」

未だ不安感を残しつつも、鍵はその顔に笑顔を浮かべた。

「ゲイツよ、いるか」

「俺に何の用だ」

「頼みたい事がある」

「断る」

「ほう？良いのか？お前の守ろうとする世界が消えても。私はいとも簡単に消すことが出来るぞ？」

「っ！あ、あんな世界、守ったところで何になるっ」

「未練があるように見えるな？捨てようと思つても捨てきれない、それがお前だということ。オリスとゲート、この二人を消せ。良いな？」

「分かった」